河正雄コレクション　資料集　第３号

岩田　健



2021年４月

河正雄コレクション　資料集　第３号

岩田　健

２０２１年4月

発行にあたって

「河正雄コレクション」には岩田健の彫刻作品「二人と猫」「朝の母子像」「夕の母子像」がある。この資料集では岩田健を〈二つの視点〉から紹介したい。

第一は彫刻家岩田健の視点。岩田健は母と子をモチーフに、愛らしく心温まる作品を造り続けた。河正雄はその彫刻に命を慈しむ無償の愛を感じ、自らの母を重ね合わせたのだろう。

「岩田健　母と子のミュージアム」(愛媛県今治市) は母と子が「平和を祈る」美術館だと思う。現地を訪れ、その意味が分かった。メインスペースに展示されているのが 23 歳で戦死した「兄の碑」。そのすぐ隣りに置かれている「坊や戦争に行かないで」と「訶梨諦母」。訶梨諦母は鬼子母神とも呼ばれる子供の守り神。母がモデルの「空からの火」もある。母は関東大震災と東京大空襲の時、真っ赤に燃える東京の業火を震えながら見つめていたという。岩田健も終戦間際に特攻隊員として九州に派兵されたが、直前で中止になり九死に一生を得た。「戦争を知らない若い人達に、戦争をいうものがどれだけ多くの母の嘆きを生んだかを考えてくれるきっかけをつくれるかな」。岩田健が自身がそう語っている（図録『岩田健　母と子のミュージアム』)。「母と子のミュージアム」からは、我が子を不条理な戦争で奪われた母の嘆きと、平和な地球（せかい）で遊ぶ子どもらの笑い声が聞こえてくる。彫刻家岩田健の「平和の希求」を伝えたい。

第二は岩田健が河正雄に託した「永瀬四朗日記」の視点である。岩田健は 2005 年、河正雄に自著『荒川と御成街道と』を寄贈した。その本に挟み込まれていたのが「永瀬四朗日記」。永瀬四朗は岩田健の叔父（父岩田三史の実弟）で、関東大震災当時、在郷軍人会川口町分会長（陸軍予備少尉）だった。その永瀬四朗が書き残した貴重な日記だ。

河正雄は永瀬洋治（永瀬四朗の次男、元川口市長）と 50 年を越える交流があり、生前「義父が関東大震災時に川口での記録を残した手帳を保管しているので君に見せる」と話していたが、実現することなく死去された。永瀬洋治は河正雄との約束を守り、歴史の事実を伝えるために岩田健に託したのだろう。関東大震災をはじめ、歴史の渦の中で犠牲になった在日同胞を慰霊し、人権を擁護することは河正雄のライフワーク。永瀬洋治もそんな河正雄に信頼を寄せていたからこそ、義父の「日記」を託したはずだ。

「永瀬四朗日記」は忘れられたまま河正雄の自宅に保管されていたが、2020 年 5 月、コロナ禍で書棚を整理していた際に見つかり存在が明らかになった。「永瀬四朗日記」に書かれた事実と歴史的な意味などを紹介する。この資料集が、何の罪のない人々が殺害された朝鮮人虐殺のような悲劇を、二度と繰り返さないための一筋の光となれば幸いである。

2021 年 4 月

菊地 正志（きくち・まさし）

ジャーナリスト、埼玉新聞記者。埼玉新聞社経済部長、編集局文化くらし部長、編集委員などを歴任。1958 年群馬県出身。さいたま市在住。

■目次

はじめに

発刊にあたって（菊地正志） …… 2

目次 …… 3

Ⅰ 河正雄コレクション

河正雄コレクションとは …… 4

「二人と猫」「朝の母子像」「夕の母子像」 …… 5-7

Ⅱ 岩田健「母と子の祈り」

岩田健プロフィル …… 8

岩田健彫刻の歩み（中村傳三郎） …… 9

仲間・岩田君（佐藤忠良） …… 12

「本当のやさしさって何だろう」（伊東豊雄） …… 13

「ミュージアム誕生」（岩田健） …… 15

詩「林中挽歌」（岩田健） …… 16

彫刻「訶梨諦母」（岩田健） …… 17

詩「母は忘れない」 …… 18

彫刻「兄の碑」（岩田健） …… 19

詩「山嶺」（岩田俊） …… 20

岩田俊プロフィル …… 21

「兄のこと」（岩田健） …… 22

「俊の一生」（岩田三史） …… 24

「彫刻と私」（岩田健） …… 27

彫刻「空からの火」（岩田健） …… 28

Ⅲ 「永瀬四朗日記」と関東大震災

「永瀬四朗日記」 …… 30

永瀬四朗プロフィル …… 34

「埼玉であったこと」（河正雄） …… 35

「荒川と御成街道と」（岩田健） …… 43

永瀬四朗の「関東大震災時日記」（関原正裕） …… 49

Ⅳ 資料

関東大震災と川口 …… 52

在郷軍人会 …… 55

「不逞鮮人」の通達 …… 56

粕壁小児童の震災作文 …… 58

「大震災と官僚・政治家」（小澤龍一） … 60

「日弁連勧告の意義と現状」（米倉勉） … 62

母と子のミュージアム案内 …… 67

河正雄コレクションとは

河正雄コレクションは、在日韓国人２世で実業家の河正雄が約５５年かけて収集した１万２千余点の美術作品群。河正雄はメセナ（文化・芸術の支援）精神と「分かちあう心の美学」を実践している先駆者で、収集したすべての美術作品を文化・芸術の発展のために、韓国・光州市立美術館をはじめ、霊岩郡立河正雄美術館や秋田県仙北市立角館町平福記念美術館など、韓国と日本の公的な美術館等に寄贈している。



河正雄

一貫した方向性を持つ河正雄コレクションは、ディアスポラ（離散した民族）として歩んできた河正雄自身の人生が色濃く投影されている「祈りの美術」。社会的・政治的に恵まれていない、疎外された人々や歴史の渦の中で犠牲になった人々を追悼する祈りと慰霊の意味を持っている。さらに在日韓国人として故郷に対する運命的なあこがれ、自分を生んでくれた祖国の文化と美術への恩返しの気持ちが込められ、美術で韓国と日本を結ぶ懸け橋の役割を果たしている歴史的に貴重なコレクションである。

岩田健の彫刻作品「二人と猫」「朝の母子像」「夕の母子像」の３体が河正雄コレクションとして、韓国の公立美術館に収蔵されている。

東江・河正雄（ハ・ジョンウン）　1939 年生まれ（晋陽河氏）。

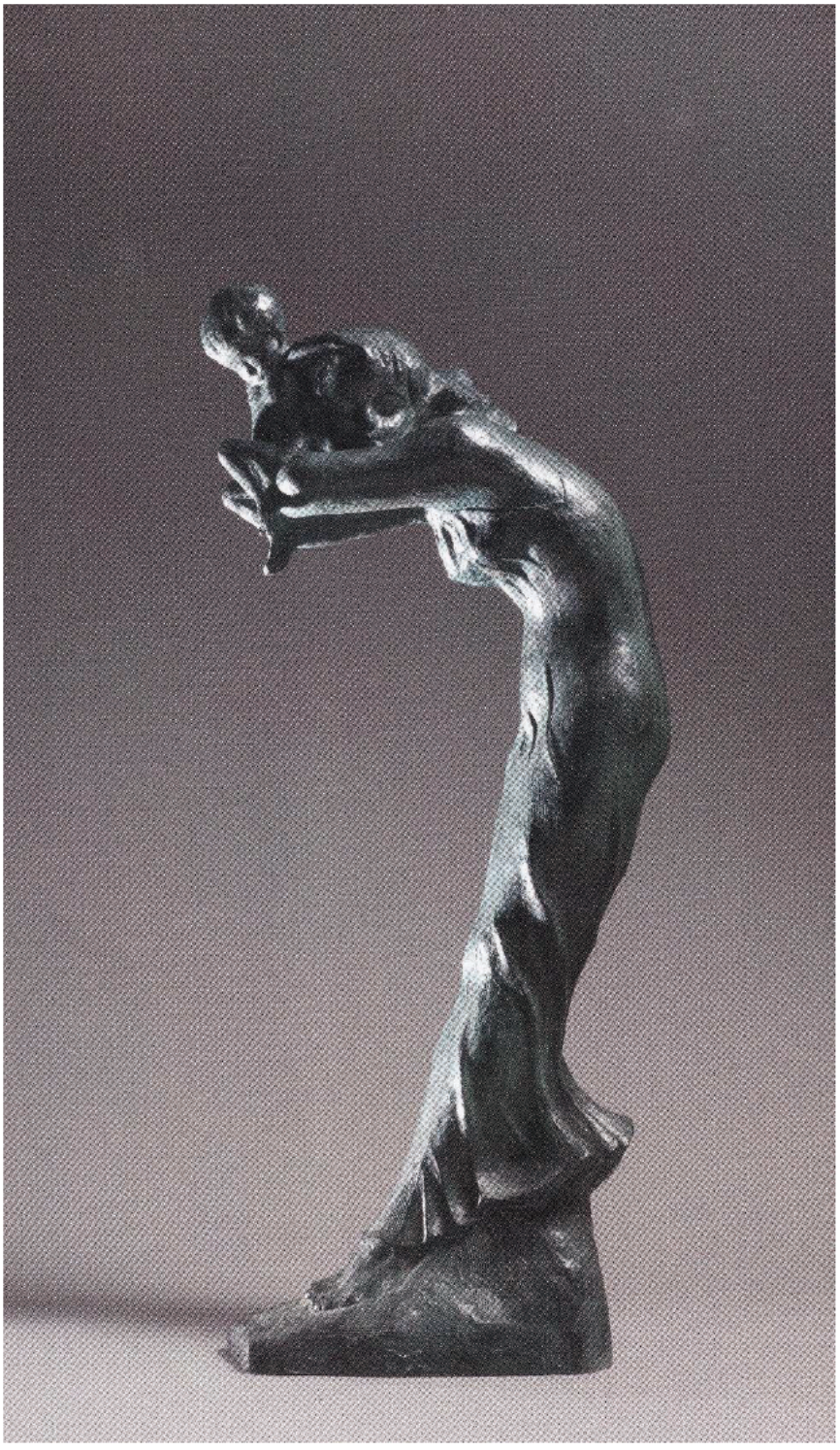
59 年秋田県立秋田工業高校卒。72 年株式会社かわもと（不動産賃貸業）創立。韓国光州盲人福祉協会（81 年）と同会館（89 年）設立。2001 年終身光州市立美術館名誉館長就任。03 年韓国朝鮮大学校美術学名誉博士号授受。07 年韓国朝鮮大学校デザイン大学院客員教授就任。光州広域市・釜山広域市・ソウル市名誉市民、全羅北道名誉道民、山梨県北杜市栄誉市民。韓国の文化芸術発展に寄与した功労により、2012 年に在日韓国人で初の宝冠文化勲章を受勲した。著書に『全和凰－祈りの美術』『望郷－二つの祖国』『恨'95』『韓国と日本、二つの祖国を生きる』『二つの祖国』『祈りの美術』『念願の美術』『尋劒堂』など。

河正雄アーカイブ　https://www.ha-jw.com/



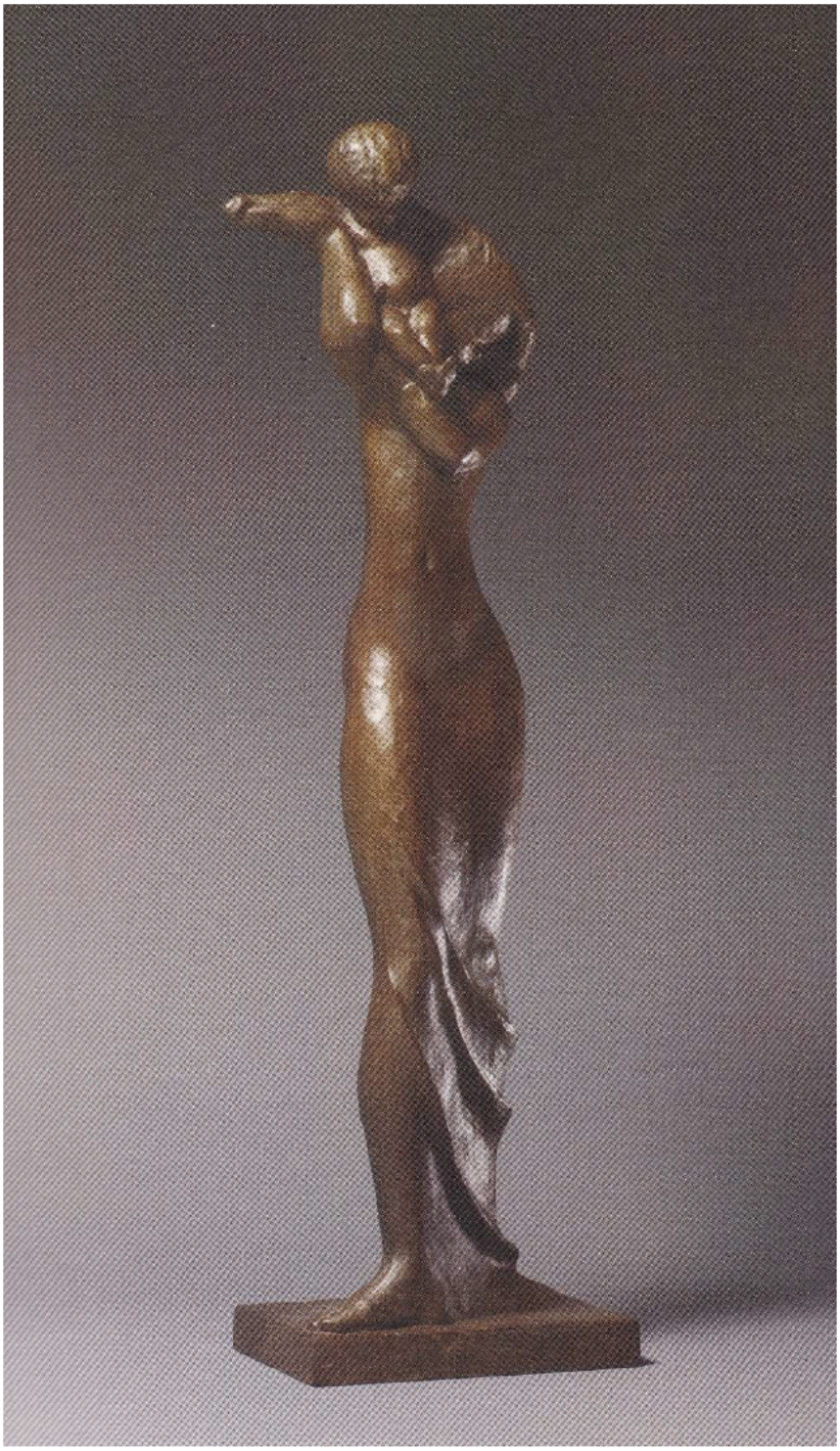
二人と猫

ブロンズ　H36.0×W20.5×D11.1 ㎝　1979



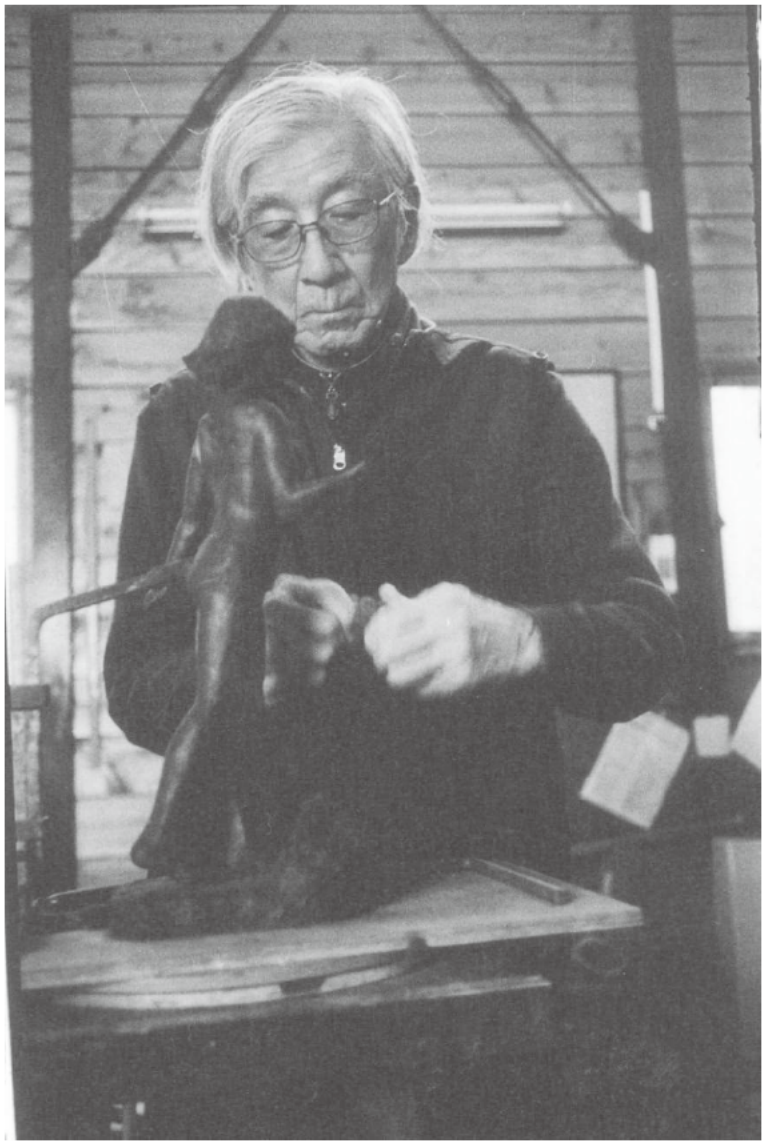
朝の母子像

ブロンズ　H179.0×W67.0×D40.0 ㎝　1976



夕の母子像

ブロンズ　H196.0×W53.5×D43.0 ㎝　1979



岩田　健（本名つよし）

彫刻家。1924年埼玉県川口生まれ。旧制浦和中学を経て42年東京美術学校（現東京芸術大学）彫刻科塑造部に入学、朝倉文夫・北村西望教授に師事、44年在学中に兵役（陸軍特別操縦見習士官）につき熊谷で終戦を迎える。45年に復学し、山本豊市・菊池一雄教授に師事。48年東京美術学校彫刻科塑造部卒業。49年東京都内の公立中学教諭、以後15得年間教鞭を執る。64年慶應義塾幼稚舎教諭、87年同舎退職。68年に第1回個展、現在15回を数える。現在、日本美術連盟会員、日本児童演劇協会会員、日本陶彫会会員、元二紀会会員など。2006年川口市文化賞、07年埼玉県文化賞受賞。愛媛県今治市に「岩田健　母と子のミュージアム」がある。主な著書に『YES、MAMA!日米対訳　学校劇脚本集』（晩成書房）、『岩田健彫刻集』（毎日新聞社）、小学生版画集『わたしたちの学校』全6巻（リブリオ出版）、『荒川と御成街道と－小説　岩田三史－』（文芸社）など。2016年9月28日死去。92歳。

（岩田健著『荒川と御成街道と－小説　岩田三史－』2002 年文芸社より、一部追加）

岩田健彫刻の歩み

中村傳三郎
（東京国立文化財研究所名誉研究員・美術評論家）

昭和54年秋の第33回二紀展の岩田さんの出品作は「切れた鞄」他1点であった。小学校の高学年生らしい少女が通学の途上で、だいぶくたびれてきたランドセルの背負い革紐の片っ方が突然切れて……いかにもこの少女の当惑の様子が迫真的に造型要素への配慮もよく行き届いて表現されている。私はこれを見た一瞬、「……遊びにゆきたし傘はなし、紅緒のかっこも緒が切れた……」と、昔からなじんできた童謡のメロディーをいつのまにか口ずさんでいた。空間・時間の表現の差異はあるが、同じように感傷的な子供の心理を小気味よくつかんで間然するところがない。

このところ、岩田さんの彫刻の仕事は昭和54年夏の第5回個展でもよくうかがわれたように、油がのってきてなかなか好調である。そしてこの10数年来とくに子供に取材した作品が目立って多くなってきた。そのように10年ばかり前の制作にもポーズはこれと少しちがうが同じ「切れた鞄」の第1作と第2作があった。

作家というものは執心の題材を幾度も重ねて制作、探究を深めていくものである。ところで岩田さんは、昭和38年来、慶應義塾幼稚舎で図画工作の指導に教鞭をとってきた。それ以前の豊島区立(昭和25年～)・板橋区立(昭和35年～)の公立中学勤務時代から通算するとかれこれ30年に及ぶ学校美術教育の大ベテランである。もともと岩田さんは若い時から夢多きロマンチストであり、フランス文学上にいうモラリストであったように思われる。彼の年譜にも、県立浦和中学に進学したころから、「昆虫、天文、美術に夢中になる」とあるように、この少年は、彼をとりまく天然の造物や宇宙現象に対して特別な関心を示し、実証的心理的な観察の習慣を養ってきたようである。直接聞いたわけではないが、夜がくるのを待ちかねるように望遠鏡にかじりつき、天体の形や運行の法則の理解に胸を躍らせたり、ファーブルの「昆虫記」を耽読したりしたことであろう。もちろん幼時からの得意な画技もそれらの記録作製に役立った。埼玉県川口市の名望家の二男坊に生まれ、医学博士の尊父が初代市長をつとめられたほどの恵まれた家庭に育った岩田さんの、そんな少年の日々が想像されるのである。

昭和16年3月、中学を卒業すると昆虫学を専攻したくて北大予科の農類を受験したがここは失敗したという。しかしこの年の12月8日には、パールハーバー急襲の仰天のニュースとともに太平洋戦争に突入、戦局はいよいよ拡大して第2次世界大戦へとエスカレートしていった。その戦況が漸次苛烈になりはじめた翌17年4月に、彼は東京美術学校彫刻科塑造部への入学を果たすことになる。だが、私も彼よりは幾つか年長の同じ戦中派世代で、既にこのころは軍務に服していたこととて、当時の学生生活がどのような状態であったかおよその見当がつくのである。どうせ死ぬ身だからやりたいことをやっておこう。――そんな共感がもてるのだが、彼はまたこの年、童話劇研究会「緑の丘」に入会し、学業の彫刻の方は留守にして劇ばかりやっていたという。ところが美校生活も3年目の昭和19年には彼も軍務に服することを余儀なくされ、7月1日特別操縦見習士官として宇都宮陸軍飛行学校に入隊した。わずか1年後には終戦を迎えるが、さらにここではそういった演劇に情熱をもやした話について続けよう。

終戦まもなく復員して復学した彼は美校演劇部を復活することにはじまり、以後中学教師時代（昭和25年～38年）13年間のNHK中学校向け「芸術の窓」番組への出演をたび重ねて実績をつくり、その出演のみならず、台本書きからカメラの指定までやったほどで、この方ではかなり

認められ重視されたという。また小学館刊（昭和 36 年）の日本児童劇全集に収録の「幕のしまらない劇」をはじめ、中学校劇脚本集などこの分野の有名著作の幾つかがあると聞いているし、番組の編集委員などもつとめたほどだった。このような中学校劇などへの没頭は、恐らく彼に、〈人間いかに生きるべきかの問題を探究し、その問題に思いをひそめる〉モラリストの眼をひらかせるのによき糧となったにちがいない。つまり、生徒たちへの情操教育を担当し、常に彼らの日常生活を観察して心理的動きを直観的に把握し、一人ひとりの行動を愛情深く看まもりながら、将来、社会に役立つ人間としての健全な成長を期待、その善導に留意してきたであろう現場教師としての姿を、現に岩田さんの温厚篤実な人柄や、彫刻作品の母親の心遣いを思わせるような愛の表現にうかがうからである。

以上、私にはたとえ外見的にせよロマンチスト・ジェントルマンとでもニックネームを呈したい岩田さんの彫刻本業以外のむしろ側面からの観察を大切に述べてきた。従っていよいよ「彫刻家岩田健」の門出となる終戦直後からその歩みをふり返ってみよう。

彼が出征中の東京美術学校では、昭和 19 年に上野直昭校長の着任とともにいわゆる美術学校大改組が断行されていた。彫刻科では、大正 10 年以来の 20 数年の長い間指導に当たってきた斯界の大御所、朝倉文夫、北村西望両教授が退き、新たに平櫛田中、石井鶴三の両教授が就任し、そのもとに各教授の推輓で菅原安男、笹村草家人両助教授が新任されていた。

翌 20 年 8 月 15 日は終戦。まもなくどの学園にも出陣学徒が逐次復員し再び生色が蘇ってきた。彼も美校彫刻科に幸い復学できたのだった。

戦後の民主化と呼ばれる社会制度の一大変革、久方ぶりで暗い戦争からの解放感を味わいながら世は平和、自由、文化国家の合言葉が大声で叫ばれ、物心共に貧しく混乱のうちにもまず再出発の希望にもえ立っていた。

ところが折角復学したものの、彼にとっては何としても学習意欲をわかせない事態に直面することになった。それは、塑造部生が自動的にその教室にまわされどうしてもその指導をうけなければならなくなった石井教授や笹村助教授の言動への不満と失望だったようである。彼がそのとき石井教授排斥運動に参加した仲間 6 人のうちの 1 人であると改めて聞けば今昔の感があるが、それには諸事情と経緯があるようでここでは触れるまでもない。しかし結果的に学校側からの収拾策もあり昭和 22 年 5 月には菊池一雄先生を迎え指導を仰ぐことになる。

ここにも生真面目で純粋な彼の内剛外柔の性格をみることができるようである。

ともかく彼は昭和 23 年 3 月美術学校を卒業、引き続き研究科と称して登校、菊池先生および工芸科を担当されていた山本豊市先生に指導をうけていたという。

さて翌昭和 24 年には第 13 回新制作派展に初出品、「トルソ」が初入選し、まず戦後彫刻界に若き期待の新人として登場する。

以後、新制作展（昭和 26 年から新制作展となる）へは昭和 42 年の第 31 回展までほとんど毎年入選を続け、終始具象の領域にあって裸婦のポーズのさまざまに真摯な追究を重ねてきた。特に初期の昭和 20 年代半ばの作調には、当時、美術学校の近所の上野桜木に住み、発足したばかりの新樹会展を舞台にダイナミックで生命感もみずみずしいテラコッタの裸婦像を集中的に発表して衆目をあつめ好評を博して、しかも美校彫刻科生たちの心をゆさぶった木内克氏に私淑したというので、なるほど木内風の好ましい咀嚼が色濃くうかがえる。同様に私も彼が美校在学中の昭和 22 年 10 月より国立博物館附属美術研究所（現・東京国立文化財研究所）に入り、翌 23 年春より明治大正美術、特に殆んど未開拓の明治以降の彫塑（彫刻・塑造）史研究に着手し、同じく

彫塑を主とする現代美術の動向の調査研究にも従事してきた。それは現在でも継続しているが、戦後まもない美術界にあって「木内克の彫刻」の登場ぶりほど新鮮で感動的なものはなかったと懐かしく想起するのである。そのように岩田さんの当時の作調には木内風が顕著にみられるが、やがて彼は木内風への傾倒が体質的に自分とはちがっていることを自覚してきたのだろう、昭和30年代に入ると、その木内風の生硬な影が徐々にうすれ、やがて40年代ともなると、木内風を濾過した彼独自のスタイルの確立にむかい、それは成長ざかりの清純な少女の裸身をモデルにした場合が多いが、手足や首のすらりとのびて躍動する裸女の姿態であったり、あるいはメルヘンの世界から脱け出したような童形の主人公たちであったり、自然の神秘性に想いを託した妖精たち、さらに母子叙情、等々というように、これらは前述の通り、長い間情熱を注いできた童話劇や中学校劇、そして学校教育現場においての少年少女たちに対する心理的肉体的観察の貴重な体験を通じてこそ、彼の制作に有効に働いて、彼独得の造型となって現れてきたとみてよいだろう。

昭和43年・46年の第1回・第2回の銀座・一方堂画廊での個展、同48年の彩壺堂サロンでの第3回個展は、やはりこの作家だけの仕事の世界を集約して開陳しただけに、回を重ねるごとに量質共に昭和 40 年代の好ましい成果と進境の程が頼もしくうかがえたわけである。そして昭和51年のセントラル絵画館での第4回個展、同54年夏の第5回個展では、既に岩田ファンのご承知の通り、年齢的にも制作の上でも円熟の域に達し、おそらく彼の作品に接する十中八、九の人が「まあ愛くるしいこと！」その愛の優美な表現に対する讃嘆の言葉が、岩田彫刻芸術の本領であり最大の魅力になっていることを私は素直に評価し、この作品集の上梓を慶びたいのである。

（『岩田健彫刻集』　岩田健彫刻集刊行委員会編　1980年　毎日新聞社発行）

中村傳三郎（なかむら・でんざぶろう）　1916年（大正5年）10月30日－1994年（平成6年）8月23日）は、日本の美術評論家。 兵庫県出身。東京帝国大学卒。1947年国立博物館付属美術研究所（現・東京国立文化財研究所）入所、美術部第二研究室長。彫塑史専門、1991年『明治の彫塑』で毎日出版文化賞受賞。著書に『明治の彫塑 「像ヲ作ル術」以後』文彩社、1991。編纂に『講談社版日本近代絵画全集 第17巻 竹内栖鳳・上村松園』田中一松、関千代共著 講談社、1963、『現代日本の美術 7　岡田三郎助・小絲源太郎』浅野徹共著　集英社、1975、『北村西望彫塑大成』編　講談社、1976。

（出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）

仲間・岩田君

佐藤忠良（彫刻家）

岩田君のことの書きはじめに、自分のことで恐縮だけれども、私のことを「彫刻の小児科」などと言った人がいたから、子供の彫刻の数では私は多い方なのかもしれないと思っていたのだが、先日東京セントラル絵画館での岩田君の個展をみせてもらって降参した。未発表の裾野はもっと広かったのかもしれない。

私は、自分の子供や知人の子供さん、孫たちなどを随分作ってきたが、振り返って、子供というものは本当にむずかしいと思った。「子供の作品は、おいで、おいで、などと気軽に手をさしのべると、手もとでするりと身をかわし、そっちの方が、おいで、おいでをしながら、いたずらっぽくニッコリしてみせたりするような彫刻になることがあります。年輪や哲学らしいもののない分だけ、ただ可愛いということのむずかしさです」これは、私が子供だけの彫刻の作品集を出したときに、あとがきに書いた一節だけれども、おそらく岩田君も土を手にする度に、子供という課題を前に、これに似た思いをしたことだろうと思う。

お互い作る者同士、手のうちを知っているつもりでいても、やってるなと思うことがあるもので、岩田君のをみていると、なるほど、こういう食らいつき方があったのかという面を幾つも見せてくれていたので、ちょっと盗ませていただいたこともあります、あしからず。

今度の彼の作品集は勿論、子供の彫刻だけではないが、ただ、私にとって岩田君の小児科のあたりが大変興味があったのでこういう話になってしまった。

岩田君に私は以前、作品のことで失礼なことを言ったらしい。先年亡くなられた木内克さんに、岩田君が私淑していた頃、いわゆる木内スタイルと岩田君の旨さが絡んで、抜き差しならなくなるのではなかろうかという老婆心が、何か私の言葉になったのだったと思う。振り向けば、お前はどの様にしてきたのかと問われて、私は人様の真似ばかりして来てしまいましたと答えるより他ない自分を、岩田君にすまなかったと思う。

誰かのスタイルだけを真似ると、その様式性はデコラチーブになりがちなものだけれども、岩田君はよく抜け切ったと思う。

岩田君の優れた文学的な才能が、彫刻造形の約束ごとの中ですれすれの立ち回りをみせてくれているが、彫刻の不自由さは宿命的に表現の抑制を要求してくるだろうし、これからも岩田君が、この課題にどの様に挑戦してくれるのか、私には興味のある仲間の一人だと思っている。

（『岩田健彫刻集』　1980 年　毎日新聞社発行）

佐藤忠良（さとう・ちゅうりょう、1912 年 7 月 4 日－2011 年 3 月 30 日）は、日本の彫刻家。舟越保武とともに日本を代表する彫刻家。新制作協会彫刻部創立会員。生き生きとした女性像などをブロンズや木彫で表現した。本の装幀の仕事もこなし、福音館書店版の絵本『おおきなかぶ』の挿絵なども手がけた。出身地にある宮城県美術館には、「佐藤忠良記念館」が併設、日本で最も多い約 600 点の彫刻作品を収蔵。その他、滋賀県の佐川美術館の佐藤忠良記念館、札幌芸術の森「佐藤忠良記念子どもアトリエ」、国立近代美術館、国立国際美術館など、日本全国各地に佐藤忠良の作品が収蔵・展示されている。日本芸術院会員、文化功労者、文化勲章など辞退する。

（出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）

本当のやさしさって何だろう

－岩田健さんの彫刻に想う－

伊東豊雄（建築家）

朝犬の散歩で慶應幼稚舎の前を通るたびに、正門の向こうに見える彫刻のことが気にかかっていた。姉弟のブロンズ像で、姉は幼い弟の肩に手をかけ、弟の指さす方向に視線を向けている。どこででも見られる何気ない風景だが、遠くからでも見る者に強い何かを訴えかけてくる。彫刻のもつオーラとでもいったらいいのだろうか。こんな像の前を通って毎日学校に通う子供達は幸せだなあと思っていた。

ギャラリー長谷川の長谷川浩司氏を介して今治市の大三島に岩田健ミュージアムの設計を依頼された時、慶應の姉弟像が岩田健さんの作品であることを初めて知った。そして岩田さんが 24 年間も慶應幼稚舎で子供達に教えていたことも知った。長年子供達と接し、子供達に優しく語りかけている岩田さんの姿をあのブロンズ像と重ね合わせた時、あの像が訴えかけている何かが理解できたような気がした。



「岩田健　母と子のミュージアム」を設計した伊東豊雄（左）と岩田健（図録『岩田健　母と子のミュージアム』より）

瀬戸内の海辺の元小学校の校庭につくられた「岩田健母と子のミュージアム」は、ミュージアムというよりスカルプチュア・ガーデンと呼んだ方がふさわしい。直径約 30 メートルの円形に囲われたコンクリートの壁の内側は芝生が植えられ、その間に彫刻が置かれているだけである。すべて屋外空間だが、周遊する壁の上部には、内側に向かって張り出した庇が回っているので、ここが外部から切り離された特別な場所だという印象を強めている。この内部に入ると、空や山も外部とは違って見えるし、波の音も別の世界から聞こえてくるように感じられる。

この囲い込まれた空間に岩田さんの 44 体の彫刻作品が収められている。人体より大きな像、両手の平に乗るくらいの可愛らしい像、上を向いた像、下を向いた像、はるか遠方に視線を投げかける像、近くのものに語りかける像、それぞれの作品にはその時々の岩田さんの感情が込められていて、それらと向かい合うと、違った空気が伝わってくる。ここでは、ただ一体の彫像と向かい合うのとは全く違った楽しさや喜びを味わうことができる。それぞれの像がさし示すさまざまな方向への力のベクトルが重なり合って、まるでオーケストラの演奏を聴いているような濃密な空間のなかにいる自分を感じるからである。

岩田さんの彫刻の印象を聞かれたら、ほとんどの人は「やさしさ」をあげるだろう。岩田さんの作品は本当に、例えようもなくやさしい。そしてそのやさしいという表現を、人々は他人に対する思いやりとか、穏やかでこまやかな情感といった意味で用いているに違いない。しかし広辞苑によれば、本来「やさしい」という言葉は、「身も痩せるように感じる、恥ずかしい」とか、「周囲や相手に気をつかって控え目である、つつましい」という意味に用いられたようである。即ち、他者というより自分自身に向けられていた気持が、次第に他者への接し方に変化していったことが推察される。

岩田さんに接していると、長年に亘る御自分のさまざまな人生の体験が内面に向かい、それが無意識のうちに滲み出るように作品に伝わっているように感じられる。言葉の本来の意味において、岩田さんの作品は正しく「やさしい」。

（図録『今治市　岩田健　母と子のミュージアム』）

伊東豊雄（いとう・とよお、1941 年 6 月 1 日-）は、日本の建築家。一級建築士。伊東豊雄建築設計事務所代表。東京大学・東北大学・多摩美術大学・神戸芸術工科大学客員教授を歴任。高松宮殿下記念世界文化賞、RIBA ゴールドメダル、UIA ゴールドメダル、日本建築学会賞作品賞 2 度、グッドデザイン大賞、2013 年度プリツカー賞など受賞歴多数。

（出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）

瀬戸内の島に母子像

（「埼玉新聞」、2011年8月22日付）

2011年（平成23年）8月22日（月曜日）　埼玉新聞

瀬戸内の島に母子像

愛媛・今治に美術館オープン

川口の彫刻家 岩田健さん寄贈

平和への祈りや母子をテーマにした温かい作風の彫刻制作を長年続けてきた川口市の彫刻家岩田健さん（87）が、愛媛県の瀬戸内海に浮かぶ島に彫刻美術館「岩田健　母と子のミュージアム」を開設した。同県今治市・大三島で、島の海辺にあった小さな小学校跡を利用して完成させた。岩田さんは、自身の作品44点とともにミュージアムごと同市に寄贈。長年の夢だった美術館づくりを果たし、「穏やかな瀬戸内の光と風の中で、ぜひ作品に触れて、感じてみてください」と多くの人たちの来場を呼び掛けている。（小川直己）



岩田さんの彫刻作品が並ぶミュージアム中庭。中央は「昼の母子像」―愛媛県今治市大三島町

岩田さんは1942年、東京美術学校（現東京芸術大学）に、63年からは慶応義塾幼稚舎で24年間にわたって美術教諭を務めた。同時に川口市本町1丁目の自宅のアトリエを拠点に彫刻家として創作活動を続けてきた。

母と子を主題にした作品を中心に、JR川口駅東口デッキの「人魚の母子」をはじめ、図書館、病院、学校、公園、商店街など岩田さんが手掛けたブロンズ像作品は現在市内のさまざまな場所にある。地元では誰もが一度は見たことのある存在だ。



オープニング式典でテープカットする岩田健さん夫妻―20日、今治市の「母と子のミュージアム」

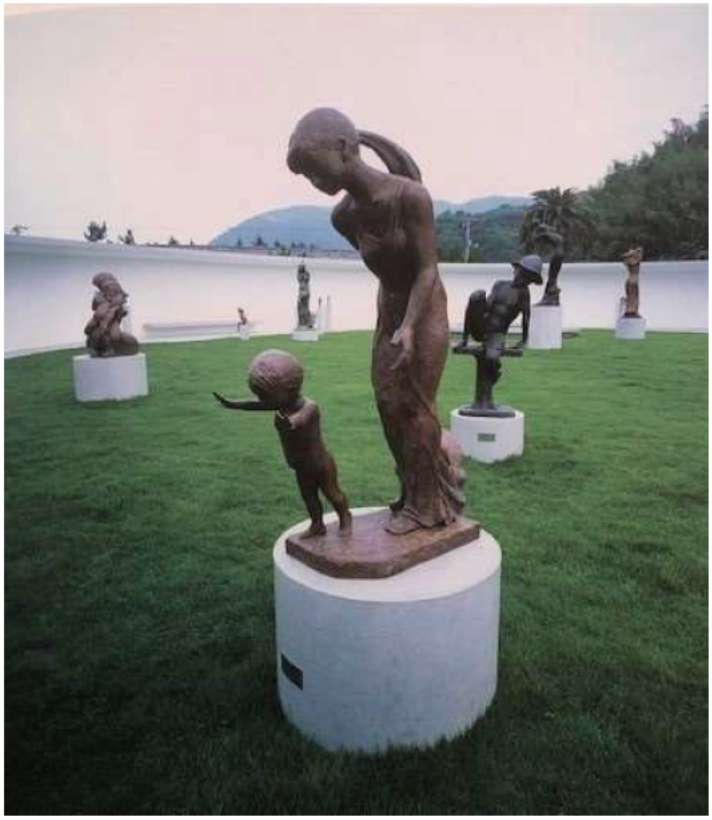
岩田さんは8人きょうだいの次男。戦時中、旧陸軍特別操縦見習士官として宇都宮市の飛行学校で訓練を受けた。兄も陸軍の別部隊に所属していたが戦死してしまった。また、岩田さんは教壇に立っているころから児童劇団を主宰。子どもたちの指導を通じ「無限の可能性を持った子どもの想像力には驚かされることが多かった」と教員時代に感じたという。

慕っていた最愛の兄を失った戦争体験や子どもたちとの触れ合いが平和への思い、母子の愛情という形となり、彫刻家としての岩田さんに強い影響を与えた。「いつか母子をテーマにした美術館をつくりたいと願うきっかけになった」と岩田さんは話す。ミュージアムを大三島につくることになったのは、25年前に同島内に開館した大三島美術館の所蔵作品として岩田さんが作品を寄贈したのが縁だった。

目の前に美しい海が広がるミュージアムは、岩田さんの作品群を配した芝生の中庭を、直径約30㍍の円形の鉄筋コンクリート壁が囲む斬新なデザイン。世界的に活躍している建築家の伊藤豊雄氏が設計した。

20日、ミュージアムを会場にしてオープニング式典が行われ、名誉館長に就任した岩田さんをはじめ岡村幸四郎川口市長、菅良二今治市長ら関係者が多数出席してテープカットなどが行われた。

問い合わせは、同ミュージアム（☎0897・83・0383）へ。



岩田健 母と子のミュージアムの誕生

岩田健

長谷川空間創造会社の長谷川さんが、瀬戸内海に浮かぶ大三島に美術館を作っては、という話を持って来られたのは、平成16（2004）年に私が傘寿の記念展を開いた時のことです。思いがけないことで、始めはなかなかその気になれませんでしたが、記念展に来て下さる方々の中にも、これだけの数の作品を、散逸させずにどこかへまとめて置いたら、と言って下さる方が多かったこともあり、又、母子像とか子供を主題にしたものが多い私の作品が、丁度その頃何となく荒れ始めた世相に対して何か訴えることができるのでは、という長谷川さんのお奨めと、私自身、私の兄が戦死した時の母の姿が忘れられず（母は昔風の人間で、決してその悲しみを人前であらわすことはなかったのですが…）戦争を知らない若い人達に、戦争をいうものがどれだけ多くの母の嘆きを生んだかを考えてくれるきっかけをつくれるかな。という思いが私の足を踏みきらせました。

候補地が大三島ということも、20数年前、当時大三島町長だった管省三さんが町立美術館を作るに当たって、私の“二人と猫”という彫刻を収めて下さった御縁があり、復員して大三島へ向かう途次御覧になった広島の惨状について語り合ったこと、絶対に護らなくてはと仰云っていた大三島の美しい自然が思い出され、あの風景の中に自分の彫刻を置けたら、と思うようになって行きました。

設計を伊東豊雄さんが引き受けて下さるというのも願ってもないことでした。かねてから、私は自分の作品は自然の中におきたいと考えていましたので、展示は野外で、とお願いしました。そして伊東さんは、私の彫刻達の為に、何とも素晴らしい空間を作って下さいました。工事が終わって彫刻を据え付けた時、私には彼らがのびのびと嬉しそうにしているように見えました。

（図録『岩田健　母と子のミュージアム』）

林中挽歌

岩田　健

ええもう帰って来ないのです
兄は帰って来ないのです
　こんなにも晴れた秋の日に
　兄の戦死の報を受け取るのは
　寧ろ私には望ましかった。
透明な秋の午前十時
ガムボージの勝った緑陰の
数を増した光の斑の中に
兄を五次元の世界より連れ戻し
コレスポンデンスの会話を交換しつつ
私は青く透き徹って行こう。
　サラクサク峠のドヴォルザーク
　兄さんは柿の色が見たかったでしょう
　ローライ・レフのファインダーの中に
　もう一度日本の秋が見たかったでしょう

兄よ兄よ
南瞑と云われるものの彼方に
ノスタルジアに蝕まれてぼろぼろになりながら
あなたは蒸発してしまったのか
喜怒哀楽の音楽堂の屋根から
白いテントウ虫になりすまして
エーテルの彼方に消えて行ったのか。
　「ルソン島の空の色をお前に見せてやりたいよ
　お前ならきっと絵を描くだろう
　「僕は転向したんです
　「あ　彫刻だっけな
　「うんにゃ　もっとほかのもの
　「お前は飛行兵、旋回は上手なはずだな
疎らな林の光線の中を
うつむいてガサガサ歩いて来るのは
フランクのイ長調ソナタ
百舌鳥が叫んで空気を寸断する。
兄よ　私は林の中に臥ています
あなたも軍服をお脱ぎなさい
　「ああ　どんなに窮屈だったでしょう
　兄さんの体は軍服向きじゃない
　「お前には割に似合ったよ
　「うふ　そうでもないさ
　「まさかお前は俺の後へ
　ついて来るつもりではないだろうな
　ええ　そのつもりなんです
　兄さんの眺めた山嶺を
　僕も瞰めているんです
「駄目だ　帰れ
　「もう帰れません　兄さん　兄さん
兄よ　あなたの幻像は
私をひとり十月の林の中に残して
カメムシの緑褐色のかすかな臭気と共に
浮遊し　分裂し　上昇し
蒼窮の光の散乱の中に溶けて行く
　「行かないで　行かないでください
私のロマンティシズムとエゴイズムは
茶色い翅（はね）のセセリチョウとなって
林の中を飛んでゆく
　「兄さんいない　何処にもいない
兄よ　あなたは本当に行ってしまったのだろうか
あなたは帰って来ないのだろうか
　私は喪服を着ているのだ
　「兄さんかくれんぼはもうやめたよ
　早く出て来ておくれよ
静寂を助長するコオロギの音（ね）
林はマアテルリンクの空間
樹間を漏れる光線の角度は
どうやら午（ひる）を廻ったらしい。

（昭和二十二、十、二十五）

＊ガムボージ（黄橙色）



彫刻「兄の碑」（左端）と「坊や戦争に行かないで」（左から３つ目）の間の壁面に書かれているのが、戦死した兄を追悼する「林中挽歌」（16 頁）。右から２番目が子供の守り神「訶梨諦母」（下）。詩「母はいつまでも忘れない」（18 頁）は南側ベンチ横の壁面にあり、近くに「私の兄さん」も展示されている＝愛媛県今治市の「岩田健　母と子のミュージアム」



訶梨諦母

大理石　H77.0×W46.0×D45.0 ㎝ 1960

訶梨諦母（かりていも）

別名鬼子母神。初めは他人の子供を奪って食べてしまう鬼神だったが、お釈迦さまが彼女が一番可愛がっている末子を隠し、子を失う母の悲しみを諭した。これより、訶梨諦母は仏教に帰依して、子供の守り神となった。別名を歓喜母・愛子母ともいう。胸に赤ん坊を抱き、右手にザクロ（吉祥果ともいう）を持つ。お釈迦様に諭された鬼子母神は子供を食う代りに、この柘榴を食うことを許されたとされる。ザクロには魔障を除く力があるという。訶梨諦母の名は、インド神ハーリーティーから由来している。

母はいつまでも忘れない

ペーシェンス・ストロング

歳月が
いやおうなしにその子を鍛えあげる
そのずっとまえの
幼い日のわが子の思い出を、
母は、いつまでももちつづける。
笑いかける眼ざしをしたひとりの少年を、
母は、死ぬまで思い出している。
いつの日か、
母の心臓がとまり、
母の一生が終るときに、
その子は、あの幼い日のよそおいで、
母のところへやってくる
にこにこした、
幼い、愛くるしく快活なその子が……
あの子はいつもいっしょにいる、
気立ても、考えも、私とひとつだ
そう母は信じる。
あの子は、
人生の不可思議な栄光をじぶんでみつけだし、
追い求めた真理をさがし当てたのだ
そう思うことに、
母は母の慰めを見いだす。
それを知ることが母のよろこび……
母は、過ぎし日の、
あどけないわが子、勇気のある、やさしいわが子を、
いつまでも覚えている。

（訳者　周郷　博）



坊や戦争に行かないで

大理石　H49.0×W61.0×D29.0 ㎝　1982



兄の碑

ブロンズ　H84.0×W42.0×D33.0 ㎝ 1967

「兄の碑」銘文

もう秋か――それにしても何故に永遠の太陽を惜しむのだ－
俺たちは清らかな光りの発見に志す身ではないのか。
季節の上に死滅する人々から遠く離れて。

岩田 俊　昭和二十年五月　ルソン島にて

付記　ルソン島で戦死した兄 俊が愛読したランボーの詩を銘文とした。

山嶺

岩田　俊

我歩み行く
秋の日暮れの高原の路をたゞ一人
陽は既に彼方の山の端にかゝり
その残光は
此の草原を黄金に蔽へるすゝきの穂に
風にて揺らぐ銀波を興へぬ

何時の日か
我此の道を歩み初めたるや
我は知らず
何故に
我は此の道を選みたるや
そも我は知らざるなり

我が歩みし方を省みれば
白く細々と續ける路に
わずかに我が殘せし、楽しみと悲しみの
小さき靴の跡を見るのみ

しかしそれすらも
やがては我が視界よりも離れ
我々と横たわれる
忘却の淵に融け入りぬ

我が歩み行く方を望み見れば
白く細々と續ける路の遥方に
紫の夕霧立ち込めし遥方に
遠くかすみ立てる
小暗き山嶺を見たり

遥かなる山嶺よ!
汝、如何なる力もて
かくも我が心を引きつけたるや
我が歩み行く
此の細き路は
果たして汝の下迄達しゐたるや
我れ未だその山頂に達し得ざりしに
急ぎ来れる冷き冬の嵐は
或は我を凍死せしむるやも知れず?

が突如吹き来たる
厳めしき無情の秋風は
瞬時にして、山路に佇みたる旅人の
此の短き思索を
過去の方へと吹き飛ばしぬ

我が目前にあるは
ただ彼の細き路のみ!
いざ、我は歩まん
夜は近し、冬は近し
止まる事なく、省みる暇も急ぎて
我は行かん
陽の沈み行く美しき山嶺に向ひて
我が遅き歩みの
時間の支配を脱する迄は……

（十八年八月三十日）

―岩田俊遺稿集より―



学徒出陣する岩田俊（上段左）



兄俊（７歳、左）と健（５歳）＝1929 年８月

岩田 俊（たかし）

1922（大正 11）年４月 28 日生まれ。岩田三史（さんし）・豊（とよ）夫妻の長男。旧制浦和中学を経て早稲田大学文学部入学。大学２年時の 43（昭和 18）年 12 月１日に学徒出陣。東部第 17 部隊（目黒の輜重隊）入営。甲種幹部候補生試験合格後、中部第 131 部隊（三重県鈴鹿の航空隊）に転属。終戦２年後の 47（昭和 22）年 10 月 24 日、陸軍少尉岩田俊の戦死公報（死亡認定理由書）が届く。行年 23 歳。戦死地はフィリピン・ルソン島北部のサクラサク峠付近。死亡日は 45 年５月 28 日ごろと認定。「林中挽歌」は岩田健が書いた兄への追悼詩。戦死公報が届いた翌日に書いた。



私の兄さん

ルソン島の戦

1945 年１月６日から終戦までフィリピン・ルソン島で行われた日本軍（第 14 方面軍：司令官山下奉文大将）とアメリカ軍の陸上戦闘。首都マニラは３月にアメリカ軍が制圧したが、その後も終戦まで戦闘が続いた。日本軍に機甲師団が配属されていたため、太平洋戦線では珍しく多くの戦車戦が発生した。

バギオ南部のサクラサク峠は激戦地の一つ。日本軍の戦死者は約 21 万７千人、アメリカ軍も約 8000 人が戦死している。

（出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）

兄のこと　『岩田俊遺稿集』序文

弟　岩田健



22歳の岩田俊＝1943（昭和18）年

兄の遺稿集がささやか乍ら出版される事になった。作家志望の兄にとって、何よりの追悼だろうと思う。

兄が同人雑誌「壁画」に関係したのは昭和十七年、兄二十一歳の時で、学徒徴兵猶予の撤廃により駒場の十七部隊へ入隊したのが翌十八年の十二月であるから、その創作活動といえば僅か二年足らずだった。その間の事は同人の蒲山さんと椎津さんが書いて下さる筈であるから、私は寧ろそれ以前の時代の兄を、二つ違いの弟として書いてみたいと思う。

此処迄書いて私の筆は動かなくなってしまう。実際私に何が書けるだろう？　二十四歳で戦死した（と思われる）兄は、そして二十二歳で私達の視野から消えてしまった兄は、決して完成された「人間」岩田俊ではなかった。その未完成の兄岩田俊に就いて、同じく未完成の弟――そして未だ真に兄が死んだと信じられず、未だ兄の自己拡張から脱しきれない弟の私――が何を書こうと云うのだろう？

でも私に之だけは云える。兄は決して昨年の葬儀の時に父の“顔”で参加して下さった方々が褒めちぎられた様な円満、高邁な人格の持主ではなかったと云う事だ。死人に鞭打つ類ではない。私は死と云う壁一つに隔てられたからと云って、その面影を浄化し、綺麗事に済ましてしまいたくないのだ。二十何年見慣れて来た兄そのままの面影を留めて置きたいのだ。

兄と私の関係は私にとっては一冊の小説になる程だった。今限られた枚数でそれを描く事は到底私には出来そうもない。兎に角、兄と私との関係は世間の兄弟とは少しばかり趣を異にしていた。同じ家に住み、同じ中学校に通い乍ら、絶交状態が足かけ四年も続いたと云う事は、世間の常識から見たら奇異に思われるのではないだろうか？　登下校を共にしないのは勿論、不倶戴天の仇の如く敵視し合い（あの頃は本当に私は兄を憎んでいた。無関心なのではない、憎悪していたのだ。その一挙手一投足に到るまで。そして兄も私を憎んでいた）食事の時顔を合わせても一言も口を利かなかった。本当にたった一言も。

たまに学校の用か何かで連絡しなければならない事が出来て来ると、幼い妹がその中継を勤めた。繊細過ぎる程の神経の歯車が相似しているだけに、一度噛み合わなくなったら、歯車の山と山とが悉く衝突して空転してしまうのだった。そして相方共に自己の歯車が相手と似ているなどとは考えても見られない事柄だった。この奇妙な葛藤が、兄が中学五年（私は四年）の冬、偶然（或は必然だったかも知れない）の事から解ける迄、家人達に如何に多くの迷惑をかけた事だろう。（私達は友人の前でそれを表に現わす様な事はなかったから、友人達は余り感付かなかったけれども）

子供の頃の兄はどちらかと云えば粗暴で意地っ張りで、幾分陰弁慶的でそのくせ見栄坊だった。そしてその自己主張を弟の上に及ぼさずには置かなかった。随分幼い頃から兄と一緒に外出する時の私は、何時も服装の事を二三矯されるのが常だった。靴下が靴の上にずり落ちているとか、上衣の袖口からメリヤスの袖が覗いているとか等。

趣味の上でも私達はお互いに影響し合い、相手のやった事は一通り自分もやってみる――必ず二人一緒に好きになる――にも拘らず、一方がそれに熱中し始めると他方はそれを相手の趣味の中に編入して、自分はそれに対して一種の尊敬と反感とを抱いて手を引いてしまうのだった。登山と昆虫採集、写真と写生画、小説と演劇、詩と童話と云う風に或点で共通したものを好みながら、私達はお互いの趣味の間に一本の劃線（かくせん）を引く事を忘れなかった。同じ時に好きになってしまったもの――例えば昆虫採集（之は後で兄の方が手を引いた）や音楽鑑賞にしても、蜻蛉類と蝶類、フランス近代楽派とドイツ・ロマン楽派と云う様に、その中に各々の領分を区別してしまうのだった。只水泳と譜曲と弓道だけは私は手を出そうとはしなかった。

兄が天才型の奇矯な性格の持主なら、その二三の逸話を書いてこの文章に代える事が出来るのだが、その作品中に屢々（しばしば）現れる様に（例えば「公演まで」や「影法師」に於ける主人公の虚栄心や、「I 氏の話」の中の茂のニヒリスティックな微笑）、兄はなるべく奇異な行動など避けて取澄ましている方だったから始末が悪い。フランス風のエスプリを尊んで冷静を装い、燃え上がるのを恥として否定的な冷笑を浮べ、真に理解し切ったとは思われないヴァレリイやボードレールを、そしてドビュッシーやラヴェルを好んだ（併し理解し切らなかったと云うのは兄の罪では無い。二十二歳で娑婆を去った年齢のせいだ）。

“四十位まで黙って勉強して、それからジャンジャン書く”と云っていた所を見ると、この遺稿集に収めたものは皆エチュードとしての意義しかなかったらしい。

家庭に於ける兄は決していい兄貴とは云えなかった。和解後の私だけは平気だったが、小さい弟妹達は兄が時々大人気なくもムキになって自分等の上に振う拳固を恐れて小さくなっている有様だった。“私は五人の兄弟の長男であり乍ら、私に本当の愛情を持って接してくれる弟妹を持たなかった”“I 氏は此の様に二人きりでいる時でも、決して彼に話しかけて来た事の無い息子を、何時もながら少々物足らなく感じながら……”と作品中にも自分と家族達の間の疎隔（そかく）を書いているが、それを打開しようと積極的になる事は無く、寧ろそんな事に意を悩ますのを恥として超然としたがっている風だった。

然しながら、私は兄の、恥として表に出す事を自分自身にすら隠している情の一面を知っている。多趣味の上にすき好んで又謡曲や弓に手を出したのは、趣味の上から父に接近したいと云う兄の希いからだと云うことを識っている。小学校や中学校の当時の全体主義的教育に反感を抱き、母校などと云う言葉を軽蔑しきっていながらも、お世話をかけた小学校の石井先生や中学の土肥先生、林先生などのご恩を銘肝していたのを識っている。

度の強い近眼鏡をかけ、ポマードをたっぷりつけて正しく髪を分けたやや長身細面の、いくらか神経質な、高慢と横暴とがその軟派がかった整った服装態度の端々から見受けられるニヒリストを気取った兄は、所詮マルクスからもキェルケゴールからも同様に遠い存在だったが、内心やはり美に感激し易い真理の追求者に外ならなかった。

軍隊に入隊して、あんな我侭な人に勤まるか知らんと云う周囲の心配に反して、兄はすぐ良い軍人（要領のいい兵隊と云った方がいいかも知れない）になってしまった。“お前は飛行機だから駄目だろうが、俺は悪運が強いからきっと生きているからな” 私が面会に行くと兄はこう云った。そして幾分得意気に（その裡に家族達を安心させようとする心遣いを潜ませて）自分が如何に要領よく立ち廻って上官の受けもいいかを話してくれた。

もう書けなくなった。私は何を書いたのだろう？ 兄を悼む代りに兄の悪口を並べてしまった様だ。だが兄は無闇に幻像を浄化されるよりその方を欣んでくれるだろう。最后の余白に私は拙い詩の一篇を載せさせて頂く事によって、兄の入隊前の数年を除いて、ほとんど仇同士の様に不和だった不孝な弟としての序文を終りたいと思う。

林中挽歌

ええもう帰って来ないのです
兄は帰って来ないのです
　こんなにも晴れた秋の日に
　兄の戦死の報を受け取るのは
　寧ろ私には望ましかった。
　……

（続く）

（1947（昭和 22）年 10 月 25 日）

（編注）『岩田俊遺稿集』には、この本文の後に「林中挽歌」が続き、最後には「兄の碑」碑文に刻まれたアルチュール・ランボーの言葉が書かれている。

俊の一生

『岩田俊遺稿集』より

父　岩田三史



左から岩田豊、聰、俊、淑子、健、三史＝1933（昭和８）年

俊は大正十一年四月二十八日午後二時十五分川口市で生れた。その日は春も漸く酣（たけなわ）ならんとする生暖かい風の吹く日であった。死んだのはよくわからない。埼玉縣地方世話課の調査によると昭和二十年五月二十八日比島ルソン島サラクサク峠で戦死と言う事になっている。

生れつき極めて癇（かん）の強い児で、夜なかなか寝つかない、ようやく眠ったと思つても、ちよっとの物音でビクッとして眼をさまして、ぐづついて仕方がなかつた。泣き出したら何が何だかわからずに無暗に泣きわめいてきかない。しまいには父も癇癪（かんしゃく）を起して、お尻をぴちゃぴちゃと叩く事がよくあつたが、泣き止むと、すぐ、おやじの背中によじ登ったり、抱っこしゃりして、甘えるのが常であった。

二歳の冬風を引いて、肺炎をやってからは、それがくせになったと言うのか、その後度々肺炎をやった。中でも三歳の五月には重篤な肺炎で、もう駄目だと、あきらめた位だったが、幸にして二ヶ月も寝ていて恢復（かいふく）した。しかしそれ以来胸がぺこんと引込んで所謂漏斗（ろうと）胸となり、風の引き易い、虚弱な子供になってしまった。小学校に行く頃からだんだんに丈夫になって、中学校に入る頃には漏斗胸もなおったが浦和中学校に入学して間もなく、微熱を出してとうとう第一期を休学してしまった。その夏鎌倉で静養して全く健康を取りもどしたが、中学校の最初の肝心な時を休んだので学課には余程苦しんだようだ。

弱い体を苦にして丈夫になろうとつとめたためか、中学の上級になる頃には相当運動好きな快活な青年になった。

夏は山登りと水泳。冬はスキーによく出かけた。柔道は初段で、水泳は並木水術練習所の教師。弓道は鈴木伊兵衛範士に学んで「大へん上達しましたね」と言われて居た。体力章検定にも初級に合格して、「おれは、運動神経が発達しているからね」となかなか自信満々たるものであった。

丈は一七二・八センチ（五尺七寸一分）体重は五八・五キロで体格も良い方であったが、眼はひどい近視で、二メートル離れると人の顔がぼんやりして、はつきりしないとの事であった。強い近視には付きもの乱視もあったので眼鏡は大そう複雑な度の強いものをかけていた。戦争に行ってあの眼鏡を失くしたら、どうにもなるまいと思って、三つも眼鏡を作って、持たしてやったが、敗戦では眼鏡どころではなく、しまいには眼鏡無しで敵味方の区別さえつかず、さぞ不自由したであろうと思う。

運動以外の趣味は、写真と謡で、写真は川口写友会の会員として下島先生の指導を受け、撮影会ではよく賞品を貰って帰って来た。謡は下掛宝生で、松本謙三先生に三〇番位習った程度。洋楽も大へん好きで、好むレコードをかけては静かに聴き入る事がよくあった。

性質は温良だが、子供の時から癇の強さは、依然として持つており、少しの事にも口やかましく叱り付けるので、家のものは皆こわがっていた。血液型０型でなかなかきかぬ気であり、内心頗（すこぶ）る剛直な処があつたので、人の付きは余りよくはなかったが、おやじは却って此の点を愛し、末たのもしく思つていた。

昭和十八年十二月学徒動員で、早稲田大学文学部二年生であった俊も、東部第十七部隊（目黒の輜重隊）へ入営した。学生時代、軍事教練を馬鹿にして、サボっていた彼も入営後は甲種幹部候補生を目指して、物すごい張り切り方であった。甲幹の試験が通って伍長になる同時に、中部第一

三一部隊(三重県鈴鹿の航空隊)に転属となり、その気象科を卒業した。卒業式には父兄の参列を許されたので昭和十九年十月三十一日父は鈴鹿へ行った。式が終ると同時に見習士官に昇進し、面会が許された。俊は支給されたばかりの新しい見習士官の服をつけ、前の日とどけておいた肥前国住人吉忠作の軍刀を提げて、意気颯爽（さっそう)、しかもにこにことして面会室に現れた。

「明治節には此の軍刀を抜いて敬礼するのですが、まだよく訓練されてない連中が大勢でやるのですから、あぶないものです。式後すぐ外地へ出発します。多分南方だと思いますが、はっきりは、わかりません。死ねば軍から通知がありますから、たとえ通信が無くとも心配しないで下さい。そう、たやすくは死にませんから」と笑った。どうせ死ぬものと覚悟はしていても、この時が最後であるとは思っていなかったが、今から思へば、これが最後の別れだったのである。その後門司市の某写真館から開襟半袖の見習士官の服装で写した写真が送られて来たので、南方へ出発したのだと想像はしたもの、一度の通信もなく、どこへ行ったのやら、わからすじまいで終った。終戦後各方面へ問い合せて見たが、行った先きも、生死の程も皆目不明であった。



『岩田俊遺稿集』（昭和 24 年）

終戦の翌年五月に元第二十二野戦気象隊長佐野年久と言う方から突然通信があった。佐野氏は俊の元の隊長で「俊は比島で昭和二十年三月中旬、この隊が解散になるまで、無事で勤務していたが、その後の消息はわからない」と知らせてくれた。これで始めて比島に行つていた事は、わかったがその後の事は依然として不明であった。

昭和二十二年の秋も半ばの十月二十四日に埼玉県地方世話課から死亡認定理由書というものが届いた。それによると「色々調査した結果、陸軍少尉岩田俊は比島ルソン島北部のサラクサク峠附近の陣地にいたと思はれるが、その陣地は昭和二十年五月二十八日米軍に突破されて全滅した故、俊もその折戦死したものと認定す」と言うのであった。次いで知事より、戦死としての公報があり、十一月二十日には、時雨のビショビショ降る中を一人で布呂敷を持って、世話課へ遺骨と称する小箱を貰いに行った。そうして十一月二十八日に葬儀を執り行った。

かくの如くにして、俊の二十四年の生涯は終りを告げたのである。しかし俊の戦死は認定であり、遺骨の箱はからっぽである。友人の多くは、まだ死んだとは思えないと語っているし、母も何となく、生きているような気がすると言つている。

岩田三史（いわた・さんし）　1890 年（明治 23 年）12 月 3 日－1973 年（昭和 48 年）9 月 3 日）は、日本の医師。貴族院多額納税者議員。埼玉県川口市長。埼玉県北足立郡川口町（現在川口市）出身。1919 年（大正 8 年)、九州帝国大学医学部を卒業。同医学部副手、東京帝国大学医学部細菌学教室研究生となり、医学博士号を取得した。その後、帝国女子医学薬学専門学校（現在の東邦大学）教授、額田内科病院副院長を務めた。31 年（昭和 6 年）6 月 4 日、貴族院多額納税者議員に選出され、32 年（昭和 7 年）9 月 28 日まで在任。33 年（昭和 8 年）4 月 1 日に川口市が成立すると、初代市長に選出され同年 6 月 12 日に就任し、市章の制定、新町名の決定、第 1 回学校体育祭の開催、市広報紙の発行などを推進し、34 年（昭和 9 年）10 月 7 日に市長を退任。39 年（昭和 14 年）9 月 29 日、貴族院多額納税者議員に再度就任し、交友倶楽部に所属して 46 年（昭和 21 年）4 月 13 日まで在任した。その後、公職追放となる。その他、埼玉新聞社社長を務めた。

（出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』）

芸術部門

岩田　健氏（83）　彫刻家

川口市内に多くの作品



「別に何も人さまに尽くした覚えはないが、私の付き合っている人がいい人ばかりで、身に余ってしまう」と控えめに喜ぶ。二〇〇六年度第一回「川口市文化賞」に続いての受賞。

日光御成道脇に続く旧家の九代目。父親は医者で貴族院議員、初代川口市長を務めた岩田三吏氏。同氏は現埼玉新聞社の前身、一九四四年十月設立の社団法人埼玉新聞社の初代社長を務めている。

三六年四月、旧制浦和中学に進学、美術部に入った。美術の福宿（ふすき）光雄先生について学んだ。美術の先輩には洋画家高田誠、渡辺武夫、人間国宝の彫金家増田三男の各氏らそうそうたる顔触れが並ぶ。

四二年、東京美術学校（現東京芸術大学）彫刻科に入学。しかし、在学中は兵役（陸軍特別操縦見習士官）で、宇都宮、福岡、所沢と回り、熊谷で終戦。

一年半の兵役を終え復学、四八年三月卒業後、都内の公立中学校教諭を十五年間、慶応義塾幼稚舎教諭を二十四年間務めた。六八年に第一回個展を銀座で開いて以降、これまで個展は十五回以上。

作品には子どもが多い。「長年教師をやっていたので、何とはなしに子どもになってしまいました」。川口市内に十数体あるほか、蕨市などの近隣市、都内、四国、韓国にも作品が展示されている。

芸術部門

岩田（いわた）　健氏（つよし）（83）

川口市



彫刻家。川口市生まれ。旧制浦和中卒。東京美術学校彫刻科塑造部卒。東京都内の公立中学教諭、慶応義塾幼稚舎教諭に就く。日本美術家連盟会員、日本陶彫会会員、埼玉県美術家協会会員、川口市美術家協会会長。

（「埼玉新聞」　2007年11月16日付）

「彫刻と私」　岩田健

埼玉新聞　2008年（平成20年）1月1日（火曜日）

彫刻と私



岩田　健

思いがけなくも第五十回埼玉文化賞の美術部門賞を頂き、嬉しくも面食らっています。

川口に生まれ育った私は、旧制浦和中学で素晴しい先生と遭いました。福沼（ふくぬき）光雄先生。その教え児に、工芸の人間国宝増田三男先生、洋画の高田誠、渡辺武夫先生。六十代で亡くなった彫刻の吉野慶彦さん。私の同世代の佐藤孝（比島で戦死）。後輩に小松崎君まで、皆先生の教えを受け東京美術学校（現芸大）に進みました。驍尾に付した私も。

在学中に陸軍飛行兵となりましたが、運よく篠原の飛行場で終戦を迎え、福岡や山口の戦友の棚まで預かって身動きがとれず（何しろ列車は窓ガラス全部なく、乗降は窓から。列車の屋根から蒸気機関車の上まで、人がしがみつく時代です）止むを得ず知り合いのお百姓さんに牛車を出して貰い、篠原―川口間六十㌔を歩いて帰ったものでした。

美術学校は昭和二十年の十月から再開されましたが、私たちの応召中、民主的改革が教授陣を一変させていました。文展（今の日展）系の先生に代わり、院展、在野展の方々が教授陣に就いたのです。油絵科は安井、梅原教室へ行けと言われて悦び、彫刻科も木彫部は平櫛田中先生の許で大満足。独り塑造部のみが石井鶴三教授、笹村草家人助教授と合わず、追々復員して来た生徒たちも殆どこちら側につき、新聞にまで報道された所謂「石井教室騒動」となりました。

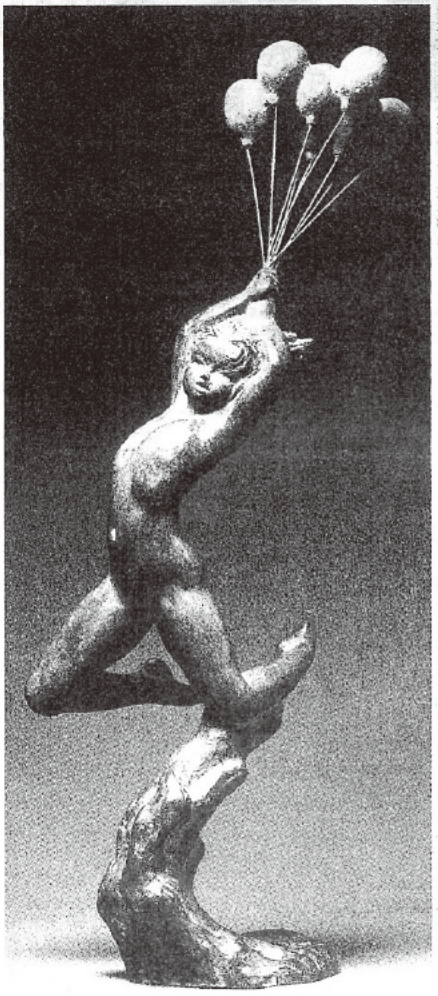
何と、この私が、研究科の建畠覚造から二年生の五十嵐芳三まで二十七、八人の代表となり、当時岩手に退隠されていた高村光太郎先生へ長文の手紙で訴える事になりました。後年、光太郎研究家の北村太一氏が、その手紙を発見。全文のコピーを芸大資料室へ送られましたので、「東京芸術大学百年史」の「日本美術学校篇」第三巻に、"石井教室事件"としてその概要と、手紙の全文が載る事になりました。

そんなこんなで、今の芸大生の十分の一も勉強できず卒業させられてしまった私たちは、当時"デモ・シカ"先生と呼ばれた小・中学校の教師にでもなるより仕方ありませんでした。こうして私の公立中学校十三年間、私立小学校二十四年間の教員生活は始まりました。

子供の指導は精力がいると同時に、それにも況して若いエネルギーを彼らから貰えるものでした。私の彫刻もだんだんに変わって行きました。十九世紀から盛んになった展覧会芸術は、まず自己主張しなければ目立ちません。然し現実ではひどい建築が周囲の町並みを汚染するように、彫刻も小さいながら自分の周囲に雰囲気を持ちます。

四十年間の教師生活は私に「俺ヲ見ロー」と叫んでいるような作品でなく、おやそこに彫刻があった。立ち止まったら心が和んだというような物を作りたいという気にさせました。何時の間にか"子供の""母子像の"作家と言われるようになりましたが、自分にその意識はありません。このアナログの彫刻がどうして今回の受賞となったのか。考えるとお愧（はず）かしく、ありがたい次第です。

いわた　けん　彫刻家。旧制浦和中卒。東京美術学校彫刻科塑造部卒。東京都内の公立中学教諭、慶応義塾幼稚舎教諭などを歴任。日本美術家連盟会員、日本陶彫会会員、埼玉県美術家協会会長。2007年埼玉文化賞受賞。1924年生まれ。川口市在住。



岩田氏の作品「翔ぶ夢」



製作中の岩田氏

（「埼玉新聞」　2008年1月1日付）



空からの火

ブロンズ　H105.0×W30.2×D22.4 ㎝　1972

空からの火

作 岩田健

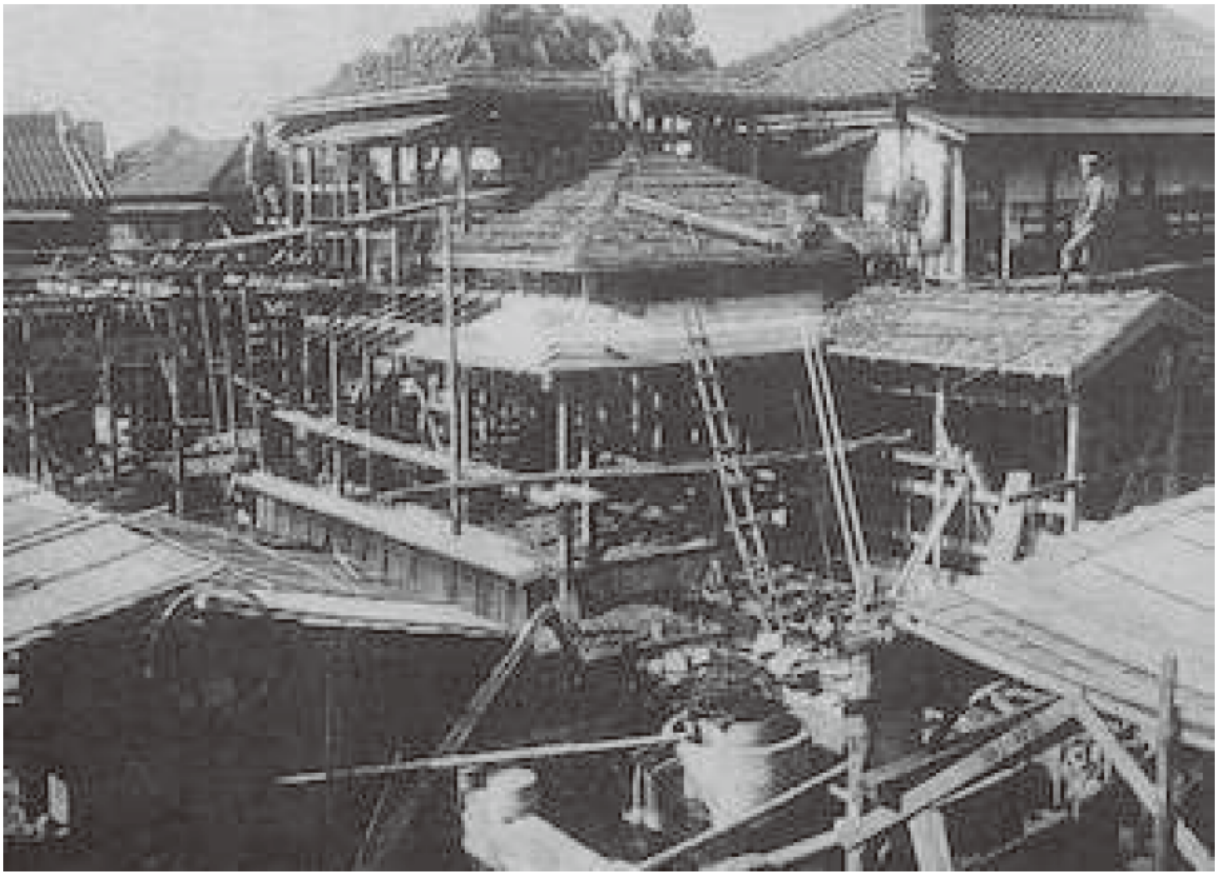
川口の母は二度、荒川の土手に上って震えながら、真赤に燃え上る東京の空を見つめたことがあります。

大正 12 年の関東大震災と、昭和 20 年の東京大空襲です。ことに後者の３月 10 日の下町の大空襲の時には B29 一機が今のオートレース場に墜落、また４・５月には川口のところどころに焼夷弾の雨が降り、王子方面から被弾した一機が爆弾を垂れこぼしながら、火だるまになってこの上空を覆いかぶさり、原町に墜落炎上しました。

夫や我が子を兵隊にとられ、母は必死で幼な子を守りました。その母たちの思いを忘れぬよう、再びあの業火を見ることのないようにと祈りをこめて、この像を建てました。

（1984 年　川口市本町１丁目の鎌倉橋記念緑地に建立）





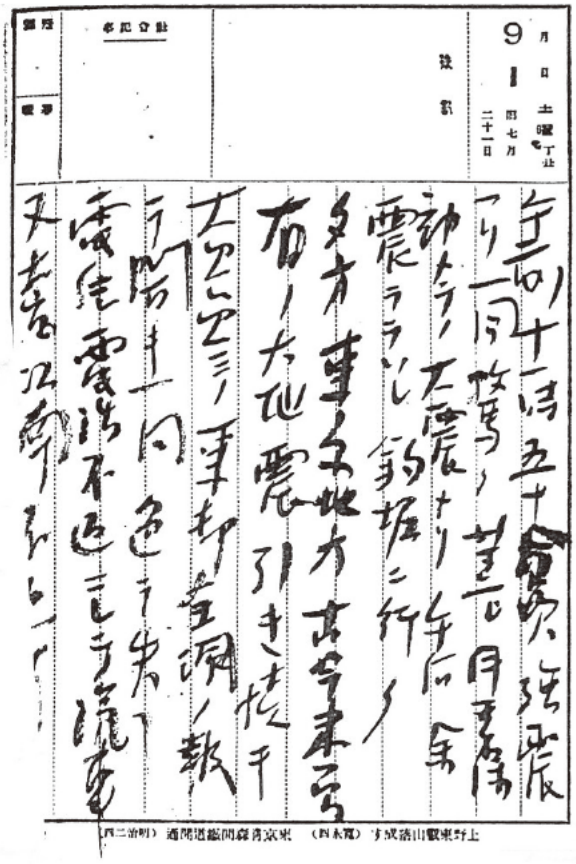
関東大震災で半壊した岩田家。「残った『新座敷』にくっつけて応急の建築中」と説明している。右下（円形）が吹き井戸。岩田健の著書によると、震災直後に永瀬四朗は「朝鮮人が井戸に毒薬を入れて歩ってるってデマが飛んでる」と冷静に判断。流言蜚語に惑わさせることなく、兄岩田三史と協力して、避難民に吹き井戸の水を自由に飲ませたことが書かれている（岩田健著『荒川と御成街道と－小説岩田三史－』より）

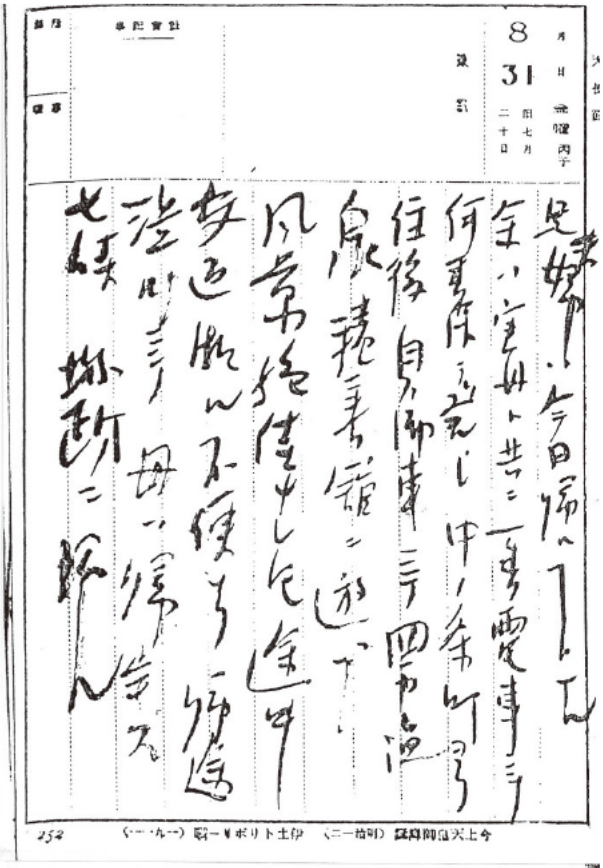
「永瀬四朗日記」と関東大震災

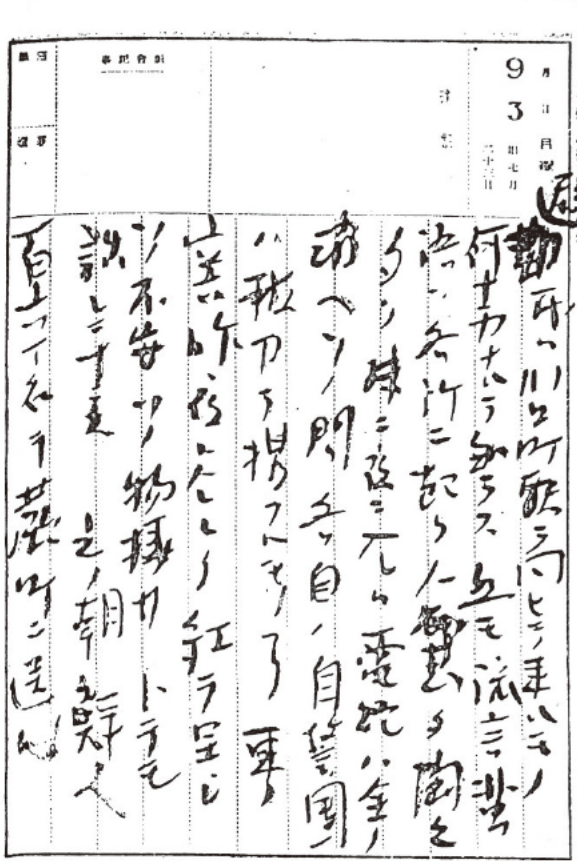
1923（大正 12）年 9 月 1 日に発生した関東大震災。埼玉県下の被害も大きかった。なかでも川口町（現川口市）、粕壁町（現春日部市）、幸手町（現幸手市）の被害が甚大で「埼玉県下の三大被害地」と称した。川口町では家屋全壊が 1804 戸、同半壊が 1501 戸、死傷者は 99 人を数えた。東京と隣接する川口町周辺には大勢の避難民が押し寄せて混乱を極めた。在郷軍人会川口町分会長（陸軍予備少尉）だった永瀬四朗（旧姓岩田四朗。岩田三史の実弟、岩田健の叔父。永瀬洋治・元川口市長の実父）は関東大震災当時の様子を日記に書き記していた。

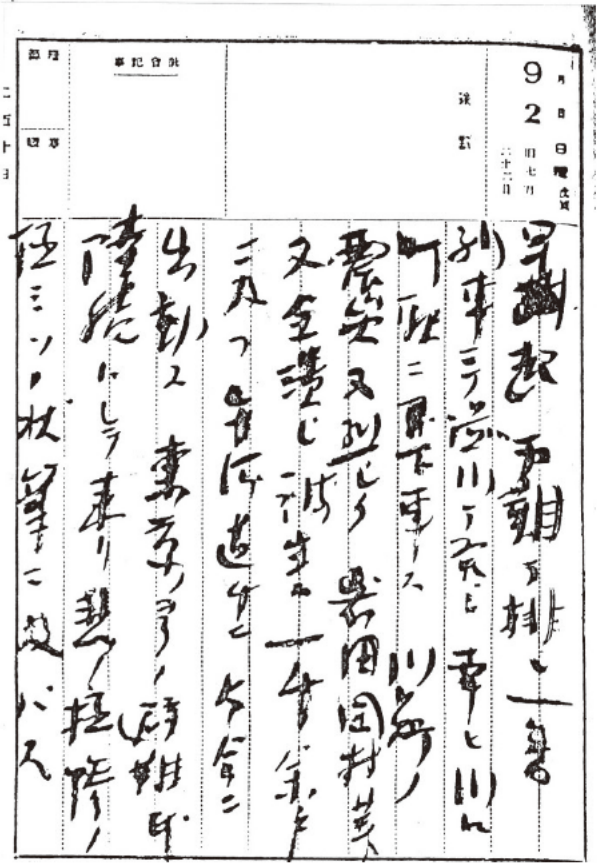
「永瀬四朗日記」

（1923年8月31日から9月3日）



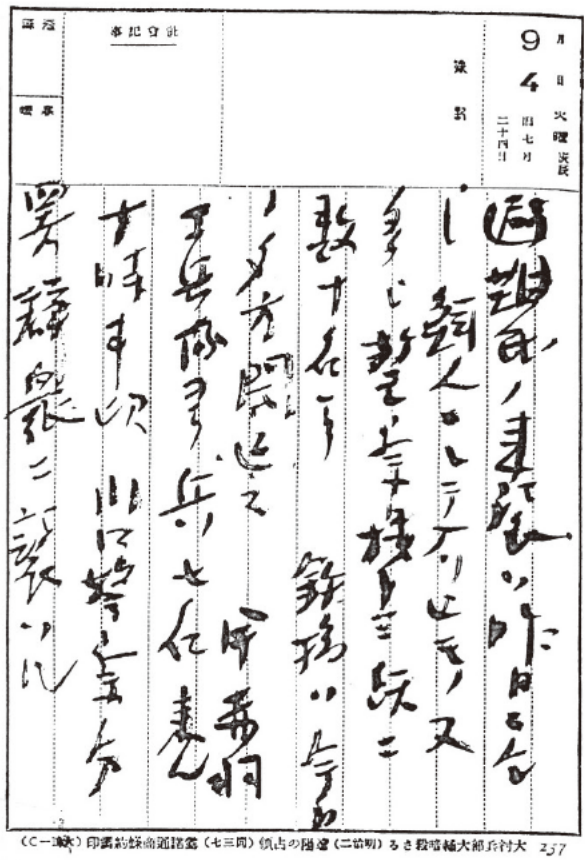


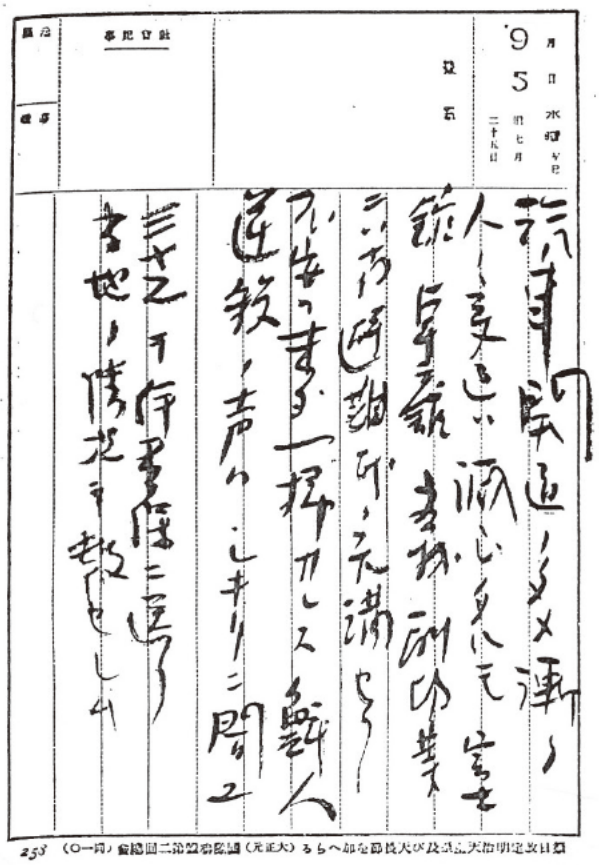


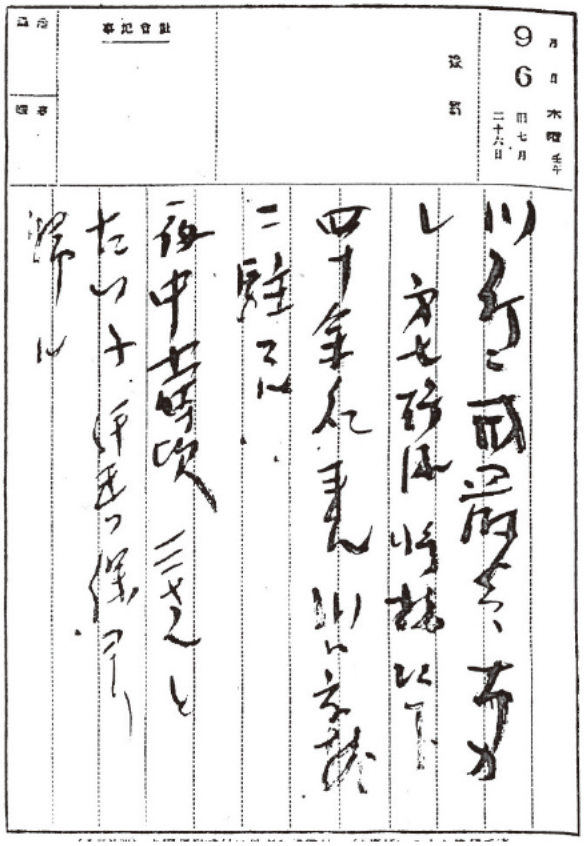


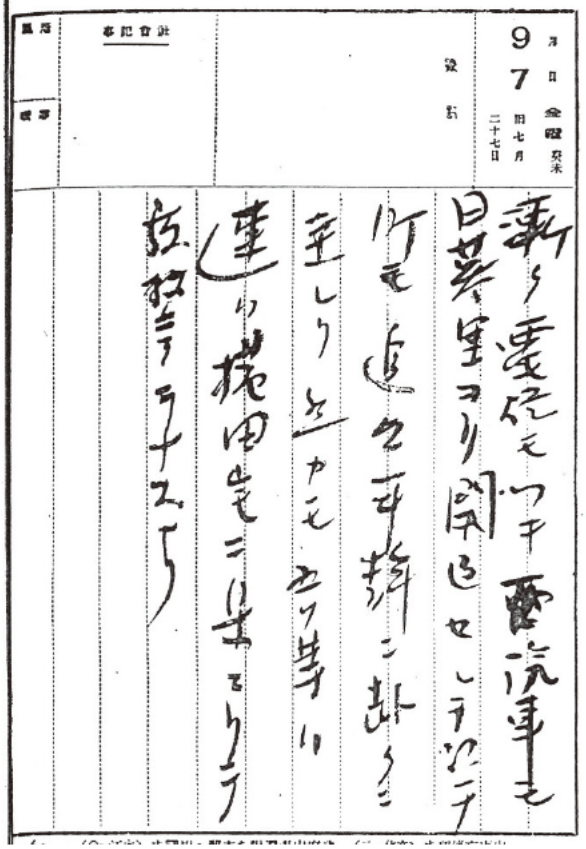
「永瀬四朗日記」

（1923年9月4日から9月7日）









永瀬四朗(在郷軍人会川口町分会長)関東大震災時日記

大正十二(一九二三)年

(八月三十一日から九月七日まで)

(□は解読不能)

■八月三十一日(金)

兄夫婦ハ今日帰ル事トナル。余ハ実母ト共ニ一番電車ニテ伊香保ヨリ発シ、中ノ条町ヨリ往復自動車ニテ四万温泉積善館ニ遊ブ。風景絶佳ナレトモ途中交通誠ニ不便ナリ。帰途渋川ニテ母ハ帰宅ス。七時、城跡ニ帰ル。

■九月一日(土)

午前十一時五十分頃強震アリ。一同驚ク甚シ。伊香保初メテノ大震ナリ。午後、余震ヲヲソレ釣堀ニ行ク。夕方、東京地方古今未曽有ノ大地震、引き続キ大火災ニテ東都全滅ノ報ヲ聞キ一同色ヲ失フ。電信・電話不通ニシテ、汽車又大宮以南不通ナリ。

■九月二日(日)

早起、万難ヲ排シ一番列車ニテ渋川ヲ発シ幸ヒ川口町駅ニ下車ス。川口町ノ震災又烈シク、岩田岡村□又全潰シ、被害一千余戸ニ及フ。午后直チニ分会ニ出動ス。東京ヨリノ避難民陸続トシテ来リ、悲ノ極、惨ノ極ミ、ソノ状筆ニ及バス。

■九月三日(月)

避難民ハ川口町駅ニ向ヒテ来ルモノ何十万ナルヲ知ラス。然モ流言蜚語ハ各所ニ起リ、人心甚タ陶々タリ。殊ニ夜ニ入レハ電燈ハ全ク消ヘ、ソノ間各自ノ自警団ハ抜刀ヲ携フルモノアリ。東ノ空ハ昨夜ト全シク紅ヲ呈シ、ソノ不安、ソノ物議力、トテモ話シニナラス。之ノ朝鮮人百六十名ヲ蕨町ニ送ル。

■九月四日（火）

避難民ノ来襲ハ昨日ニ仝シ。鮮人ニシテ入リ込モノ又多シ。警察楼上ニ既ニ数十名ナリ。鉄橋ハ今日ノ夕方開通ス。今、赤羽工兵隊ヨリ兵七名来ル。十時半頃、川口警察分署群衆ニ襲ハル。

■九月五日（水）

汽車開通ノタメ漸ク人ノ交通ハ減ジタルモ、富士館、卓三（たくみ）館(注1)、高校、劇場等ニハ尚避難民ノ充満セリ。不安ハ未ダ一掃サレス、鮮人逆殺ノ声ハシキリニ聞ユ。三さん（注2)ヲ伊香保ニ送リ、当地ノ情況ヲ報セシム。

■九月六日（木）

川口町ニ戒厳令布カレ、第七聯隊将校以下四十余名来ル。川口高校ニ駐スル。夜中十一時頃、三さんとたい子(注3)、伊香保ヨリ帰ル。

■九月七日（金）

漸ク電燈モツキ、汽車モ日暮里ヨリ開通セシヲ以テ、町モ追々平静ニ赴クニ至レリ。然カモ吾等ハ連日横田宅ニ集マリテ夜警ヲナスナリ。

(1)映画館

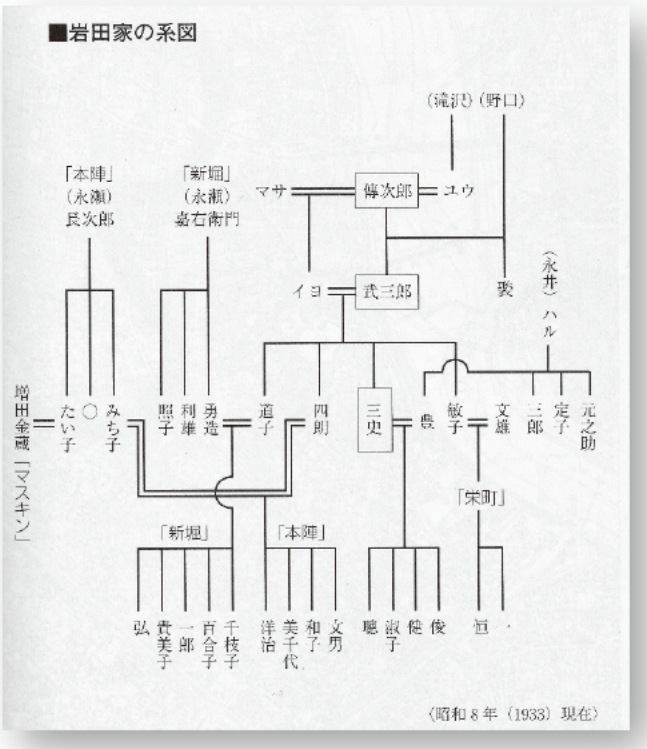
(2)岩田三史（永瀬四朗の実兄）

(3)永瀬たい子（永瀬四朗の妻みち子の妹。義妹）

永瀬四朗



永瀬四朗（帝国在郷軍人会川口町分会長）＝神戸映画資料館 HP より



■岩田家の系図（岩田健著『荒川と御成街道と－小説　岩田三史－』より）

岩田三史の実弟。旧制浦和中（現浦和高校）、帝大（現東京大学）法科卒。卒業後、川口町役場に入庁。同町厚生課長、収入役など歴任。在郷軍人会川口町分会長（陸軍予備少尉）。本陣・永瀬長次郎の婿養子（妻は永瀬みち子）。永瀬洋治（元川口市長）は四朗の次男。

埼玉の名門岩田三史氏の令弟で大正５年帝大法科出身の秀才、本陣長次郎氏の養嗣子である。かつて大正14年町政紊乱（びんらん）の極に達しこれを収拾せんと欲する重大使命を帯びて、永瀬庄吉翁町長の椅子に就くや、武州銀行槻支店長より収入役に選ばれ永瀬町長を輔佐してよく難局を処理した。その手腕のごときは何人の追随も許さざるところである。現在は厚生課長在郷軍人聯総連合会会長として、一糸乱れざる統制下に指導啓発するがごとき徳望は実に偉大なものであって、その存在たるやあらゆる方面より期待されるもいまだ真価に至っては充分発揮さるものにあらず、今後における活躍こそ目覚ましきものがあることは今より逆賭するに難くはない。

（『埼玉県勢 第１篇』、44 頁）

埼玉であったこと－関東大震災 97 周年に寄せて－

光州市立美術館名誉館長　河正雄

―関東大震災 80 周年記念報告―

本日、関東大震災 80 周年記念集会の開催にあたり、これまで実行委員会の皆様が関東大震災によって引き起こされた諸事件、それによって犠牲となった人々を追悼、この歴史的経緯について追求する学習会を開き、多くの関係資料を発掘して、これらの真実を広く報告されてきましたことに対し敬意を表する。





関東大震災 80 周年記念集会のシンポジウムで報告する河正雄＝2003 年 8 月 31 日、東京都・江東区亀戸文化センター

埼玉県には関東大震災（大正 12 年・1923 年）による朝鮮人犠牲者の慰霊碑や、供養塔、墓などが数多く残されている。熊谷市の熊谷寺に約 70 名、本庄市長峰墓地に88名、上里町神保原の安盛寺に 42 名の慰霊碑がある。児玉町浄眼寺に無縁の供養塔、寄居町正樹院に具学永の墓、さいたま市大宮の常泉寺には姜大興の墓などがある。

毎年、熊谷市、本庄市、上里町など行政が主催し、地元の民団や総連も参加しての慰霊祭が行われ、それぞれの寺院では住職が手厚く慰霊している。私は幾度か9月１日の慰霊祭に出席し、流言飛語による軍、警察、自警団による大量殺戮で受難した同胞達の霊に合掌した。

私は1959年に秋田より川口市領家に移住してきた。仙元橋、榔木の橋の近くで、領家はまだ未開の地でアシヤナギが茂っていた。芝川付近は鋳物工場が林立している一大工業地帯であった。そこに入野鋳工所があった。高校時代、母の手伝いで秋田から運んだヤミ米を買って下さったお得意さんである。社長であった入野作一氏（故人）の家屋を譲り受け領家に住むようになったのが川口での生活の始まりであった。

入野作一氏は時折、私の足を止めて、関東大震災の話をしてくれた。「『朝鮮人が放火した』『朝鮮人が井戸に毒を入れた』と官憲が流したデマは震災翌日から広がった。その責任を朝鮮人と社会主義者、そして自警団に押しつけた事件である。何の罪科もない朝鮮人が猟銃や鳶口、竹槍や日本刀で武装した自警団がデマに踊らされて、関東全域で 6000 余人以上がその暴力により虐殺された。天災であると同

時に人災である。血生臭い歴史は日本人の恥であった。」と語った。

「大震災の時、闇に紛れて木船が岩淵（赤羽）より舟戸ヶ原（川口）に近づいて来るという半鐘が鳴った。自分は家にあった日本刀を持って駆けつけた。現場では自警団が集団で船の中の菰の下に隠れている朝鮮人を竹槍で突き、日本刀で斬りつけていた。その時、何のためにと考える余裕はなく、ただ恐怖と朝鮮人に対する憎悪だけがあった。それは如何に当時の日本人が狂っていたかということであった。翌日、荒川は血で染まり、人肉を魚が食べているのを見たときは怖かった。今でも夢に見ることがある。」と懺悔していた。

家の近くの宝湯という銭湯で、浅黒い肌のガリガリとした小柄の鋳物職工とよく会うことがあった。この人も入野作一氏と同じく自警団として舟戸ヶ原に駆けつけた一人であった。「朝鮮人など人間ではない。こちらがやらねば朝鮮人にやられると思い込んでいた。」と、その時のことを体を洗いながら武勇伝のように何度も自慢していたのを聞いた。反省など何一つ感じられなかったその言葉に苦々しい嫌悪感を感じ、それは未だに晴れる事がない。

1980 年、川口市青木町にある得信寺（浄土真宗）を訪ねた。同じ町内に住む朝鮮人が得信寺に関東大震災の時の朝鮮人犠牲者の遺骨があると教えてくれたからである。「愚かさとは深い知性と謙虚さである。」と寺門の脇にある掲示板に貼り紙があった。高口得信住職は新潟出身の方で、以前は川口神社がある金山町のある寺にいたという。1959 年に庫裡を青木町に建て、1963 年に霊堂を建てたと得信寺縁起の石碑に記してある。

住職が「長い間この寺に祀っていたが縁故者があらわれたので、その遺骨は帰しました。」と答えられたときは安堵したと共に、よくそれまで守って下さったと感謝した。その事が起因となって川口にも犠牲者が、どこかの寺に葬られていることだろうと舟戸ヶ原付近の善光寺や錫杖寺、そして私の家の近くにあった正覚寺、実相寺、私の父が眠っている光音寺など訪ね調べてみたが、どの寺もそのような痕跡がなかった。何もなくてよかったという気持ちと、腑に落ちないわだかまった気持ちが、心に今もよぎる。入野作一氏や鋳物職工の話と得信寺に遺骨があったという事実、山田昭次立教大名誉教授の調査研究によると荒川放水路沿いで軍隊が機関銃で大勢の朝鮮人が撃ち殺されたという報告をされた事実などから、川口付近でも歴史の中で封印されている事が多いと思われるからだ。



在日韓民族無縁之霊碑＝日高市の聖天院

1995 年、長瀞に住んでいる在日一世の尹炳道氏が高麗山聖天院横田辨明住職に「終戦までに数十年間に沢山の無縁仏が日本のあちこちに散在して、誰も訪れる者がいない。何とかこの地に葬り供養したい。」と申し入れた。そして私に「日本国内にお

ける民団や総連の垣根を超え関東大震災、第2次世界大戦で犠牲になった同胞の御霊と渡来人の御霊が安眠出来るように供養したい。在日韓民族無縁の霊碑建立の事業に協力してほしい。」と頼まれた。

「熊谷、本庄、上里で関東大震災の朝鮮人犠牲者の慰霊祭に出席してきたが、いつもイデオロギーによる民団と総連が鍔迫り合いをして先陣争いをする。スタンドプレーの見苦しい風態は在日韓国、朝鮮人の恥である。霊に対しても、心ある日本人にも申し訳ないことである。なんとか霊が鎮まり安寧でありますように、この聖天院に静かに祀り供養したい。」と尹氏は付け加えた。

2000 年 11 月 3 日、深谷市に住んでいる石田貞氏の協力を得て埼玉県における関東大震災の朝鮮人犠牲者 207 名の過去帳を奉安して、私は聖天院在日韓民族無縁之霊碑の除幕、開眼法要の式辞を述べた。

「20 世紀は、韓日、朝日、両民族の歴史において、まさに激動の時代でした。在日同胞 100 年の歩みはまさにその象徴であります。この 100 年の間に、祖国を離れた異国の地で、望郷の思いを噛みしめながら痛恨の生涯を終えた人々はどれほどの数になるでしょう。今日に至るまで、我が在日同胞は、家業に精励し、子弟を養育し、あらゆる苦難を乗り越えて祖国と日本の発展に大きく寄与・貢献して参りました。

在日一世尹炳道氏の発願により、聖天院寺域奥山に、在日韓民族無縁之霊碑と納骨堂、並びに慰霊塔が建立されました。歴史の中で犠牲になられた在日同胞達の御霊が安眠できるように供養したいとの願いからであります。それはまた、在日同胞が歩んだ苦闘の歴史が風化しないように、歴史の真実が埋没しないように、子々孫々にまで語り継ごうとの願いによるものであります。民族の統一を願い、日本と韓国・朝鮮の友好・親善を願う多くの皆様のご理解とご尽力によって、この事業が実現しましたことは、何よりの喜びであります。

先人達が歩んできた 20 世紀の歴史を、21 世紀を担う若い世代に伝えていくことは、我々に課せられた大きな使命であります。霊碑の建立が、在日同胞の願いを新しい世紀に伝える新たな一歩になることを祈念するものです。私達は 21 世紀に向け、よき兄弟として、争わず信じあう良きパートナーとして善隣・友好の絆を深めていかなければなりません。本日ここに、よい心、広い心、同じ心を通い合わせて、未来の子孫のために、世界のため、人類のために寄与・貢献し、豊かで平和な 21 世紀を創造する起縁を結んだことは、諸霊に対する何よりの供養となるでしょう。諸霊のとこしえに安らかなることを祈ります。」

毎年 9 月 5 日は聖天院のお施餓鬼の日であるが霊碑の建立以後、関東大震災朝鮮人犠牲者の諸霊を慰霊する日となった。この日は日韓の歌人達が集い慰霊のための献歌祭を開いている。

過去の記憶は社会の財産、我々在日同胞の財産であるという認識。この尊い犠牲を無駄にせず教訓を生かして同胞社会の発展と住み良い環境づくりに精進する。過去をないがしろにせず、きちんと反省し学んで歴史の流れとして子々孫々伝えていく。真の善隣への懸け橋をつくる役割を担おうという誓いのためである。

関東大震災での死者は約 10 万人。うち火災旋風による焼死者は9万1千人という。犠牲者の身元が確認出来なかったという史実から見ても、地震より火災による2次災害が恐ろしいのだという事を示している。

だが私は「デマが怖い。ふだんは実直な民衆が棍棒や日本刀を振り上げた、竹槍を持って突いた人々の心理が怖い。ああいう凶行がもう起こらないと誰も保証出来ないだろう。」と言いたい。

1999年9月7日、本庄市にある長峰無縁墓地で心ない事件が起こった。朝鮮人犠牲者慰霊碑を囲む石柱23本の内、7本が倒されたのである。また碑の西側にある無縁の墓34基の内、27基が倒され、内7基がハンマーで割られてしまった。目撃者の証言によると30代から40代の男が犯行に及んでいたらしいが、犯人を逮捕することが出来なかった為に、この事件は3年後に時効を迎え有耶無耶となった。



神田明神（東京・千代田区外神田）から見た東京の焼け野原（日本近代史研究会編『図説　国民の歴史　13』　国文社発行より）

また最近、朝鮮人学校女生徒の制服であるチマチョゴリを切り裂くという事件や、朝鮮人を日本から駆逐するまで爆弾を仕掛けるという「建国義勇軍」事件などは陰険極まりないものがある。

集団虐殺の事実が終戦の日まで明らかにされなかったという事実。国がなかったために韓国人はあれだけの残酷な虐殺にあっても、人権侵害に抗議することはもちろん、弁明の機会もなく事件の調査要求もできなかった無念さを知らなければならない。朝鮮人の恨という感情に余りにも無知な行為であると言える。

虐殺事件の根源には日本社会に民族差別が今だ根深く残っていることを再確認させる。この事件は在日同胞の歴史の原点であることを忘れてはならない悲劇である。そしてこの悲劇はいつ何時、また繰り返されるとも限らない。我々は英知と理性を持って防災に務めなければならない。

私が語りたかったのは、辛く苦しい時代を共に生きなかったからといって目を背けるのではなく、恋人や母親に対し、別れを告げることも無く亡くなっていった人達が何を思い、何を言いたかったかを理解したいからだ。

何の罪科もなく、無造作に命を奪われた人達は大義のために死んでいったのではない。未来の子供達のためにも、亡くなっていった無名の人達を私達は忘れてはならない。彼らは歴史における悲劇をもって、生きるということの価値を私達に教える師であり、間違った道を進まぬ為の物言わぬ道標であるからだ。

思いだしてあげること、それが何よりの供養である。それ故に、亡くなった物言わぬ人達の代弁者となり、生きている私達が語り継いでいかねばならない。彼らには慰霊される権利があり、過去を礎に今を生きて

いる私達には慰霊をせねばならない義務があると思うからだ。過去の惨劇を風化させないことが私達の務めであると胸に抱きつつ、日本と韓国「二つの祖国」で私は生きている。

（2003 年 8 月 30 日　東京都江東区亀戸文化センターカメリア・ホールにて　関東大震災80周年記念集会にての報告書）

―傍証記録―

『川口市史　近代資料編Ⅰ』「205・関東大地震実記（長島彦太郎）第 4 章　夜警と鮮人騒ぎ」の抜粋である。川口市安行領家での関東大震災時の記録（長島剛次郎所蔵）である。（カタカナの記述をひらがなに直し、実記の文字をそのまま引用する）

「有史以来の大地震及東京の大火災等を機とし不逞鮮人が東京横浜に暴動し其の余波は我県内にも侵入して早やその一団は根岸鳩ヶ谷方面に出没したとの怪報が3日午後2時頃に達せられたので血気の青年や在郷軍人等は日本刀、脇差、槍、竹槍、鉄棒等を持って自警団を形成した。

不逞鮮人が既に近在に妄動したと聞いた村民の人心は如何であろう。鮮人暴行団襲来の報流言蜚語早鐘の如く伝播し極度の不安と恐怖にて各地住民は半狂乱となった。

鮮人を恐れて寝もせず。東京の火災は不逞鮮人と社会主義者の仕業と噂され彼らは爆裂弾を携えて家を焼き毒薬を井戸に投じて危害を加えるそうだ。依って東京方面では鮮人は誰彼と問わず之を捉えて撲殺する由、其の他各地にて見当次第鮮人を討殺したのだ。

9月5日、埼玉県千葉県とも戒厳令が布かれた。9 月 6 日の北足立郡長の通報である。「朝鮮人の風評に関し針小棒大の説を為すものあり誤解を招くの虞有之候処右は朝鮮人必ずしも不逞の者に之無く候。苟も暴行に出ずるが如き事無き用御訓戒相成候。」

鮮人暴動も近在に切迫せぬから騒ぎ立てる程もなかった9月7日、福田雅太郎関東戒厳司令官は「自警団及び一般人民は武器又は凶器の携帯を許さず。全て鮮人が悪い企をして居る様に思うのは大まちがいである。」と命令を発した。

関東大震災六十周年朝鮮人犠牲者調査追悼事業実行委員会編集・発行の『かくされていた歴史－関東大震災と埼玉の朝鮮人虐殺事件－（増補保存版）』の 58 頁に掲載されて



赤羽付近の荒川につくられた船橋を渡る避難民＝1923 年 9 月 3 日
（『図説　国民の歴史　13』より）

いる川口市、中村晃一郎の記録である。

「9 月 3 日に東京に行った。〔中略〕荒川の船橋（渡し）のあたり赤羽寄りに 20～30 名の死体が浮いているのを目撃した。朝鮮人の死体だ言われていたのを覚えている。」

浦和の饗庭喜蔵の「大震災日記」（『かくされていた歴史』257 頁）にも 9 月 3 日午前「川口駅では大勢の群衆が不逞鮮人とかを追廻して居たのを見た。」とある。また赤羽側でも「兵隊が〔不逞鮮人を〕追廻して居た」と書き記している。吉野作造（法学博士）の調査によれば、川口で虐殺された朝鮮人は 33 人とある（『かくされていた歴史』225 頁）。地方新聞の中の伝え聞きとして川口での朝鮮人虐殺は 30～70 人という記録もあるが、証拠はない。

大垣市北新町宮村松郎、同市中町の成宮二郎の証言（1923 年 9 月 6 日名古屋新聞）である。

「私共は上野の山火事で追ひ出され 2 日 7 時頃まで食はず飲まずで日暮里まで逃げのび此処で汽車を見つけ貨物列車に飛び乗ったが動かぬので夢中になって赤羽迄来たが、ここから又 2 里半の道をくたくたになって川口迄出た時は 2 日の夜 9 時頃であったが、荒川の鉄橋が落ちていたので船橋を架けて貰って渡った。其時 20 名程の不逞鮮人が群がって来てその船橋を切断しました。

その際 2、3 人の人は流されて死んだやうでした何しろ辺りが真暗で皆が橋を渡って仕舞った頃軍隊が来て鮮人は撃退されて 4、5 人の鮮人が銃殺される所を見受けました。

鮮人は労働者風の者で私が来る時は川口町は焼けて居りませんでした。軍隊は殆ど一町毎に銃剣付きで町を護って居た。何しろ最初の地震以来飯も喰はず水も飲まないでヘトヘトになって来たが川口駅で握り飯を貪るようにして貰った。之は1個30銭であった…」

私は永瀬洋治（1931 年－2012 年）川口市長とは埼玉県議会議員時代（1966 年）から交際があった。洋治の父四朗は初代川口市長（1933 年就任）の岩田三史（1890 年－1973 年）の弟で、三史の子息は彫刻家の岩田健（1924 年－2016 年）であった。住まいが赤羽岩淵岸と結ぶ川口市本町の船橋（渡し）の舟渡岸にあった。

1960 年代、私は川口市元郷 2 丁目で電化製品販売店河本電機商事を経営していた。我が家には風呂があったが、家風呂には入らず、店の隣にあった銭湯の「宝湯」に入るのが楽しみで通った。

「宝湯」さんは古屋の取り壊し材を燃料にしてお





川口市小学生と韓国光州市小学生の図画作品展。日韓親善友好を願う河正雄さんが懸け橋となって実現した（写真上）＝1982 年 11 月。記念式典であいさつする永瀬洋治川口市長（下）＝同年 10 月 24 日

り、その古材の運搬路として車が我が店の脇道を常時通っていた。町会の世話役をされており、いろいろな情報も集まっていた。

ある日、「宝湯」さんが「この元郷 2 丁目には魚屋、八百屋、畳屋、カメラ屋、パーマ屋、歯医者、雑貨店、味噌屋などの商業を営む店が多数ある。他の町会には商業会の組織があるが、我が町会にはない。若い君達が町会の発展の為に商業会を作って欲しい。」と懇願された。

私は商業だけでなく鋳物工場や鉄工所も含めた工業会も合わせ、発展する構想を提案し全員の賛同を得た。こうして 1966 年に結成されたのが「元郷 2 丁目商工業会」で私はその会長の任に就いた。

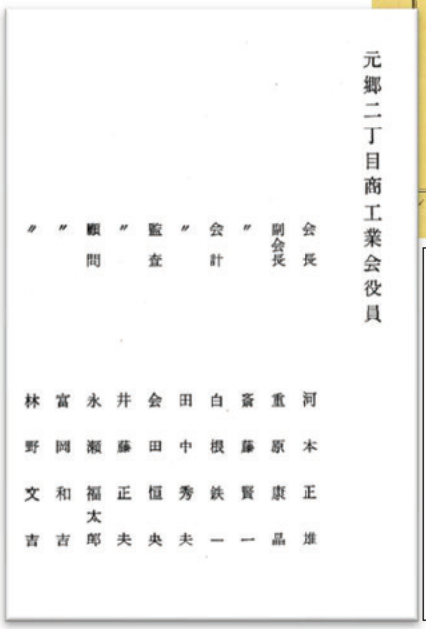
その会の忘年会や新年会、総会などに公職にあった永瀬洋治氏が参席されて祝辞を述べ、懇親された。永瀬さんは隣町の金山町会での行事に私を呼んで下さり、相互交流を続けた。

その後に永瀬氏が川口市長に就任し、私が会員として所属していた川口市美術家協会の顧問になられたことで総会等で交流は続いた。岩田健氏は協会の会長職を務められていたが永瀬氏と姻戚関係にあるとは知らなかった。

川口青年会議所の依頼で 1982 年には川口市と光州市の日韓親善図画交流会を開催した。川口市での表彰式には永瀬市長も出席され、親善を深めた。

2003 年、京浜東北線川口駅のホームで市長退職後の永瀬氏と出会い、東京駅までの間、会話を交わした。「河さんは今、何をしているのか？」と問われ、「最近は関東大震災の記念集会シンポジウムで、埼玉で起きた事を報告しました。川口でも震災の時はデマやヘイトスピーチがあったことを調べております。」と答えた。





河正雄（河本正雄）の提案で 1966 年 7 月に結成された「元郷二丁目商工業会」の会員名簿（上）と当時の役員名簿（左）。忘年会などの会合には当時県議会議員だった永瀬洋治も駆けつけ、河正雄と交流を続けた。

「そういえば私の義父が関東大震災の時に書いていた日記が机の中にある。いつか君に見せてあげる。」と言われて驚いた。「是非見せて下さい。」と再会を約束して、その場は別れた。しかし約束は実現する事なく、永瀬洋治氏は 2012 年 2 月に御逝去された。

川口市東領家で株式会社岡宮美術を営む岡宮紀秀は、私が営んだ「河本電機」のお得意様であった。岡宮さんの仲介で 2005 年、韓国全羅南道霊岩郡立河正雄美術館に「二人と猫」、光州市立美術館に「朝の母子像」「夕の母子像」の彫刻作品を岩田健から寄贈を受けた。

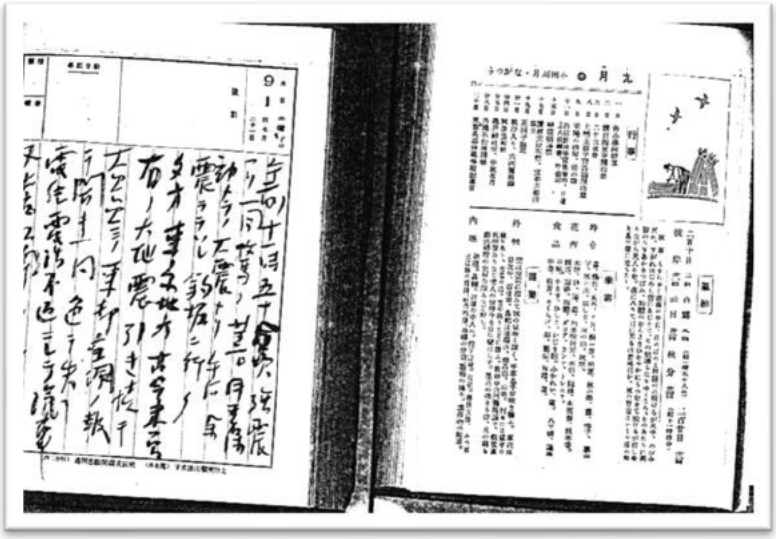
岡宮氏と伺った川口市本町の岩田先生宅芝庭には数点のブロンズ像が展示されていた。庭の展示作

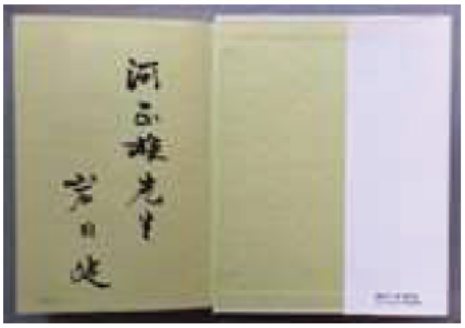
品から平安と安らぎ、慰めと祈りのメッセージを受けたような気持になり、温かな人間性を感じた。先生の、教育者が持っている慈悲深い威厳と物静かな応対と振る舞いに品性を感じた。

わたしの「祈りの美術館」構想やコレクションの収集テーマに合うので寄贈を申し入れた。岩田先生は「私の作品が河さんの祈りをテーマとした美術館に収蔵して貰えることは光栄です。韓国の皆さんに愛して貰えることは、とても嬉しいことだ。」と喜ばれた。

2020年1月31日WHOが緊急事態宣言を布告したコロナウイルス禍。韓国は入国禁止、日本は出国禁止、故郷秋田の田沢湖と山梨の清里も移動自粛、私は自宅に籠り書架の整理を始めた。

岩田健著『荒川と御成街道と－小説　岩田三史－』(文芸社刊2002年刊・絶版)が書架にあったのだ。その本の中に永瀬四朗の日記のコピーが挟み込まれていた。サイン入りで著者から贈呈されていたものをしまい込み、それまでその本の存在を忘れていたのだ。





岩田健から河正雄に贈られたサイン入りの本『荒川と御成街道と』(写真左)。叔父永瀬四朗が書いた日記のコピーが本の中に挟み込まれていた（上）

著書には関東大震災の記述があり、日記のコピーは永瀬四朗の関東大震災時(1923年8月31日～9月7日)の日記であった。永瀬市長は生前の私との約束を守ってくれていていたのだと欠礼を詫び、感謝した。

急ぎ茶谷十六先生(財団法人民族芸術研究所理事、秋田県歴史教育協議会会長)にその日記の解読を依頼した。その全文を紹介する(32～33頁)。

岩田健著書と永瀬四朗の日記を読み解くと関東大震災時の生々しい状況が甦ってくる資料である。

(2020年5月20日　本文記す)

『荒川と御成街道と－小説　岩田三史－』より

（岩田健著　2002年6月、文芸社刊）

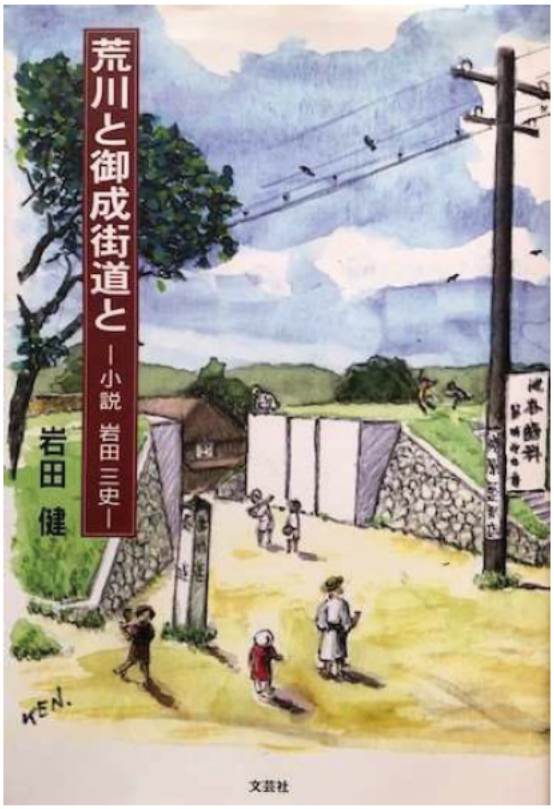
震災後

■避難民の救護

伊香保に残った四朗は、同時刻、かなりの揺れを感じました。一階を借りていたので番頭がすぐ顔を出して、伊香保でこんな地震初めてですなどと云っているうちに余震が来、一同釣堀に避難することにしました。もう九月に入った事ではあり、湯治客の姿もまばらでした。そのまま何事もなく、文男が空腹を訴えたので、昼飯を食べに宿に帰りました。遅昼が終って暫くすると、前の子持山、小野子山にはまだ日が照りつけているのに、榛名の山懐の伊香保はもう陽が翳（かげ）って、夕方の気配が忍び寄ってきました。その時番頭さんがまた慌しく入ってきて、驚くべき報告をしました。

東京地方古今未曾有の大災害。火災発生し東都炎上中、電信電話不通、汽車も亦大宮以南不通……。

四朗は今更乍ら昨日イヨを帰してしまった事を悔いました。とにかく私は明日の一番で万難を排して川口へ帰る。あんたたちは安全に帰れるめどが立つまでここにいなさい、と色を変ている女たちに命じました。遊び人を自称する四朗は、変身していました。



岩田健著『荒川と御成街道と－小説　岩田三史－』。カバー絵は昭和 12 年ごろの荒川堤の切通しの記憶復元図

三史はガスの元栓を閉め、ギムザ希釈液（注１）を瓶に戻し、バットも洗ってしまい、何度目かの揺れ返しを感じながら道路を隔てた医院（順天堂はなぜかあの立派な病院を医院と称していました）の方へ行ってみました。三階建のモダンな医院は屋根のスレートが少々落ちていましたが、お医者様たちは医局と称する玄関二階の大部屋に集って、案外のんびりと煙草を喫い乍ら談笑して居り、看護婦さんたちは割れたガラス器などを片付けていました。

「何しろいきなりドーンだろう。砲兵工廠の爆発かと思ったよ。地震なら地震らしく、グラグラとか何とか云うべきじゃないかね。近頃は地震まで礼儀を忘れとる」

佐藤院長が喋っていましたが、三史を見ると。

「お、岩田君。まだ居たのか。君の家は川口だったね。汽車は不通らしい。上野まで歩いて、一番に動いた汽車で帰り給え」と云いました。三史が渋っていると、

「君は一家の主だ、帰らなきゃいかん。研究生を手伝わせる程、今人手は不足して居らんから」と重ねて勧めてくれました。

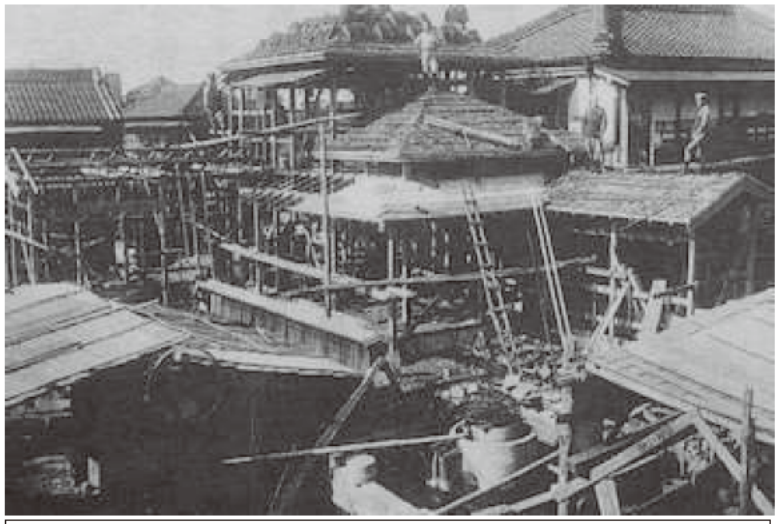
三史は有難くその言葉を受けて医院を出ました。お茶の水の崖の処々に、亀裂や地崩れが生じ、水の色が濁っているのを見ると、急に心配になり始めました。田端まで歩いてみよう。そのうち汽車も動くだろう。三史は思い決して歩き出しました（事実は、列車は午後の六時頃迄は断続的に動き、最後の数千人を赤羽駅まで運んだ後、途絶したようです。翌日には上野駅も焼けました）。

相当に強い南風が吹いていて、三史は後押しされるように道を急ぎました。家々はそんなに被害は多くなく、倒壊しているのは大雑把に見て、十軒に一軒の割合でしょうか。それより道にパックリ開いた地割れが、三史の不安を増しました。「かねやす」の前迄来ると、本郷の交差点の向

うに、何か騒ぎが見えました。野次馬根性を反省しているとは謂え今の場合一本道なので、赤門に近付かざるを得ません。門まで来ると、構内の建物の一つが火災を起して、その消火騒ぎと判りました？帝大図書館という事で、三史もよく利用させて貰っている建物だけに、木の間ごしに煙と炎が南風にあおられているのを見ると、肌が粟立ちました。三史は益々歩を早めました。

吉祥寺の門前で振返ると、右うしろに黒い雲のようなものが見えました。駒込の鉄道の切通しは方々で崖崩れがあり、保線工夫たちが働いていました。もし三史が順天堂から北へ進んだ道を、直角に東にとって同じ距離を歩いたとしたら、どんなに悲惨な光景が見られた事でしょう。三史が通った本郷の高台の僅か五町東寄り、つまり上野広小路でさえ、これから二時間も経つと、深川・本所方面からの避難民の群で、大混乱に陥るのでしたし、三史が後にして来たあの落着き払った順天堂ですら、院長が冗談に云った小石川の砲兵工廠（現在の後楽園遊園地一帯にあった）の出火から、夕方になって変った西風の為、火に包まれる運命にあるのでしたが、三史はそんな事を知る由もなく、今、西ヶ原あたりを北へ急いでいました。

三史はあくまで運のいい男でした。市内の様子を聞きたがり、川口迄ですか大変ですねと水を汲んでくれた西ヶ原のお百姓さんも、一夜明ければ朝鮮人暴動のデマに脅え、目を吊上げて道行く人を咎めるようになるのでしたが、この時は三史を止める人はまだありませんでした。



関東大震災で壊れた岩田家。残った「新座敷」にくっつけて応急の建築中。手前が吹き井戸（岩田健著『荒川と御成街道と－小説　岩田三史－』より）

唯、本郷区から北豊島郡へ出て、更に被害は少なくなったと思ったのは、飛鳥山の高台までで、王子の平地を見下ろすと、潰れた家が目立ちました。三史は追われるように清水（しみず）坂を降りました。もう川口が遥かに望まれ、そちらの方面には有難い事に火事の煙は見当たりませんでした。ただ赤羽の町で、藁屋根よりも瓦屋根に被害が多いのが気に懸りました。

やっと岩淵を抜けて、荒川土手に上って北を望んだ時、三史は危うくそこに坐り込んでしまう所でした。何時も見慣れた風景、土手下集落の向う、川口側の土手の切通しのすぐ右に見られる幾棟かの岩田家の屋根が失くなっているのです。銅板葺の善光寺の甍（いらか）は杜の上にちゃんと見えるのに、瓦葺の岩田家は見えなくなってしまったのです。

呆然と立ちつくす三史の右後方には、何とも云えぬ不気味な黒雲が、本所、深川の運命を暗示するように、空に立ち籠めていました。

三史は這うようにして舟橋を渡りました。柔軟構造の舟橋は幸い無事でしたが、三町程上（かみ）の鉄橋は完全に落ちて、鉄道交通は途絶していました。我家はお店と奥の間は全壊、新座敷と石蔵は無事、裏の土蔵群は屋根が落ちたり壁が剥がれたり、炭倉と呼んでいた土蔵も全壊でした。奉公人たちは忙しく今夜の炊爨（すいさん）や宿泊の支度をしていましたし、家族は新座敷に集っていました。誰もが無事と知った時、三史は疲れが一遍に出るのを覚えましたが、豊（とよ）が俊（たかし）を庇（かば）って何時間か四肢で天井を支えていた事、その右肩すれすれに巨大な梁が落ちていた事、俊の泣声を聞きつけて掘出してくれたのは、駆けつけた土手下集落の小作の人たちだった事など聞いて愕然（がくぜん）とし、又粛然としました。だから常々人にしてあげられる事があったらしておくものだ、という祖父のお説教も、今は襟を正して聞きました。

夜に入ると、東京方面の黒雲は火の柱に変っていました。三史は、父や祖父と相談して、一番ショックを受けているであろう豊と俊を、母イヨと女中のサトやをつけて、この間出来た栄町の

家――姉敏子の宅へと泊りにやりました。その頃になると、東京方面からの避難民が舟橋を渡り、或いは千住方面から続々とやってきました。人々は岩田の前の十字路で落合い、また二手に分れて、本町（ほんちょう）通りと土手づたいに川口町駅を指して歩き出すのですが、その前に、岩田の倒れた塀の中に吹き井戸を見つけると、争って水を呑みに入って来ました。江戸名所図絵にも川口の「鍋屋の井」の図があるくらい、川口の地下には浦和水脈と呼ばれるいい水脈が通っていて、翌々年にはビール会社が出来るのもその為でしたが、今岩田の井戸は地震にも涸れず滾々（こんこん）と地上六尺の高さに清水を吹上げていました。その水を飲み、土手で一休みした人たちは、川口町駅まであと一息です。川口町から北行きの汽車は出ているようですと聞くと、勇気を出して早く駅に着こうと歩き始めるのです。

翌日、東京上空の黒雲は東にも南にも拡がって、三史はしきりと順天堂が気になりましたが、どうする事もできませんでした。それより家の片付け、向いの全壊した岡村の手伝い、千余戸に及ぶという川口の被害見舞の方が先でした。避難民は、昨夜は、赤羽駅で汽車が停ってしまった為、取敢えず川口町駅まで歩くのだと云った人たちが多かったのに対し、今日は着のみ着のまま火から逃れて来たと云った感じで、数も悲惨さもぐっと増しました。

昼頃、四朗がひょっこり顔を出しました。煤けた顔をし、母さんと嫂（あによめ）さん（豊）には栄町の家で会って来たと云い、祖父（じい）さんも親父も無事だってね、どれどんな塩配だいと、店から丸見えになってしまった中庭を見渡し、うわ、こりゃひどいや、後片付けが大変だ、俺ん家も新堀も大丈夫だからね、見舞いに来るにゃ及ばないよ、と帰って行きました。

四朗の姿が見えなくなった途端、三史は彼とはつい一昨日伊香保で別れたのだったと気がつきました。あの静かな伊香保の生活が、遥かな昔、手の届かない外国ででもあった事のような気がしました。と同時に、おそらく列車に乗る為に大変な苦労をし、やっと川口迄帰り着いたであろう弟が急に懐かしくなって、急いで外に出て見ましたが、四朗の姿はもうありませんでした。

夕方、三史は乞われて小学校の臨時救護所で（小学校も二棟倒壊しましたが、一番大きい東校舎は無事でした）、罹災者の手当をしている時、再び四朗に会いました。この度はきちっと陸軍少尉の軍服に身を包み、在郷軍人分会長の資格で、消防組頭の田島さんと避難民収容所の見聞にやって来たのでした。兄弟はチラとお互いを瞥見（べっけん）し、ちょっと眩しいような感情を味わいました。弟は兄の白衣姿、兄は弟の軍服姿に。それは尊敬五分、彼が自分から離れてしまった感四分、蔑視一分の変な感情でした。話を交す暇もなく四朗は次の収容所（学校から程近い川口劇場と卓三館（たくみかん）という二つの映画館）へ向い、三史はその間繃帯（ほうたい）を巻く手を休めませんでした。

夜遅く疲れ切った三史は、学校脇の姉の家に疎開した母と妊娠した妻を見舞い、家へ帰る途中、真赤な東京の空をバックに陸続と続く黒い影のような罹災者の群に逆らって歩いている中で、三度び四朗に逢いました。彼は川口町役場の高張提灯（注２）の下でサーベルを杖代りに突いて立っており、傍に役場の入らしい人影が数人、炊出所はそこ、救護所はあっち、駅はこう行ったらいいなどと、避難民の世話をしていました。三史が気怯（おく）れを覚えて立止まると四朗の方が気付いて寄ってきました。

「兄さん、お宅の井戸だがねえ……」

その声音と、喋るときやや唇を歪める癖が、忽ち彼をいつもの四朗に引き戻しました。それにしても唐突な話題の意味が計り兼ねました。

「朝鮮人が井戸に毒薬を入れて歩ってるってデマが飛んでるんだ。で、お宅の塀はぶっかれたまんま、人の飲み放題にしてやってるけど、塀を直した方がいいんじゃねえか」

「そうさな……」

三史もちょっと迷いました。すると西ヶ原でお百姓さんに汲んで貰った水がいかに美味しかったか、まざまざと想い出されました。思えばつい昨日の午後の事なのでしたが……。

「いや、飲みたいだけ飲んで貰おう。あんた自身デマだって云ってるんだし……」

「そうだな。それに毒入れたって、吹き井戸じゃ仕方なかんべ」

兄弟は初めて顔見合せてハハハ……と笑いました。その顔は南天の火の色を反映して赤く染まっていました。

■デマ

翌三日になっても、事態は深刻になるばかりでした。三史は町内に二つある救恤所（きゅうじゅつしょ）を反復駆け廻り、薬品も繃帯も使い果しました。学校の隣が、ついこの三月浦和署から分離独立した川口警察でしたので（その前は鳩ヶ谷署の分署だった）、三史はお手伝いの学校の先生に、署長の権限で何とかするように云ってやりました。先生はすぐ両手に一杯の繃帯を抱えて帰って来、警察にあっただけ貰って来ました。今署長は忙しいので、済んだらすぐ何とかするそうです、と云いました。三史が尋くと、町内の朝鮮人百六十人を蕨まで護送するんで、巡査や在郷軍人の手が足りないんです、との返事でした次から次から押寄せるこの罹災者を何とかしなければならない時に、一体署長は何を考えているんだ、と三史は腹を立て乍ら、先生から繃帯を引ったくりました。

その三史も夕方には自分の言動を反省することになります。炊出しのおにぎりを頬張っている時、四朗が例の軍装で入って来、

「や、兄さん、一日家に帰らずか、ご苦労さん」と挙手の敬礼をしました。

「そっちこそご苦労だな、町の様子はどうだい」と三史が訊くと、

「いやひどいものだ。悲々惨々の極。避難民何万とも知れずだ。本町通りはあの連中の匂いで焦臭くなってら。停車場も凄いね。客車の屋根から機関車の煙突まで人が鈴なりになっているから発車出来ないんだよ。で時が経てば経つ程人が獅噛（しが）みつくから、汽車の形が見えなくなっちゃってね。長い長い人間の塊が線路の上に延びてるみたいだぜ。川口に住んでたことを感謝しなくちゃ」

三史も同感しながら、ふと川口は何故火災に遭わなかったか疑問に思いました。

「そうか、兄貴は外へばっかり出てたんで知らないんだな。川口の金屋（鋳物工場）はね、毎月一日（ついたち）は休むしきたりで、しかも二日は日曜。で皆フキドコ（溶鉱炉）の火落としてたんだ。これが普段の日であってご覧よ。どんなひどい事になっていたか……」

成程そんな事だったのか。三史も改めてゾッとしました。

「ところで署長は、兄さんに叱られたからって、県庁の方へ薬品や繃帯を至急送れって要請したそうだ。もう届いたかい。あの署長は人物だぜ、いえその朝鮮人の事さ。夕べ云ったろ、井戸に毒入れるってデマ。今日はもっとひどくなって、荏原の方じゃ徒党を組んで東京へ攻上って来るとか、方々の変電所に爆裂弾を投げ込んだとかさ。署長はいち早くそれを察知して、どっちに間違いがあってもいけねえってんで、町中の朝鮮人を集めて蕨へ送っちゃった。何ってったって避難民が少ないし、浦和署の管轄で治安もいいしさ。成程、俺が蕨へ付いてった時静かだったねえあすこは。ところが帰って来て川口巡邏中にゃ、槍を持ったり抜身を携えてる奴なんか居てね、何事だって尋くと、朝鮮人をぶった切るんであります、と来るのさ。血の気の多い奴がいるからね。署長の英断がなきゃ今頃血の雨だぁね」

三史は今更乍ら自分の不明を恥じました。俺には先見の明がない。従って人の上に立つ資格がない。署長は偉い。四朗も英法科を出ている上、将校教育を受けてきただけに、人を指揮する能力がある。やっぱり俺は徽菌（ばいきん）を相手にしている方が性に合っている。よし、一人一人の患者さんなら俺だって相手にしてやれる。もう一働きだ……。四朗が今夜も夜警だと出て行った後、カーバイトの匂いの強いアセチレン・ランプの下で、三史は腕まくりし直しました。まだ全町停電でした。

翌日、事態はまだよくなりませんでした。岩田の家は街道のとっつきでしたので、家に居る方が救恤所にいるより事の重大さが判りました。一日目の避難民より四日目の避難民の方が遥かに凄惨でした。豪気な祖父傅次郎も八十三歳の齢に勝てず、朝から新座敷に坐り込んでいましたし、父の武三郎は奉公人を指揮して、吹き井戸に群がる人たちを介抱していました。三史は逃げるように避難する人たちの波に揉まれて、救恤所に向いました。本町通りはゆうべ四朗が云った通り、きな臭い匂いに満ちていました。

昼頃、校庭に号令のような声が聞こえ、人々が窓に群りました。物見高いのでは人後に落ちぬ三史も、早速窓辺に寄りました。赤羽工兵隊から七人の兵隊が完全軍装備で到着した所だそうで、僅かそれだけの人数でも、人たちは明らかに安堵したようでした。軍人嫌いの三史がわざとそれを無視して視線を逸らせたら、そこに変な物を見つけました。警察署の前に署にはそぐわない見

越しの松（注３）があるのですが、そこに一人の男が両手でぶら下って居、署の二階からそれに向って何本かの手が差し伸べられていました。その声や仕草から、三史は昨日蕨へ行き損なったか、新たに越境して来た朝鮮人たちだなと思いました。いいさ、署長がまた賢明な処置を取るだろう、そう思って三史は負傷者たちの所に戻りました。

今晩こそは早く帰して貰おうと、十時頃救恤所を後にした三史は、背後に異様な物音を聞き、取って返して警察署が暴徒に襲撃されている光景を目撃しました。暴徒たちは手に手に刀や視棒を持って署長は朝鮮の味方かとか、朝鮮人を出せとか怒鳴っていましたが、町内に散っていた巡査が追い追いに戻って来た上、剣付鉄砲の工兵隊がわっと喊声を挙げて走って来ると、忽ち蜘蛛の子を散らすように四散してしまいました。窓ガラスを割り、戸を破って署に押し入っていた二、三人は、そのまま逮捕されたようでした。今日も色んな事があったと思い乍ら家に帰って見ると、昼頃、鉄橋が修復して鉄道が開通したという明るいニュースが待っていました。やれやれ、これで避難して来る人も減るだろう、三史は寝床に倒れ込みました。

夢の中でも四朗は夜警をやっていました。三史を見ると寄って来て、兄さん恋女房が家へ帰りたいと云っているぜ、迎えに行ってやんなと云いました。三史がまだ余震が怖いからと云うと、だって姉さんは来月大橋文雄と結婚だ、凌雲閣はぶっかれたぜと云います。見ると二人の逢引先浅草十二階と呼ばれる凌雲閣が、鉛筆のように根本から倒れていて、文雄が足を挟まれて痛い痛いと云っていました。三史が文雄の足にヨーチンを塗ろうとすると文雄が立ち上がり、何時の間にか敏子がその横に来て、此処は私たちの家よ、入っちゃ駄目とバタンと扉を閉めました。三史と豊は栄町の家の外に取残されました。

三史は汗びっしょりで目を覚まし、幾ら疲れたからって馬鹿な夢を見るものだと、自分に腹を立てました。しかし大橋君と姉さんの結婚が十月初旬ってのは既定の事実だ。大橋君が焼け出されて姉さん所へ転がり込んだら、まさにお邪魔様だろう。今日にも豊や俊は連れて帰ろう。九月五日の早暁の光の中で、三史は汗を拭き乍らこう思いました。



関東大震災発生直後の避難者輸送。写真には「大正拾弐年九月一日震災ニ際シ川口町驛避難者輸送」と書かれている。（川口商工会議所の HP より）

朝になると、汽車開通のお蔭で流入人口は目だって減りました。しかし学校、卓三館、富士館、川口劇場の避難所に群れている罹災者はそのままでしたし、数が減ったとは言え避難民の悲惨さは言語に絶しました。衣類はチリチリに焼け焦げ、血は布にこびり着き、やっと繃帯を外して見ると、そこには蛆（うじ）がびっしりたかっていたりしました。三史はピッセットで丹念に蛆を取り消毒をし乍ら、この作業が永遠に続くような気さえして来るのでした。朝鮮人虐殺の報も頻（しき）りに伝わって来ました。平穏な県外に強制護送中、上尾、熊谷、神保原などで暴徒に襲撃されたそうで、その中に蕨に行った連中も居るのかと胸が痛みました。

翌六日、川口町にも戒厳令が布告され、山形から三十二連隊の将校以下四十数名が到着しました。七日には電灯も点きました。汽車も日暮里から大宮まで直通、大宮からは別の汽車に乗換えて、地方に行けるようになりました。学校もまだ罹災者がいたり、兵隊さんの駐営地にもなっていましたが、一応再開され、今日は点呼をとるだけで生徒たちは帰り、先生方は一室で職員会議を開きました。さぞ犠牲者も多いだろうと思われたのに、児童の欠席は案外少なく、欠席者も所

在の判っている者が大多数だと、先生方の喜びが救護所迄伝わって来ました。街の空気も昨日迄に較べ、ぐっと明るくなりました。

駆け出しの医学生も今や一ぱしの医者扱いで、負傷者から尊敬され、先生先生と頼りにされました。それにもまして在郷軍人分会長永瀬四朗は、枢要な地位にありました。工兵隊が来た時も、三十二連隊が来た時も、常に迎えるのは彼でしたし、町長や署長にも頼りにされ、田島消防組頭とは常に行動を共にしていました。後で述べる変な事件まで、彼が出て行かなければ納まりませんでした。

十月に入ってすぐ敏子と大橋文雄は、まだお隣の小学校にいる警備隊に遠慮し乍らも、栄町の家で内々の結婚式を挙げました。武三郎、イヨ、三史、四朗、新堀の勇造、岡村母子の七名が岩田方、大橋方は文雄の伯父さんに当る人二名が列席しました。翌日、傅次郎に挨拶に来た新夫婦に、四朗が来合せて、文雄を連れてまた岡村、新堀と挨拶廻りに出掛けました。こう云う事は気さくな四朗の方が三史より適任でした。

翌日の夕方、その四朗に、妹道子の義父永瀬嘉右衛門氏より緊急の電話がありました。息子勇造が九月四日の警察襲撃事件の容疑がかかった一人として連行されたと云うのです。勇造は四朗に云わせれば“俺より遊び人”で、名家の跡取りで、四朗のように軍隊にも行かず、当時珍しかったオートバイをぶっ飛ばしている口でしたから、こう云う騒擾事件には喜んで出て行く方でした。あるいは煽動者の一人だったかもしれません。三史は、そんな勇造の生き方に痛快な共感と羨望の念を持っていました。

四朗は警察に直行し、連絡を受けた三史は新堀へ顔出しに行きました。カイゼル髭（ひげ）の嘉右衛門氏が「あいいつはそう云う奴なんで……」と繰返しこぼし、道子の方が「兄さん、済みません。あの人、すぐ帰ってくるから」と気丈で、夫の愚痴は云いませんでした。千枝子、百合子はあまり来た事のない伯父に遠慮がちですし、一郎は人見知りの年頃、貴美子はまだ乳呑児でしたので、話下手の三史は慰めようもなく、口の中でもがもが云っているだけでした。暫くすると四朗から電話で、町長、校長等と、貰い下げの懇願をした結果、県から来た刑事課長も承知してくれたからもう大丈夫、釈放されたら一緒に帰るからとの事に安心して家に帰りました。

ところが実際四朗と勇造が帰って来たのは翌日の昼過ぎでした。二十余名の附和雷同者は放免するが、首謀者Ｔは断然留置すると言渡されたのが夜半過ぎで、四朗たちはそれから鳩首協議の結果、誓約書を書き、町長、在郷軍人分会長、消防組頭、青年団長、商工会頭、鋳物組合長などの名誉職の署名を貰い集め、それを提出してやっと許されたのが昼近くになりました。それから平民食堂（川口唯一の大衆レストラン。今のマンモス交番の所にあった）で一同昼飯を食べて解散したのだそうです。

そうか、名誉職の誓約書か。署長は筋を通したな。しかし四朗はうまくやったものだ。彼がいなけりや、こんなに早く片付かなかったかもしれない。彼自身がもう町の名士じゃないか。それに引換え俺はどうだ。順天堂の研究室は解散になってしまった。研究所の建物が、焼けた病院代りに使われてるんじや仕方がないが、俺は何処へ行ったらいいんだ。三史は頭を抱えてしまいました。

（注１）「ギムザ希釈液」　白血球、血小板など、血液中の細胞を染めて標本にする為の液。ギムザ氏は一九世紀末から二〇世紀にかけてのドイツの化学者、細菌学者。

（注２）「高張提灯」　竿の先に高く掲げた提灯。

（注３）「見越しの松」　門内、玄関脇に植えられた、塀より高い松。

（岩田健著『荒川と御成街道と－小説　岩田三史－』2002 年６月、文芸社より抜粋）

永瀬四朗の「関東大震災時日記」について

日朝協会埼玉県連合会会長　関原正裕

関東大震災時、川口で朝鮮人が殺されたという確かな記録は今のところない。しかし『かくされていた歴史』の中に、川口市の中村晃一郎の９月３日の証言として「荒川の船橋（渡し）のあたり、20～30 名の死体が浮いているのを目撃した。朝鮮人の死体だといわれた…」[1]とあり、また後述する『名古屋新聞』の報道もあるので、朝鮮人虐殺があったことはほぼ間違いないと思われる。『かくされていた歴史』では当時の新聞報道から、川口では 30～70 人の朝鮮人が犠牲になったとしているが、事件から 50 年の 1973 年の調査では確認できなかったとしている。

以下、永瀬四朗の「関東大震災時日記」（以下「永瀬四朗日記」）の注目すべき記述について、他の史料と合わせて見ていきたい。

「赤羽工兵隊ヨリ兵七名来ル」と『名古屋新聞』報道

川口に関する新聞報道一つは、河正雄さんも紹介している 1923 年９月６日付『名古屋新聞』である。震災当時、東海道線と中央線が不通となり、東京から名古屋方面に行くには、歩いて赤羽に行き荒川を船橋で渡って川口へ[2]、そこで列車に乗って高崎から長野に行き、塩尻に戻って中央線に乗り換え名古屋へ行くしか方法がなかった[3]。つまり、川口駅は震災直後に名古屋、関西方面へ行く人々が出発する駅だったのである。

『名古屋新聞』に掲載された、このルートで岐阜県大垣に帰った人物の９月２日夜の川口での目撃談は次のとおりである。

不逞の徒が橋を切断して突殺された
　倒壊家屋から助けて呉の悲鳴
　　僅かの米でも水でも奪ひ合ひ
　　九死に一生に帰つた大垣の人

猛火に包まれた東京市から川口を経て九死に一生を得て大垣に帰った同市北新　町宮村松郎、中町成宮二郎両名は交々語る。「私共は上野の山火事で追ひ出され二日夜七時頃迄食はず飲まずで日暮里迄逃げのび此処で汽車を見付け貨物列車の飛び乗ったが　動かぬので夢中になって赤羽迄来たが　此処から又二里半の道をくたくたになって川口迄出た時は二日の夜九時ころであったが　荒川の鉄橋が落ちて居たので　舟橋を架けて貰って渡った、其時二十名程の不逞鮮人が群がって来てその舟橋を切断しました、其際二三人の人は流されて死んだやうでした何しろあたりが真暗で皆が川を渡って仕舞った頃軍隊が来て鮮人は撃退され四五人の鮮人が銃殺される所を見受けました、鮮人は労働者風の者で　私が来る時は川口町は焼けて居りませんでした、軍隊は殆ど一町毎に銃剣付きで町を護って居た、何しろ最初の地震以来飯も喰はず水も飲まないのでヘトヘトになってきたが川口駅で握飯を貪るようにして貰った、之は一個三十銭であった、・・・・」　（1923 年９月６日付『名古屋新聞』）

この記事によれば９月２日の夜の時点で川口に軍隊が出動していたことになる。東京に戒厳令が出されるのが２日、埼玉は４日、金沢の師団が埼玉に到着するのが６日だった。荒川をはさんだ対岸の赤羽には陸軍の部隊（工兵隊）がいたので、この部隊が船橋を渡って川口に来て警備等

にあたっていた可能性は十分考えられる。「永瀬四朗日記」の９月４日に「赤羽工兵隊ヨリ兵七名来ル」との記述は、この新聞記事の軍隊による虐殺を補強する史料になると考えられる。

他にも、赤羽の工兵隊の出動と川口に関わる史料がある。埼玉県北足立郡役所編纂の『埼玉県北足立郡大正震災誌』の「震災激甚地川口町に於ける救護施医の状況」によれば、川口では震災直後に町役場門前に炊出し場を開設し、罹災者の救援を行なっていたが「此間に於て鮮人問題起りて人心恟々として不安の念日一日と高まり、何時如何なる変事を惹起するやも計り難きを慮り、同町在郷軍人分会幷に消防組員と協力して治安維持に努め、且赤羽工兵隊兵員の派遣を請ひ、続て戒厳令を布かれて軍隊の出動に依り稍や鎮静を見る」[4]にいたったというのである。北足立郡役所が９月２日の戒厳令が施行される以前に、「鮮人問題」への対処のために赤羽工兵隊の派遣を求めていたのである。

また、『東京府大正震災誌』によれば「在赤羽近衛、第一両師団の工兵隊は、九月一日命を待つことなしに所要の兵力を屯営附近竝東京市内に派遣して消防救出に従事し」[5]とあり、戒厳令発令以前に赤羽の工兵隊は活動を始めていたのである。

『名古屋新聞』の報道のように、９月２日夜という埼玉県内では最もはやい段階で、赤羽工兵隊と思われる部隊が民衆のまえで朝鮮人を虐殺したとなれば、このことがその後の県内の自警団による虐殺を誘発した可能性はきわめて高い。しかし、川口での軍隊による虐殺と自警団による虐殺を関連付ける資料や証言は現在の所見つかっていない。

９月２日・３日の記述について

「永瀬四朗日記」９月２日に「東京ヨリノ避難民陸続トシテ来リ」との記述があるが、『名古屋新聞』の記事と比べると、２日の日中の川口への避難民は「陸続トシテ」というのは少し誇張されているように感じる。また、赤羽・川口間の舟を繋いだ船橋については、２列になって渡ったという証言もあり[6]、あまり多くの人々の移動には使いにくかったようである。しかし、ある程度の数の東京からの避難民は川口に来たようである。２日には避難民のことは書かれているが、朝鮮人に関わる流言蜚語の記述はない。避難民から東京での流言蜚語は伝えられなかったのだろうか。

９月３日には「流言蜚語ハ各所ニ起リ」「自警団ハ抜刀ヲ携フルモノアリ」「ソノ不安、ソノ物議力、トテモ話シニナラス」「朝鮮人 160 名ヲ蕨町ニ送ル」などの記述があり、３日になって「不逞鮮人」暴動などの流言により混乱と恐怖が急速に広がったことが分かる。なお、「朝鮮人 160 名ヲ蕨町ニ送ル」との記述は『埼玉県北足立郡大正震災誌』にも同じ記述がある。

東京に隣接する川口において流言蜚語が広がったのが９月３日ということは、２日に避難民が川口に流言を持ち込んだのでなく、前述の『名古屋新聞』の９月２日夜の軍隊による朝鮮人虐殺そのものが、翌３日の流言蜚語の発生源であったとも考えられる。

「川口警察分署群衆ニ襲ハル」

９月４日「十時半頃、川口警察分署群集ニ襲ハル」との記述については、『埼玉県北足立郡大正震災誌』に、光音寺住職小林乗雲の話として９月２日の深夜(3 日に及ぶ)に「不逞鮮人なり６名を引き出せと怒号」し朝鮮人の小屋を取り囲む自警団に、「危害を加ふる勿れ」と言って、川口警察分署に朝鮮人の保護を求めて連れて行き、署長に申し入れたとある。また、署に朝鮮人が保護されていることを聞きつけたと思われる群衆が、９月４日に警察分署を襲撃したという記述もある。収容されていたのは「49 名の鮮人並びに１名の支那人」と書かれている。

また、別の史料によると、9月2日東京からの避難民から「鮮人暴行ノ事実」を伝えられて恐怖を感じた川口付近の住民が「川口町附近荒川河川改修工事ニ雇用セラレツヽアッタ百余名ノ鮮人労働者」の措置を警察当局に求めていたところ、9月2日午後更に東京府から「百余名ノ鮮人集団」が川口に到着し、住民たちの動揺が激しくなったという。この状況を受けて「川口分署管轄区域所在ノ百数十名ノ鮮人」を「数組ニ分割シテ、…九月二日夜カラ、川口町ヨリ鉄道線路ヲ伝ツテ、浦和町ニ出デ、之ヨリ仲仙道ヲ北方ニ向ッテ逓送」を始めたとある[7]。このような状況から、川口の荒川沿岸の地域では震災直後の早い段階から「不逞鮮人」の流言が広がり、緊張した状況になっていたと思われる。

以上のような9月2日午後から夜の事態と「永瀬四朗日記」の4日の「川口警察分署群集ニ襲ハル」とどう関連するかは不明である。

「鮮人逆殺ノ声ハシキリニ聞ユ」

9月5日「鮮人逆殺ノ声ハシキリニ聞ユ」との記述は、どこの朝鮮人虐殺を指しているのだろうか。4日夕から5日にかけて熊谷、神保原、本庄で夥しい朝鮮人が自警団、群集によって虐殺されている。このことよりも川口から近い東京での虐殺、あるいは川口での虐殺を指しているのだろうか。不明である。

以上、川口における関東大震災時の朝鮮人虐殺と「永瀬四朗日記」との関りについてまとめてみた。まだまだ不明なところが多いのだが、埼玉県内での朝鮮人虐殺事件で軍隊との関わりが出てくるのは川口だけなので、ここは何とか事実を究明していきたい。

---

1 『増補保存版かくされていた歴史―関東大震災と埼玉の朝鮮人虐殺事件』(関東大震災60周年朝鮮人犠牲者調査追悼事業実行委員会、1987年)58頁。

2 赤羽・川口間は荒川に鉄道の架橋はあるが、現在も人や車の橋はない。当時は舟と舟を結び付けた舟橋が普段からあって、川口の人たちはこれを使って東京に行っていたようである。ただそれほど多くの人は通行できなかったようだ。中山道は戸田と板橋の間に戸田橋があり、こちらは人も車も大量に渡れたと思われる。

3 赤羽・川口間の鉄橋の損害については「赤羽川口町間荒川の橋梁一部沈下仮修理の上4日より日暮里まで開通」(東京朝日新聞社編纂『関東大震災記』1923年10月10日、17頁)とあり、9月4日に仮復旧しているので被害は軽かったようである。

4 埼玉県北足立郡役所編『埼玉県北足立大正震災誌』1925年、109頁。

5 『東京府大正震災誌』(東京府、1925年)の「第五編第四節陸軍省及戒厳司令部」、23頁。

6 「避難民は二列となって赤羽から船橋を渡って『川口駅へ』『川口駅』へと動いていく其群集は大変なものだ」とある。「竹井長野県内務部長の脱出談」『名古屋新聞信州付録』1923年9月7日。

7 『綾川武治　述　埼玉県自警団事件経過真相』(埼玉県立熊谷図書館蔵、1923年)

関東大震災と川口の被害

（『川口市史　通史編　下巻』より抜粋）

大正一二年（一九二三）九月一日午前一一時五八分、相模湾を震源地（東経一三九度、北緯三五度付近）とするマグニチュード七・九の地震が関東地方を襲い、大きな被害を与えた。世にいう関東大震災である。被害は、東京・神奈川がもっともひどく、埼玉県は、それに比べ軽度であったというものの、やはり、稀に見る大災害であった。農作物への被害は水害に比べ少なかったが、建物の被害総額は、実に一四五万一一九五円を数え、戦前でもっとも被害の大きかった昭和一三年水害と比べても、約一〇倍という大きさであった。この建物被害を含む震災被害総額は、一七一六万七四二四円と記録されている。

県南部に位置し、東京に隣接する川口市域は、概して被害の程度が大きく、家屋全壊一八〇四戸、同半壊一五〇一戸、死傷者九九人であった。とくに、鋳物工場が軒を並べる旧川口町は、全半壊家屋計一五一九戸を出し、二戸のうち一戸の割合で、全壊または半壊となった。また、死傷者は三四人で、粕壁（かすかべ）町・幸手町と並ぶ県内の三大被災地といわれた。地震がちょうど昼食時であったことから東京では大火災が起こっているが、鋳物業は作業に火を使うことから、川口でもその可能性がない訳ではなかった。しかし、偶然にも、一日は慣例的な川口鋳物業の休業日で工場の火は落とされており、火災から免れることができたのである（近代Ⅰ四八四頁）。

関東大震災の社会的影響

（『川口市史　通史編　下巻』より抜粋）

前述のように、関東大震災は人びとに大きな直接的被害を与えたが、それのみならず、社会にも、かなりの影響を及ぼした。その一つが、震災後に始まった在日朝鮮人に対する暴行・迫害である。この点について、長島彦太郎の記述を追ってみよう（近代Ⅰ四六四頁）。

長島の居住する安行村領家では、九月一日の夜から早速、帝国在郷軍人分会・青年団・消防組を中心とする夜警が始まった。それは、多くの家屋が倒壊し、戸締りもできないという状況に応じた自警であった。ただ、この地域を受け持つ巡査が、小菅刑務所から一五〇人も囚人が逃走したから諸君方も一層警戒する様注意していったので、緊張して殺気だった夜警となり、四人一組で各人棍棒を持ち、一組が巡回を終われば、すぐにもう一組が巡回するという方法などが取られた。巡査のもたらしたこの情報が、人びとを集団ヒステリー的状況に巻き込む引き金となったといえよう。

「不逞（ふてい）鮮人」が、東京や横浜で暴動を起こしたという流言輩語が、安行村領家の人びとに伝えられたのは九月三日午後のことであった。しかも、この情報には、すでに、その一団が神根村根岸や鳩ヶ谷方面に入ったという尾ひれが付いており、これを聞いた男たちは、各自、棍棒・鋤・万能・刀・槍などを持って村の入口や要所に集まり警戒を固めた。この時のことを長島は、「戦時以上の気分で人心の動揺、其の極に達し安眠も出来ず殺気紛々の状態と成って来た」と書いている。この日、鳩ヶ谷で二人の朝鮮人が自警団と押問答中、通り合わせた馬方（うまかた）に斬り付けられた、西新井宿で朝鮮人三人が捕えられた、十二月田で朝鮮人の婦人が頭髪に爆弾数個を隠していたのを発見され丸裸にされた、といった情報が、次々と安行村領家の人びとにもたらされている。朝鮮人に対する暴行・迫害の事実と、根も葉もないデマが、入り交じり合いながら、地域を駆けめぐり、人びとを不安に陥れた。領家の人びとも、村内の吉岡藤山に朝鮮人が逃げ入ったというので出動したり、金剛寺方向で銃声がしたというので使者を出したりで、三日は夜中まで流言蛮語に右往左往を繰り返した。

翌四日も、まる一日、前日同様の騒ぎが続いた。五日は未明から、「唯今朝鮮人の頭らしきもの黒外套（がいとう）を着て原の平岡の裏山へ入った」という情報に基づいて、武器を手にした大勢の男たちが集まった。中には、神根村から自転車で駆けつけた者もあり、二時間ほどを経た時

点では、総勢100人余りにもなったという。この人数で、あちこちを探したが見当たらず、帰途についた者も多かったが、午前七時頃、今度は、原方面で警鐘が乱打された。それに応じて集まった者は数百人にもなり、原の低地の田畑を人びとは入り乱れて「朝鮮人」探しに熱中した。この騒動は、安行村での震災後最大のものであったが、朝鮮人と聞いて勇んで集まり、見つからずに落胆して帰るその様子は、まさに集団ヒステリー状態であったといえよう。当時、広く社会に存在していた朝鮮人に対する差別意識と、その裏返しとしての「恐怖感」が、震災の恐怖と混乱により増幅され、人びとを捉えたのであろうか。このような出来事は、在日朝鮮人問題などに対する科学的な歴史認識と確かな人権意識、そして付和雷同せず客観的に事実をみつめようとする精神の大切さを、私たちに教えている。

九月六日、北足立郡長の通牒が青年団長に届けられたのを始めとして、郡の告諭、関東戒厳司令官命令などが次つぎと町当局者や村内諸団体役員に伝えられ、村はしだいに平静を取り戻していった。人びとは、災害復旧に全力で取り組みを開始し、安行村領家の夜警は、九月一五日頃打ち切られた。

ここでは、安行村を例にとったが、こうした状況は、どこでもほぼ同じであった。隣村神根村では、やはり「鮮人警戒」と称して九月二〇日頃まで夜警が実施されている。東京に接する川口地方は荒川仮設橋を通ったり、鳩ヶ谷方面を通って東京から避難してくる人びとが多く、また、荒川鉄橋が通行不能となり、一時、高崎線が川口始発となったことも手伝って、東京から北への脱出口となっていた。また、信越・東北地方から東京方面の親戚・知人の安否を気づかって上京する人たちも川口駅で下車して、徒歩で東京に入ったのである。この地域外の人びとの流入の多さが、流言蜚語による騒動の多さの背景となっていたといえよう。

関東大震災後の以上のような社会的混乱は、政府に改めて町村における治安維持機能の充実の必要性を意識させた。政府は、朝鮮人への差別は問題とせず、もっぱら統制のとれた中央集権的な治安維持機能を問題としたのであり、それは、一つに、大正一四年の帝国在郷軍人会会則改正に結実した。この改正で、在郷軍人分会は、地域の「公安の維持」を担う組織となった。在日朝鮮人への暴行・迫害・虐殺までを引き起こした原因は放置されたまま、治安維持機能の強化だけが、進められていった。

「関東大地震実記」（長島彦太郎著）

（『川口市史　近代　資料編Ⅰ』第１編　第４章災害）

第四　夜警と鮮人騒ぎ

此の有史以来の大震災により東京の大火となり各町村も皆倒潰家屋、死傷者続出幷〔ならび〕に戸締りも出来ぬ家が大部分あつたから如何しても自警の必要を感じたのだ、そこで我領家でも非常の奮発を以て厳重なる夜番を決行した、それは所謂在郷軍人、青年団員、消防組員外、特志者を包容した夜警自衛の一団である、〔略〕

一日午後東京方面の白雲の如き怪煙は夜になりて段々紅色となり東京全滅の報喧伝さられ時の受持、正田巡査は詰所に来りて今や東京の下谷、浅草、本所、深川辺は一帯に猛火の襲ふ所となり、又小菅刑務所から百五十人も囚人が逃走したから諸君方も一層警戒する様にと言はれた、為めに人心緊張して殺気立つて来た。又、区長宅にては一夜を前半、後半に分ち一回六人交代とし夜の十二時に後の者と交代して上番は家に帰り就寝することとしたそうである、又、台下の上組は三団体以外の者少なく、又、家数も少ないので毎晩連続したそうだ、小生は二日朝皆川家の懇望により王子にて圧死したる芳蔵を舎三郎と共に侶蔵、腮蔵、清蔵と引取りに行つた、帰途より東京は旋風猛烈に来り黒煙を渦巻き人畜其他の物を巻き上げて物凄く非常に大惨事であつた安行辺へも盛んに燃え残りの紙類が降つて来た、木の葉の秋風に舞い落る有様である



長島彦太郎著「関東大地震實記」」＝『川口市史　通史編　下巻』

大地震及東京の大火災等を機とし不逞鮮人が東京、横浜に暴動し其の余波は我県内にも侵入して早や其の一団は根岸鳩ケ谷方面に出没したとの怪報が三日午後二時頃に中山芳太郎方を取片付の際達せられたので、中山方を退散して各自棍棒、鋤、万能、刀、槍等の凶器を持参し村の入口や其他要所要所を警戒した、

※１地震で家を破壊され各地共死傷者を出し露天へ就寝し、又、東京の猛火を見、交通は杜絶され其の上盗賊、強盗諸所に起り、又々、不逞鮮人が既に近在に妄動したと聞えた村民の人心は如何であろう

宛ら戦時以上の気分で人心の動揺、其の極み達し安眠も出来ず殺気紛々の状態と成つて来た

血気の青年や在郷軍人等は日本刀、脇差、槍、竹槍、鉄棒等を持つて自警団を形成した、東京の火災は不逞鮮人と社会主義者の所業と噂され彼等は爆裂弾を携へて家を焼き毒薬を井戸に投じて危害を加へるそうだ。依て東京方面では鮮人は誰彼を問はず之を捉へて撲殺する由、其他各地にて見当次第鮮人を討殺したのだ、鳩〔ケ〕谷へ東京方面から二人鮮人来たので之を引いて警察に出した処、全く不逞ではないと見て東京方面へ戻らせたが、鳩〔ケ〕谷下にある自警団の為呼び止められ押問答の中、此処を通り合わせた馬方あり、憤恨止み難く出刃包丁にて一名へ切り付けたので他の一人は逃走した此日吉藤山に鮮人逃げ入りたる跡あるとて大騒ぎとなり領家にても僅かを残して皆出勤したが判らないので引返した、中山伊助裏に警戒中浦和の者安行役場へ所要ありて往復せるが頗る横柄にて言葉も掛けず一同憤慢の折柄、加藤楯衛彼が自転車の前に棒を出したので早速怒りて詰問したが此方は大勢にて理屈も通らず彼は逃ぐる如く逸走したので一同大いに罵倒した、是或は鮮人ならんと疑ひたれば引止めたので同夜は一層警戒を厳重にし四組の詰所とも連絡し安行、赤山、原等とも連絡を保つ事にした。

三日夜東京の空は稍暗黒となつた。同日西新井宿にて鮮人三名を取押へ、十二月田では鮮人婦人頭髪の中に爆弾数個を隠し歩めるを発見し丸裸体にしたそうである、其他吉川、草加、蕨、浦和等一帯に鮮人沙汰多かつた。〔略〕

五日から埼玉県、千葉県共戒厳令が布かれた、五日朝未明の頃台下夜警の者来り「唯今鮮人の頭らしきもの黒外套を着て原の平岡の裏山へ入つたから応援の為め出勤を願ふ、就て密蔵院の鐘を合図に撞くから半縄坂付近に待たれたい」と来たので夜番から帰つて一二時間起き立つて分家の消防小頭へ立寄り布達の打合せして各戸を廻り余は一槍を提て向つた、各自は思う儘に半縄坂付近へ出向つたが一向そんな風でもなく、これから前へ進んで学校付近へ進出したそこには、三三、五五、得物を持つて右往左往し或は立話する連中も見えて来た、神根村からまで槍などを背に負ひ自転車で応援に来連中もあつて二十人位此処彼処に出で来た。平岡の裏山は至つて静穏であつたから皆は猶進んで平岡の南方峯山へ着いた、前の宿の二三十名は一隊をなして我等と行過ぎた、彼等は一致して悉く槍、刀、竹槍などを持つて居た、貝塚へ出たら、又、其の一隊が威勢よく来て、やがて峯の村落へ這入つた。我等は此の後ろ峯の一点で休憩した、而し命令扨ては指揮などの出る所もなく又、鮮人の方向さへ定まらず全く有耶無耶の中に二時間ばかり過ぎた、なれとも近郷近在から集まつた勢は大凡百余名と見える。時間の経つに従へ失望して帰途に就き午前七時頃朝食する処に俄かに原方面で警鐘が乱打されたので、今度こそ鮮人が現出したんであろうと思はれた、それであるから早速小清水方面へ駆行けば小清水と向ひ原の低地へ数百名が入乱れて萱敷茗荷畠、苗木畠、さては芋畠、甘藷畠や稲田のきらひなく残る所なく探索して居た此処だ彼所だと言ふて居ても不逞鮮人の影もなく兎一匹飛び出さぬに一同呆然として占つた、中には吉岡方面へ行つたかも知れずと逆せ上つた青年も多かつた所へ恰も吉岡旧氷川社の方で大太鼓を打鳴らしたので血気に充ちた者共は庚申様の前から金山権現の方へ向つた、そう言ふ始末次第であつたが結局落胆して各自四方へ散り失せた。〔略〕

（長島剛次郎氏所蔵）

（編注）片仮名を平仮名に変え、改行を加えた

在郷軍人会の活躍

（『新編埼玉県史　近代・現代５』　第五節　関東大震災と埼玉県より）

震災に際しては、個人や団体の献身的援助活動なくして復旧は到底ありえなかった。協力をした団体は消防組、青年団、処女会、医師会、県衛生協会、赤十字社、山林会、神職会、仏教会、県教育会、在郷軍人会、水平社生活改善同盟会など多数で、それに個人を加えてそれぞれの立場で自己の一身一家の安危を忘れて救護に奔走したのである。

そうした中で自警団もつくられていった。そのつくられかたは自然発生的ではなく一つのはっきりした目的をもっていた。「不逞（ふてい）鮮人放火に関する件通牒」が当局より流されたのは九月二日であったが、そこには「此（こ）の際町村当局者は在郷軍人分会、消防手、青年団等と一致協力して内諜に依り此の段及移諜候也」（近代・現代　一九四頁）とあり、これは至急に全県に伝えられた。そのなかで在郷軍人は、当初それぞれの町村にあって個人として救護あるいは自警団に参加していった。

自警団は「万一の場合にそなうるため予め準備する」（近代・現代５　一九五頁）ようにとの任務をえており、町内の秩序を守ろうとする排他的な狭い共同体意識のなかで在郷軍人がその先頭に立って「不逞鮮人」探しの側に立って凶暴な行為に走っていく場合もあったが、他方、警察とともに殺気だつ人々を制止し安全な輸送を確保する側、治安維持の役割をもはたしている。

在郷軍人の動きには所と状況により両側面をもっていたように思われるが、むしろ“来襲するはず”でまっていた“不逞鮮人”めがけてヒステリー状態で走る人々を警察と協力して治安の維持・安全の確保につとめる動きをしたといってよい。たとえば、本庄警察署の危機に際し輸送中の第九師団歩兵第七連隊の一小隊の下車を頼んだ児玉郡連合分会長や、保護につとめた大里郡連合分会顧問、深谷町分会長、秩父郡連合分会長などである。その後は、本部よりの「先ツ本部ト連絡セヨ」との命をうけ、分会は相互に連絡をとりながら、流言の防止、人心の安定につとめる方向を確認し、在郷軍人会として組織的に東京への救援活動、救恤（きゅうじゅつ）品募集寄贈等につとめていくこととなる。

埼玉県から東京市の災害復旧に対して計画的に派遣された救援隊は青年団、軍人分会、軍人分会処女会、消防組員などにより各郡あるいは町村で組織されたもので、九月三日ごろより二十日ぐらいにかけて、主として焼け跡整理、食糧運搬・配給、患者輸送、夜警、その他さしあたりの労務提供を目的として派遣されていった。この震災をきっかけに在郷軍人会の組織性、位置づけがしだいにはっきりとしてきたといえよう。

在郷軍人会とは

現役を離れた軍人によって構成される組織。「退役軍人会」という言葉と混用して用いられるが、在郷軍人会は予備役にある者によって構成される。

1910 年（明治 43 年）11 月 3 日、予備役・後備役軍人の軍人精神向上、傷痍軍人・軍人遺族の救護等を目的に伏見宮貞愛親王を総裁として発足した。これは当時の陸軍省軍事課長田中義一がドイツの仕組みを参考に組織を編成したと言われている。当初、陸軍のみの組織であったが、1914 年（大正 3 年）に海軍も対象に加わり、陸海軍共通の組織となる。会は、聖旨を奉戴し、軍人精神の振作、軍事知識の増進を主眼とし、ほかに社会の公益を図り、常に国民の中堅であることの実を挙げることを目的とする。

（出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）

「不逞朝鮮人」に関する通達

（『新編　埼玉県史　資料編23　近代・現代5　社会・労働1』より）

朝鮮人放火に関する通牒　大正一二年九月〔二日〕

庶発第八号　（秘）　北足立郡役所／大正十二年九月二日／尾間木村役場殿
不逞鮮人放火ニ関スル件通牒
今回の震災に際し東京ニ於ては不逞鮮人各所に彷徊し盛ニ放火を為し又此ノ間過激思想を有する徒之に和し以て彼等の目的を達せんとする趣及聞漸次其の毒手を地方に振はんとするやの虞有之候に付ては此際町村当局者は在郷軍人分会消防手青年団等と一致共同して其の警戒に任じ一朝有事の場合には速に適当の方策を講ずる様至急相当御手配相成度右其の筋の内牒に依り此の段及移牒候也右の通通牒有之候ニ付ては可然御手配御配盧（慮）相願度此段及御依頼候也
大正十二年九月三日　尾間木村長　岡村俊太郎／区長及消防役員各位殿
（饗庭喜蔵「大震災日誌」　大正一二年九月四日　浦和市中尾　饗庭武昭氏蔵）

朝鮮人不穏に関する通牒　大正一二年九月〔二日〕

大正十二年九月二日　南埼玉郡長　警察署長
出羽村長殿　在郷軍人分会長殿　青年団長殿
本月一日以来ニ於ケル東京市ヲ侵セル火災ヲ好機トシ在京不逞鮮人ノ群ハ所々ニ放火シ人心ヲ脅威シ不穏ノ行動アリ、鎮静ト同時ニ郡部ニ立入リ尚本県下ニ入込ムヤモ図リ難ク候ニ付テハ在郷軍人並青年団員ヲシテ万一ノ場合ニ備フル為メ予メ準備候様御取計相成度其ノ筋ヨリ申越候次第ニ有之、此段及御依頼候也
追テ要急ノ場合ハ通報可致ニ付直チニ出勤シ且ツ隣接町村応援シ得ル様御取計相成度申添候
（出羽村役場文書　「震災関係書類」　越谷市史編さん室蔵）

流言飛語に関する通牒　大正一二年九月〔四日〕

出羽村役場　大正十二年九月四日　受附庶第二二八号
号外／大正十二年九月四日　南埼玉郡長　警察署長／各町村長在郷軍人分会長青年団長殿
昨三日通牒致候不逞鮮人潜入警戒ノ儀ニ付テハ人心不安ノ結果流言蜚語行ハレ昨夜ノ実況ニ徴スレバ何等事実更ニ無之ニモ不拘却テ反撃的行為ニマテ及ヒタルヤノ風説等モ有之如斯ハ通牒ノ趣旨ニ戻ルベキモノナルニ依リ斯ル軽挙ヲ慎ミ大国民的態度ニ背戻スル事ナキヲ期シ善良ナル鮮人ニ対シテハ保護ノ途ヲ失スルコトナキ様細心ナル注意ヲ以テ警戒ニ当リ万遺漏無之様特ニ御留意相成度此段重テ及通牒候也
（出羽村役場文書　「震災関係書類」　越谷市史編さん室蔵）

朝鮮人風評に関する通牒　大正一二年九月〔五日〕

親庶収第一〇号ノ二／大正一二年九月五日　北足立郡長（印）／土合村長殿
朝鮮人ニ関スル件通牒
朝鮮人風評ニ関シ針小棒大ノ説ヲ為ス者アリ、誤解ヲ抱クノ虞レ有之候処右ハ鮮人必スシモ不逞ノ者ニ無之候条其辺御了知ノ上青年団在郷軍人分会幹部ニ対シ充分御訓戒相成度
右通牒ス
追テ青年団及在郷軍人分会ノ幹部ヲ招集シテ篤ト御示達上凶器ヲ携帯セシメサル様特ニ御注意相成度
（土合村役場文書　「震災関係連綴」　浦和市史編さん室蔵）

「朝鮮人来襲の虚報には失敗した」

正力松太郎（政治家、実業家。当時警視庁官房主事）

次に朝鮮人来襲騒ぎについて申し上げます。朝鮮人来襲の虚報には警視庁も失敗しました。

大地震の大災害で人心が非常な不安に陥り、いわゆる疑心暗鬼を生じまして 1 日夜ごろから朝鮮人が不穏の計画をしておるとの風評が伝えられ淀橋、中野、寺島などの各警察署から朝鮮人の爆弾計画せるものまたは井戸に毒薬を投入せるものを検挙せりと報告し 2、3 時間後には何れも確証なしと報告しましたが、2 日午後 2 時ごろ富坂警察署からまたもや不穏鮮人検挙の報告がありましたから念のため私自身が直接取調べたいと考え直ちに同署に赴きました。当時の署長は吉永時次君(後に警視総監)でありました。私は署長と共に取調べましたが犯罪事実はだんだん疑わしくなりました。

折から警視庁より不逞鮮人の一団が神奈川県川崎方面より来襲しつつあるから至急帰庁せよとの伝令が来まして急ぎ帰りますれば警視庁前は物々しく警戒線を張っておりましたので、私はさては朝鮮人騒ぎは事実であるかと信ずるに至りました。私は直ちに警戒打合せのため司令部に赴き参謀長寺内大佐（戦時中南方方面陸軍最高指揮官）に会いましたところ、軍は万全の策を講じておるから安心せられたしとのことで軍も鮮人の来襲を信じ警戒しておりました。

その後、不逞鮮人は六郷川を越えあるいは蒲田付近にまで来襲せりなどの報告が大森警察署や品川警察署から頻々と来まして東京市内は警戒に大騒ぎで人心恟々（きょうきょう）としておりました。しかるに鮮人がその後なかなか東京へ来襲しないので不思議に思うておるうちようやく夜の 10 時ごろに至ってその来襲は虚報なることが判明いたしました。

（正力松太郎『正力松太郎　悪戦苦闘』日本図書センター、1999 年）

正力松太郎（しょうりき・まつたろう、1885 年（明治 18 年）4 月 11 日－1969 年（昭和 44 年）10 月 9 日）は、日本の内務官僚、警察官、実業家、政治家。読売新聞社社主、日本テレビ放送網代表取締役社長、読売テレビ会長、日本武道館会長等を歴任。また、読売ジャイアンツ創立者であり初代オーナー。

東京帝国大学法科大学卒で内務省に入省。警視庁官房主事として 1923 年（大正 12 年）6 月の日本共産党に対する大規模な一斉取締り（第 1 次）や、特別高等警察などにも関わり、同年 9 月に発生した関東大震災の際、社会主義者の扇動による暴動に備えるための警戒・取締りを指揮した。その際、朝鮮人の暴動説を新聞記者を通じて流布させ、関東大震災朝鮮人虐殺事件の一因を作った（信頼性要検証）。同年（大正 12）12 月に虎ノ門事件（摂政宮狙撃事件）が発生、当時警視庁警務部長であった正力は警視総監の湯浅倉平とともに引責辞職。

翌 1924 年 2 月、後藤新平の助力のもと経営難で不振の読売新聞を買い受けて第 7 代社長に就任し、新聞界に転じる。意表をつく新企画の連発と積極経営により社勢を拡大。当初二流紙扱いであった読売は、1941 年(昭和 16 年)に発行部数で朝日新聞・毎日新聞を抜いて東日本最大の新聞となる。同年秋には、戦時新聞統合を企図する政府の全国新聞一元会社案に反対し、撤回させた。1940 年（昭和 15 年）の開戦時は大政翼賛会総務であったために、戦後 A 級戦犯の第三次戦犯指名となり、逮捕されたが、起訴はされず、巣鴨プリズン収容者の 1 人となった。このためしばらく公職追放処分を受けた。

戦後は、MLB 選手を日本に招聘して日米野球を興行するなど野球界で尽力したが、一方で長期にわたるアメリカ中央情報局（CIA）への協力（非公式の工作活動）をおこなっていたことが、アメリカで保管されている公文書により判明している。また、自由民主党総裁の座も狙っており、渡邉恒雄を参謀の中曽根康弘との連絡役にしていた。

（出典:フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）

粕壁小児童の「関東大震災作文集」

玉　新　聞　　2008年（平成20年）7月11日（金曜日）　　地域

歴史語る貴重な資料

粕壁小学校児童の「関東大震災作文集」

ぐるり 南東発見伝

関東大震災（一九二三年）が発生してから今年で八十五年。当時の被災状況を克明に伝える粕壁小学校の作文集「大震災記念児童文集」が、春日部市郷土資料館（実松幸男館長）で開催中の収蔵品展「かすかべの宝もの」の中で初公開されている。文集は尋常科三年、同四年、同五年と高等科の全四冊。大震災直後に書かれたらしい。九歳から十三歳ぐらいまでの子どもたちが残した作文の中に、大震災の恐怖と歴史の教訓がつづられている。

（菊地正志）

当時の粕壁（かすかべ）町は、川口町、幸手町と並ぶ「県下三大被災地」のひとつ。軟弱な土地が地割れを起こし、町中心部で三百五戸が全壊。大きな被害をもたらした。死者は二十九人を数えた。

「畑には地が割れてどぶのようにできていた」「となりの幸松屋がつぶれたと思ったら私の家もつぶれてしまいました。みんなの顔をみますとなみだ（涙）がぼろぼろとおちる」。家がつぶれて妹が死に「ああ、のろ（呪）わしき大正十二年九月一日」と嘆く男子児童もいる。

東京から避難して来た被災者の惨状も目撃した。「東京から何十人のけが人が逃げてきた。その中一番目についたのは両目つぶれて両親にかかえられて来る人があった」。

大人社会で流れたデマ情報を記す子どもたち。流言飛語のたぐいも多い。「東京の火災は、しゃかいしゅぎしゃ（社会主義者）と朝鮮人がしたのだという」「鮮人（朝鮮人）が、えんの下に入って火をつけたり、ばくだん（爆弾）をなげたり、（略）火付けをして歩いているという話しを聞いた」。

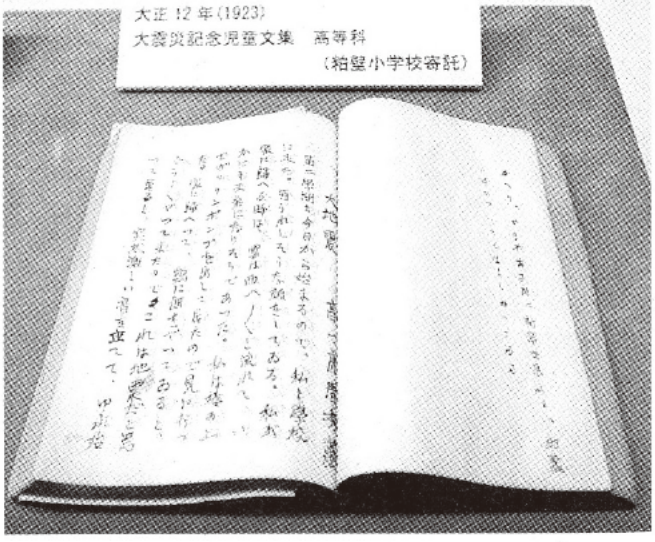
「鮮人が粕壁までせめてくるというので、在郷軍人は砲にけん（剣）をつけて夜ばん（番）にくる。あちらこちらで鉄砲の音がきこえる」という記述もあり、県北部などで起きた朝鮮人虐殺の悲劇の予兆を感じさせて痛々しい。

元高校教員で関東大震災の調査活動を続けている石田貞さん（七七）＝深谷市＝は、「行政資料や新聞記事など大人から見た証言や資料はこれまで調査・研究されているが、子どもの視点から見た作文が残っているのは珍しいケース。大人社会のデマが、どう子どもたちに伝わっているかという点でも貴重だ」と文集の資料価値を強調した。

大震災直後に書かれた児童の作文集は県内でも珍しい。実松館長は「十年前から存在自体は知られていたが、展示は今回が初めて。今後詳しく内容を調査し、資料として活用したい」と話している。

◇

収蔵品展は十三日まで。問い合わせは同郷土資料館（☎048・763・2455）へ。



関東大震災直後、粕壁小学校の子どもたちがつづった貴重な作文集「大震災記念児童文集」

（「埼玉新聞」　2008年7月11日付）

関東大震災記念児童作文より（抜粋）

（粕壁小学校所蔵、原文のママ）

「朝鮮人が爆弾で火事にした」　（十月十日　学年不明　男）

翌朝、誠ちゃんと私と、二人で我が学校を見に行った。新校舎の方はめっちゃめっちゃになっている。ふるい方は、二階の三教室は屋根が机の上にかぶさって机が見えた。それから家へ帰る。途中東京からにげて来た人に話をきくと、朝鮮が大きな家へ爆弾をぶっつけて火事をおこすという話をきいて、私は一寸思った。私の栄の月島の親戚へ私が夏休みにいつてた。近所では、私たちが夜すずんでいると、朝鮮人が近所の角にたくさん集って、私達にわからない言葉でごとごといっている。そうゆう朝鮮人があの大東京を爆弾で火事にしたんだと思う。

三日の朝ちょうど、月曜日に当たったので私たちは友達三人で学校へいった。〔中略〕それから家へかへつて、局の人の話では、朝鮮人が越ケ谷へ来た、という話をきいたので、私は越ケ谷まで来ては、粕壁までは、わづか三里ぐらいであるから、おつかなくなった。夕方になった。すると粕壁へ朝鮮人が来たといふので、消防手がそのばんは、夜番をした。私の家の前も三人で番をした。

「鮮人が爆弾を投げた」　（十月二十一日　高等科二年　男）

東京の親類、奉公している子や兄弟の身を案じながら自転車で尋〔たずね〕にゆく人がたくさんあった。東京から逃げて来た人は着の身着のままの方が多かった。中には死んだ小供をせおうてゆく人もあった。今は自分の全財産ともなるべき、ふろしき包をせおい、なれぬたびに、足を引づりながら行くすがたもいたいたしい限りである。逃げてくる人も尋ねにゆく人も昼夜の着別無く通った。二日の日も無為にすごした。三日頃は鮮人でさわいだ。東京では鮮人がばくだんをなげたり、短刀やピストルで人をきつたりうつたりするといふ事を逃げて来た人が話〔し〕た。

「朝鮮人が人を殺した」　（十月十日　高等科一年　男）

私は二日は何もせず、ぶらぶらしてそこらを見てあるいたばかりでありました。日が暮れて夜になって来たら、朝鮮人が、火を附けたり、人を殺したりするといふ、風聞がありましたので其の夜も眠る事は出来ませんでした。

「あちこちで鉄砲の音」　（日付、年齢不明　男）

そこへもって来て鮮人が粕壁までもせめてくるとゆうので、在郷軍人は砲にけん〔剣〕をつけて夜ばんにくる。それ中学校へはいった、てっしゃば〔停車場？〕へはいった、あちらこちらで、てっぽう〔鉄砲〕の音がきこえる。それ新宿へはいったとのうわさでは実に驚いてしまった。

「朝鮮人が井戸に毒を入れた」　（日付不明、高等科一年　男）

夜中朝鮮人が八木崎へ来たといふと皆太いぼうをもったり、色々な物をもって行〔く〕と、それはよっぱらいだ、といふほどにおどかされたりした。〔中略〕人の話には井戸の中にどく〔毒〕をいれたりして、火が見えるとそこへ爆弾をなげるかして火事にするといつた、どこへいつても皆そういふ話ばかりである。東京では地震がいると、すぐに火事になってにげると、にげていつた方へ又火があがつて、あつちこつちにげて煙にまかれて死んだ人もある。

（編注）見出しと〔　〕内は編集者

関東大震災と官僚・政治家

小澤龍一

山梨県立博物館みんなでつくる博物館協議会委員長

関東大震災時、警視庁本部に於いて、陣頭指揮を執っていたのは、官房主事の正力松太郎（1885年〈明治18〉－1969年〈昭和44〉）である。1944年警視庁内で正力松太郎は、講演を行い、関東大震災で朝鮮人の暴動の噂を組織的に流布したため世情が混乱し自警団による虐殺・亀戸事件、甘粕事件の要因を生み出したことにふれ、「風評流布は失敗であった」と語っている。

第54代衆議院議長石井光次郎は、正力松太郎の「風評流布」について、回想記で触れている。正力松太郎に関しては、早稲田大学の有馬哲夫氏の労作、『日本テレビとCIA－発掘された「正力ファイル」』（新潮社刊）等はアメリカの公文書を丹念に読み解いた資料だけに、日韓のみならず、世界の紛争を紐解く貴重な文献である。

正力松太郎は、その後左遷され、読売新聞社の社長となる。「風評流布」の扇動に限界を抱いた警視庁は、組織的な仕組みを準備する。特別高等警察部である。特高として恐れられる組織、その初代部長（公安部長）に就任したのは、広州に於いて、中国共産党の調査の任に当たっていた安倍源基（げんき）（1894年〈明治27〉－1989年〈平成元〉）であった。

安倍源基と岸信介（1896年〈明治29〉－1987年〈昭和62〉）は同郷（山口県出身）で、東京大学でも同じ法学部に在籍する。彼らが東京大学に入学した当時、学内は、大正デモクラシーが主流を占め、美濃部達吉達の「天皇機関説」が主軸を為していた。美濃部達吉に対立する憲法学者に、上杉慎吉がいる。彼は東京大学内に国粋的なサークル「木曜会」を組織していた。東京大学に入学した岸信介・安倍源基は入学と同時に入部。元々長州閥は国粋的傾向があり、上杉慎吉の考えに呼応したのだろう。このサークルは、学外の国粋的思想家大川周明・北一輝と交流を結び、美濃部達吉の「天皇機関説」攻撃の論陣を張ってゆく。

一方陸軍大学内にも、1927年（昭和2年）東条英機（1884年〈明治17〉－1948年〈昭和23〉）を中心に幕僚グループ「二葉会」が結成される。2年後の1929年（昭和4年）、「二葉会」は、同じく幕僚グループに結成された「木曜会」と統合し「一夕会」を結成する。東京大学・陸軍大内の国粋的なサークル、その連携と土俵を通し、大正デモクラシー的傾向は駆逐され、岸信介・安倍源基・東条英機等はその人脈を活用してゆく。

安倍源基は38歳で初代特別高等警察部長に就任し、43歳で警視総監に登りつめる。正力松太郎と違い、「風評流布」的手法と異なり、内部告発の手段を駆使し、政権に反対する人物の洗い出し、治安維持法等を改正、死刑を加え組織の壊滅を企ててゆく。当時の労働者の思想傾向は、無政府主義の時代からロシア革命に触発され社会主義が浸透しはじめた時期である。マルクス主義は無政府主義と異なり、組織論を備えていた。

安倍源基は、その組織内にスパイを送り、過激な行動を指示、スパイによる内部告発を通し、徹底した組織解体を図ってゆく。「青色ギャング事件」「共産党査問事件」等々、治安維持法を適用し、「赤狩り安倍」と恐れられ、小林多喜二も彼の指揮権の下、拷問で獄死する。戦後宮本百合子が『ファシズムは生きている』（青空文庫）等で安倍源基に関し語っている。安倍源基は戦争末期鈴木貫太郎内閣で、内務大臣・企画院総裁の任に就き、ポツダム宣言拒否を貫く。この拒否により、戦争終結は遅滞、広島・長崎に繋がる。

関東大震災以後、組織的弾圧の仕組みが警視庁内に準備され、それに併せ、地域の公的組織や、隣保制度・マスコミ・学校を通して大政翼賛会的な教育が施行されていった。国家権力に反対、もしくは異議を投げかける個人・組織は、弾圧の対象となり、思想・信条の自由は奪われ、治安維持と国家による暴力が常態化する。1923年までは、「風評」に「風潮」を持って民衆は立ち向かっていた。その民衆の口は塞がれ、それに代わって国粋的な色があらゆる分野を染めてゆく。

岸信介は「満州の妖怪」と呼ばれている。その所以は、旧満州・朝鮮半島の利権と深く結びつき、その資金が戦争遂行のみならず、国内の反対派弾圧資金となっていったことが理由であろう。戦犯となった右翼の笹川良一は、回想で、旧満州・朝鮮での利益の一部が右翼の資金であったこ

とを語っている。昨今のヘイトスピーチを考える際の参考事例である。

安倍源基・岸信介・正力松太郎・東条英機いずれも、A級戦犯として巣鴨に入獄する。東条英機が絞首刑に処せられた翌日、岸信介は出獄、安倍源基・正力松太郎等は、東西冷戦構造下で出獄、戦後日本の中枢を担ってゆく。

関東大震災時の「風評流布」の元凶、正力松太郎に焦点を絞り、出獄した三人の戦後の動向を追ってみよう。

正力松太郎の戦後は華々しい。プロ野球の父・テレビ放送の父・原子力発電の父と称賛され、マスコミ界のドンであり、プロ野球や芸能界のドンとして活躍、政界においても、1957年7月第一次岸内閣で国務大臣（国家公安委員会委員長・科学技術長官・原子力委員会委員長）に就任し、日本の原子力発電のドンとして辣腕を振るう。勿論岸信介と一体で原子力発電に手を付ける裏には、核開発が秘められていたことであろう。

戦後、安倍源基は、巣鴨から出獄するや、岸信介と共に政治団体「新日本協議会」を結成する。しかし「赤狩り安倍」の名は広く知れ渡り、戦後の民主化の流れの中で、民意の離反にあい、政界に進出できず裏方として過ごすこととなる。戦後日本は、GHQ の民生部と、戦前弾圧された人々・労働者・教え子を戦場に送った教師・青年会・婦人団体等々により、民主化が進められる。東西冷戦が始まるや、民生部は本国に帰国する。それに代わって実権を握るのが GHQ 軍政部である。この軍政部に呼応するのが、「政・官・財」、双方は跋扈し、戦後を形成していった。しかし外交に当たっては、アメリカの利害一致が求められ続けてきた。

そのことを明るみに出すことは、日韓共々タブー視してきた。しかし、アメリカは開かれた国である。アメリカの公文書は、30年が経過すれば閲覧できる仕組み。アメリカの公文書から読み取れるそれは、朴烈・金子文子両義士が願った姿ではない。「大逆罪」から90年が過ぎ、未だ私たちは、二人が願う時代を用意できていない。彼ら二人が大逆罪で拘束された1923年から、日本の姿を振り返れば、自国民を圧殺する国家は、他民族を抑圧する仕組みが横たわっている。今回のセミナーを通し、戦前の戦争遂行者・関東大震災時朝鮮人を虐殺した張本人が、原子力発電の父・マスコミ界の父として称賛され、それらが、国権を握るかぎり、歴史認識は疎かのままである。

歴史認識を疎んじることは、日本の国民にとって不幸で、誇りと品格を損なうことである。さらに、その様な情況を許すことは、戦前色に染まる危険が孕まれている。陰謀・謀略、仮想敵で、国と国、国民と国民がいがみあい、憎しみ合う時代に終焉を告げ、真摯に過去を振り返り、過去を姿鏡に、姿勢を正さねばならない時代を迎えている。〔略〕

（2013年7月20日　韓国・聞慶市での講演録より）

小澤龍一（おざわ・りゅういち）　公益財団法人やまなし文化学習協会生涯学習推進センター前所長、山梨県立総合教育センター元所長、元高校教員。山梨県「金子文子研究会」会員。

二〇〇三年「日弁連勧告」の意義と現状

―差別的・排外的傾向が強まる中で

米倉勉（弁護士）

1　日弁連勧告（二〇〇三年）の経緯

日本弁護士連合会（日弁連）の人権擁護委員会は、二〇〇三年八月二五日付で、関東大震災における虐殺事件に関する勧告書を公表している。小泉純一郎内閣総理大臣宛で、「国は関東大震災直後の朝鮮人・中国人に対する虐殺事件に関し、軍隊による虐殺の被害者、遺族、および虚偽事実の伝達など国の行為に誘発された自警団による虐殺の被害者、遺族に対し、その責任を認めて謝罪すべきである」と指摘し、この事件の「全貌と真相を調査し、その原因を明らかにすべきである」と勧告している。

同委員会によるこの調査と勧告は、事件当時から日本（東京都品川区大井）に居住する在日朝鮮人の申立による。この方は、自ら虐殺の現場を目撃し、虐殺された朝鮮人の遺体が残酷な仕打ちを受けている場面を見たりして、強い衝撃を受けた経験を持つ。ところが日本政府はこの事件について、責任を認め謝罪したことはない。そこで、同種の事件の再発を防止するためにも政府の責任を明らかにしてほしいというのが、申立の理由であった。

私も、この調査チームの一員として史料収集・調査および勧告書の作成に加わったが、果たして、調査の結果、この虐殺は国の主体的・積極的な関与による惨事であることが明らかとなった。この小論では、その実態の一端を指摘し、その意義と現状について私見を述べたい。

2　朝鮮人虐殺事件（一九二三年九月）の時代背景と異例の戒厳令

時代は朝鮮併合による植民地支配（一九一〇年）から一二年を経たころであり、抑圧された朝鮮人民の間には、独立運動が広がっていた。他民族に対する理不尽な抑圧は、常に、それが呼び起こす自らへの反抗・反撃への「不安」をかき立て、この自ら招いた不安がさらなる弾圧を生む。一九一九年の「三一運動」を経て、当時のわが国の治安当局が抱えていた「自招の不安」は、震災による首都壊滅の状況下で、弾圧者が抱えるこのような危機意識、恐怖感を極限まで高めていた。

この時の事態の特徴の一つは、戒厳令が敷かれたところにある。本来、「戦時若クハ事変ニ際シ」兵備をもって警戒するのが戒厳令であるところ、震災という自然災害に際して宣言したこと自体が異例であり、この戒厳令に合理性があるかどうかは疑わしい。結局、この戒厳令発動の意図は、反日運動が自分たち治安機関に向けられることへの、「自招の恐怖感」による過剰反応であり、歪んだ「防衛」行動ではなかったか。そして重要なことは、この戒厳令が「治安行動が必要」という官憲の自身の危機感を無用に増幅させ、さらにこれが自警団などの民間レベルにも拡大・浸透して、事態を一層重大にしたことである。

3　内務省からの伝令――作られた流言蜚語

当時巷間言われた「朝鮮人による不逞行為」（放火、爆弾所持、井戸への毒物投入など）は、客観的事実ではなく、全くの虚構（流言蜚語）に過ぎなかったことが、すでに警察の文書など様々な史料によって判明している。

そして、この虚構の事実は、当時の治安当局である「内務省警保局」が意図的に流布したものであ

った。

その発端の一例として、海軍省船橋送信所は、九月三日の午前、内務省警保局長発の次の打電を、各地方長官・朝鮮総督府警務局長などに宛てて発している。

> 東京付近の震災を利用し、朝鮮人は各地に放火し、不逞の目的を遂行せんとし、現に東京市内において爆弾を所持し、石油を注ぎて放火するものあり。既に東京府下には一部戒厳令を施行したるが故に、各地に於いて十分周密なる視察を加え、鮮人の行動に対しては厳密なる取締を加えられたし。
>
> （各地方長官宛　内務省警保局長出）


埼玉縣で殺害した
鮮人百六十六名
加害者の收監百十四
流言に狂へる一團
中山道に待ち伏せ
四十二名を殺害す
溫良な鮮人を
保護中に刺殺す
寄居署の慘劇
神保原村で
二十五人を殺す

新聞報道が解禁（10 月 20 日）され、朝鮮人虐殺の事実を伝える『東京日日新聞』＝1923 年 10 月 21 日付夕刊

当時の日本の警察組織の体制からすれば、この打電の内容は、同時に各府県の知事ないし内務部長に到達していたものと考えられる。船橋送信所からの打電（都心からの伝騎による伝令は二日午後以前の指示によると推定される）を待つまでもなく、この指示は電報や担当者等による協議によって、内務省警保局から近県担当者へ伝達された。この指示を受けて、各地の地方行政庁は、管下の郡役所・町村役場へ伝達し、その結果、各町村における自警団の結成と「取締り」活動の奨励が浸透したと考えられる。

その一例として、埼玉県における経緯が、一九二三年一二月一五日の衆議院における永井柳太郎議員の質疑に見られる。

> ・埼玉県の地方課長が、九月二日に東京から本省との打合わせを終えて、午後の五時頃に帰って来まして、そうしてそれを香坂内務部長に報告をして、其報告に基いて香坂内務部長は、守屋属をして県内の各郡役所へ電話を以て急報し、各郡役所は、其移譲されたるものを、或は文書に依り、或は電話によって、之を各町村に伝えたのであります。

その移譲の内容は

> 東京における震火災に乗じ、暴行を為したる不逞鮮人多数が、川口方面より或は本県に入り来るやも知れず、而も此際警察力微力であるから、各町村当局は在郷軍人分会員、消防手、青年団と一致協力してその警戒に任じ、一朝有事の場合には速に適当の方策を講じるよう、至急相当の手配相成りたし

というものであった。

（官報号外　大正一二年一二月一六日　衆議院議事速記第五号）

4　刑事判決に判示された事実

こうした経過は、虐殺事件に自ら関わって殺人罪等によって刑事訴追された、自警団構成員などの当事者（被告人）に対する判決書に、犯行に至る経緯としてつぶさに記載されている。

上記埼玉県における例に合わせて、ここでも埼玉県北足立郡片柳村大字染谷（現さいたま市見沼区）で発生した「片柳事件」に関する浦和地方裁判所判決（大正一二年一二月二六日）から引用する。事

件は、自警団が槍や日本刀を携帯して警戒に従事していたところ、被害者である朝鮮人が差し掛かったところを追跡し、槍で胸部を突き刺すなどして殺害したという悲惨なものである。
この事件の判決は、その理由中に以下のとおり記載している。

> 不逞鮮人が過激思想を抱ける一部の内地人と結託して右震災に乗じ東京市等に於いて盛んに爆弾を投じて放火を企て或は井戸へ毒物を投入する等残虐の所為を敢えて〔中略〕との流言浮説頗に喧伝せられ同村方民は痛く之に刺激を受け興奮し居れる折柄県当局者に於ても咄嗟の間当時誤風説の根拠たる帝都における鮮人の不逞行為に付き其裏偽を探究するの術なかりしより万一の場合を慮り翌二日の夜所轄郡役所を介して夫々管内の町村役場に対し予め消防手在郷軍人分会青年団等の各首脳者と協議し警察官憲と協力の上叙上不逞の輩の襲来に備うべく自警の方策を講ぜられたき旨の通牒を発したるより被告等居村民も亦同三日夜より各自日本刀槍等の凶器を携帯し居村内に於て之警備に従事中〔以下略〕

このように、県当局が郡役所を介して町村役場に自警の方策を講じるよう指示する通牒を発したことにより、現地の消防手、在郷軍人分会、青年団等が協議して自警団を組織し、警察官憲と協力の上で「不逞の輩の襲来に備えた」ことが事実認定の一つとして摘示されているが、この経過は、上記の衆議院議事連記録に記録されている永井柳太郎の質疑と符合し、かつ上記の内務省警保局長発・各地方長官宛の電文の内容とも整合する。
同様の判示は、片柳事件だけではなく、寄居事件・熊谷事件・本庄事件など埼玉県内各地の同種事件の判決に、ほぼ同じ内容で記載されていて、これが埼玉県内各地の虐殺事件に共通する背景事実であることを示している。なお片柳事件については、事件が起きた地域の近くである、現さいたま市見沼区染谷所在の常泉寺に、被害者とされる「姜大興（カンデフン）」さんという朝鮮人青年の慰霊碑が建立されている。

5　治安当局による煽動――明白な国の責任

このようにして、東京、千葉、埼玉、栃木、神奈川など各県において多数の自警団（民間人）による虐殺事件が発生した。その責任は治安当局による煽動・誘導にある。その原因になったのは、内務省警保局長が発した「東京付近の震災を利用し、朝鮮人は各地に放火し、不逞の目的を遂行せんとし、現に東京市内において爆弾を所持し、石油を注ぎて放火するものあり。既に東京府下には一部戒厳令を施行したるが故に、各地に於いて十分周密なる視察を加え、鮮人の行動に対しては厳密なる取締を加えられたし。」という指示であって、このような事実摘示とともに、自警の方策をとって備えよという指示があれば、各地の住民が過剰な武装を備えた自警組織をもって応じたことは、もはや必然的な結果であるというほかない。
だからこそ、各地事件に関する刑事判決は、その背景事情を摘示する必要もあったのだろうと想像される。このような「情状事実」も与して、当時の各刑事判決の宣告刑の水準が著しく軽いものとなっていることが指摘されており、事態の評価としては批判も当然ありえる。しかし同時に、実行者の刑責が緩和された事実は、虐殺行為を民間人に実行させた責任が、これを煽動した官憲にこそあったことを示していると言えよう。

6　軍隊による虐殺――国による直接的加害

日弁連の報告書は、もう一つ、軍隊による虐殺行為についても詳細に述べている。事実認定の根拠となったのは、旧陸軍の文書、警察、政府の文書などであり、調査に当たっては、これらを自衛隊の資料室や東京都公文書館などに足を運んで直接確認した。
上記の、国の関与・指示による自警団（民間人）による虐殺行為と並んで、軍隊の行動という、純

粋に国による残虐行為が多数認められることは、この事件が国の責任による事態であったことを端的に示している。被害にあったのは、朝鮮人だけではなく、多数の中国人も犠牲になっていて、特に東京都江東区大島付近で起きた「大島町事件」や「王希天事件」という大規模な事件を含めて、委員会が史料をもって確認できただけで、それぞれ数百人規模の虐殺が行われた。

ただし、これらは軍隊にとっても違法な殺害行為であるから、ありのまま記録することは憚られたはずであり、おそらく実数どおりの記録として信用することはできないであろう。また、あたかも正当防衛による殺害であったかのように記載された例も見られるが、その記載内容を検討すると、多分にあやふやな推測による「急迫不正の侵害」に過ぎず、日弁連勧告書は、事実は到底正当化できるような事態ではなかったであろうと結論づけている。

7　国の責任を明確にしないまま放置したことの影響

これだけの国による虐殺、そして公権力が煽動した結果としての、国民による虐殺事件という人権侵害が大規模に行われたのに、国の責任を問うことは、その後一貫して全くなされないまま放置された。この無責任な事態が、その後の政策に、さらには日本の社会にどのような影響を残したかを考える必要があるのではないか。

当時の歴史をたどれば、一九二三年の朝鮮人虐殺の後、山東出兵（二七年）、満州事変（三一年）等を経て、一四年後の三七年には南京大虐殺事件が発生する。関東大震災において記憶に焼き付いたはずの、大規模な外国人虐殺事件の責任が曖昧にされたまま放置されたことが、わが国において、その後の他民族への差別と迫害を容認・助長する社会意識を醸成・継続させたことはないだろうか。

関東大震災における朝鮮人虐殺は大災害、南京虐殺事件は戦時という非常事態をそれぞれ背景にしているとはいえ、このような大規模な虐殺事件が軍民によって引き起こされる背景としては、他民族への差別意識が少なからず影響していると思わざるを得ない。そして本件において、上記のように明らかな国の責任が何ら問疑されないまま放置されたことは、公権力による差別的弾圧の正当化を意味している。すなわち被支配民族に対する公然たる差別の正当化が、そのまま社会的に承認され、まかり通ってしまったのである。このようにして、関東大震災における朝鮮人虐殺と、一四年後の南京大虐殺を経て進行する一連の侵略的事態に、歴史的な連続性と因果関係がないかどうか、国の重大な責任を放置したことの結果を検証しなければならないであろう。

8　近年の排外主義の高まり

現在も続く差別意識と排外主義、そしてさらなる攻撃性の高まりは、九〇年前の虐殺事件を思い起こさせる。

近年に至って日々報道される、新大久保（東京）や鶴橋（大阪）周辺をはじめ、各地における在日韓国人・朝鮮人へのヘイトスピーチ、ヘイトクライムは、「殺せ！」、「日本から叩き出せ！」など、その内容が攻撃性をますます強めているように見える。ヘイトスピーチとは、「差別の煽動」であると規定されるが、このような実情は、排外的意識や差別意識が攻撃的言動による煽動にまで発展しつつあることを示している。

近年著しく激化したように見えるこうした差別意識、排外的意識の攻撃化は、どこからもたらされているのだろうか。過剰な競争と「自己責任」を標榜する市場原理主義社会、格差社会は、多くの経済的弱者を層として作り出し、希望と展望を持てない鬱屈した空気が蔓延している。その不満と絶望感は、さらに「下層」たる弱者の層を必要とし、これを「在日特権への批判」という排除の論理をもって攻撃する行動で紛らわせるという連鎖を生み出しているように思われる。加えて、中国との尖閣、韓国との竹島をめぐる世論は、排外的・攻撃的論調を高めていて、国内の経済政策、社会政策への不満が対外的攻撃にすり替えられるというコースに向かわされている。しかし、こうした差別意識の根底には、九〇年前からの、公権力を挙げての、他民族への差別的支配と弾圧の歴史が存在するはずで

ある。すなわち、国家による他国への侵略と植民地支配に加えて、公権力によって煽動された民間人の他民族に対する不法な攻撃について、国の重大な責任が問われることなく、そのまま正当化されてしまったことの社会的影響を考えざるを得ないのである。

9　歴史の否定が行き着くところ

そもそも、現在においても数十万人の在日韓国人・朝鮮人が存在することの理由が、戦前における植民地支配と、おびただしい朝鮮人労働者の強制連行にあることは歴史的事実である。しかしその強制の事実の認識は、驚くほど日本人に共有されていない。在日韓国人・朝鮮人への排外的な攻撃と、歴史的経過を無視した「在日特権批判」という混乱した思考は、排除の論理であるとともに、植民地支配や強制連行という歴史的事実の否定を意味しているのではないだろうか。日本の侵略と植民地支配の結果として存在する「在日」という現象と、そこから生じている、彼らが置かれた理不尽な境遇や様々な困難を黙殺して、最低限の在留資格の制度すら「在日特権」として歪曲して攻撃する論理は、このような歴史的事実をすべて否認しなければ成り立ち得ないものだからである。

こうして、九〇年前の歴史的事実である関東大震災における朝鮮人虐殺についても、歴史修正主義というべき「虐殺否定論」が登場していることが指摘されている。これも、侵略の歴史と植民地支配の否定という点で共通した傾向であろう。本件の歴史的事実について、国の責任を放置することなく明確化していたならば、これほどの歴史の否定や、排外的風潮には至らなかったのではないだろうか。

南京大虐殺事件については、周知のとおり、いわゆる「南京虐殺マボロシ論」が繰り返し喧伝されてきた。現在、虐殺事件の被害者である夏淑琴氏を原告として、同氏を「偽物の被害者」であるかのように記載してその名誉を毀損した書籍に関する訴訟（中国判決に基づく執行許可請求事件）を担当しているが、被告である出版社を「支援する会」の集会では、「暴支膺懲」（「支那の暴戻を断固膺懲する」という当時の政治的スローガン）の幟が立てられたという。これも、まさにヘイトスピーチであろう。彼らのインターネット画面上の主張を見ても、歴史認識の主張よりも、中国共産党に支配され裁判官の独立が保障されない中国の判決が日本で強制力を持つことを、差別的な立場から批判しているのが特徴である。実体審理を行わない執行許可請求訴訟という特殊性があるとしても、ここでも、史実を巡る論争の形すらとらずに、他民族への差別的煽動と、排他性・攻撃性が直接表現される状況は、やはり異様に感じられる。

折しも、集団的自衛権の行使を憲法上容認しようという解釈改憲論が、政権政党によって打ち出されている政治情勢を前に、こうした侵略の歴史の否定というべき論調が台頭することには、この国が向かう方向に、「憲法九条の改変と社会の排他性・攻撃性の高まり」という危険な相乗効果を懸念せざるを得ない。

事件後九〇年を経過した今、遅すぎたとはいえ、もう一度その意味を考え直し、社会の認識を変えていく努力が必要ではないだろうか。周辺諸民族のみならず自分自身の未来と幸福のために。

（『関東大震災　記憶の継承－歴史・地域・運動から現在を問う－』　関東大震災 90 周年記念行事実行委員会編、2014 年日本経済評論社）

米倉勉（よねくら・つとむ）　1957 年生まれ。弁護士（渋谷共同法律事務所）。金景錫氏・戦後補償請求事件（日本鋼管における朝鮮人労働者強制連行事件）、夏淑琴氏・損害賠償請求事件（南京虐殺事件に関する名誉毀損事件）などを担当。

岩田健 母と子のミュージアム

正式名称は「今治市岩田健母と子のミュージアム」。2011 年 8 月、瀬戸内海に浮かぶ大三島（愛媛県）の西端・宗方地区に開館した。

「母と子」と主な題材に、温かな作風で知られる岩田健氏の作品 44 体を展示している。

展示スペースはコンクリート壁で囲まれた直径 30 メートルほどの真っ白な円形空間。半野外でベンチがいくつも設置されている。瀬戸内海の光や風、青い空、緑の芝を感じながら、ゆっくりと彫刻を鑑賞できる。世界的に活躍する伊東豊雄氏による建物も見どころの一つ。

隣りには小学校の木造校舎を利用した宿初施設「大三島ふるさと憩の家」がある。





エントランス（左）と遠景

今治市 岩田健 母と子のミュージアム

〒794-1309　愛媛県今治市大三島町宗方 5208-2
電話：0897-83-0383
www.city.imabari.ehime.jp/bunka/iwata/

開館時間：午前 9 時～午後 5 時
休館日：月曜日（祝日の場合は原則翌日振替）
　　年末（12 月 27 日―31 日）
観覧料：一般 310 円　学生 160 円
　　※団体（20 人以上）、65 歳以上は 2 割引
　　※高校生以下または 18 歳未満無料
　　※障害者とその介護者 1 名無料



河正雄コレクション　資料集　第３号

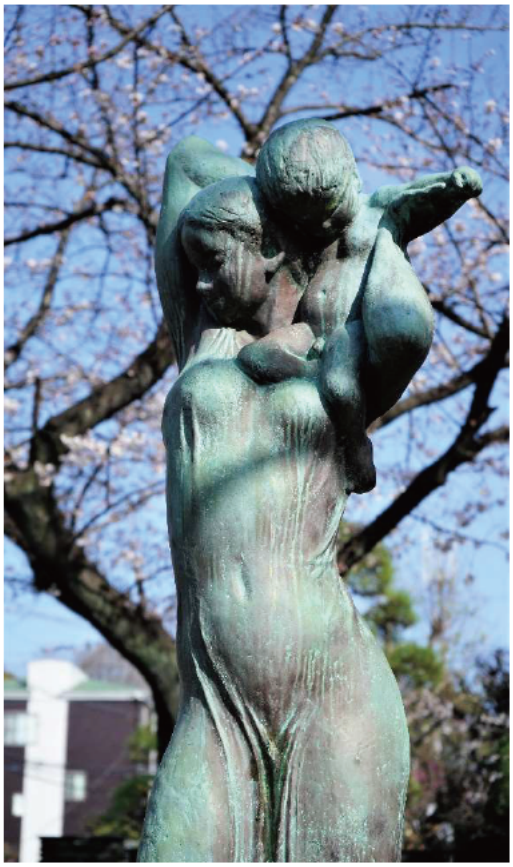
岩田　健

2021 年 4 月 20 日発行

発　　行　　河 正雄

https://www.ha-jw.com/
編　　集　　菊地 正志
印刷製本　　株式会社双信舎印刷
非売品

表紙写真：「二人と猫」　　裏表紙写真：「昼の母子像」



河正雄コレクション　資料集　第３号

岩 田　健